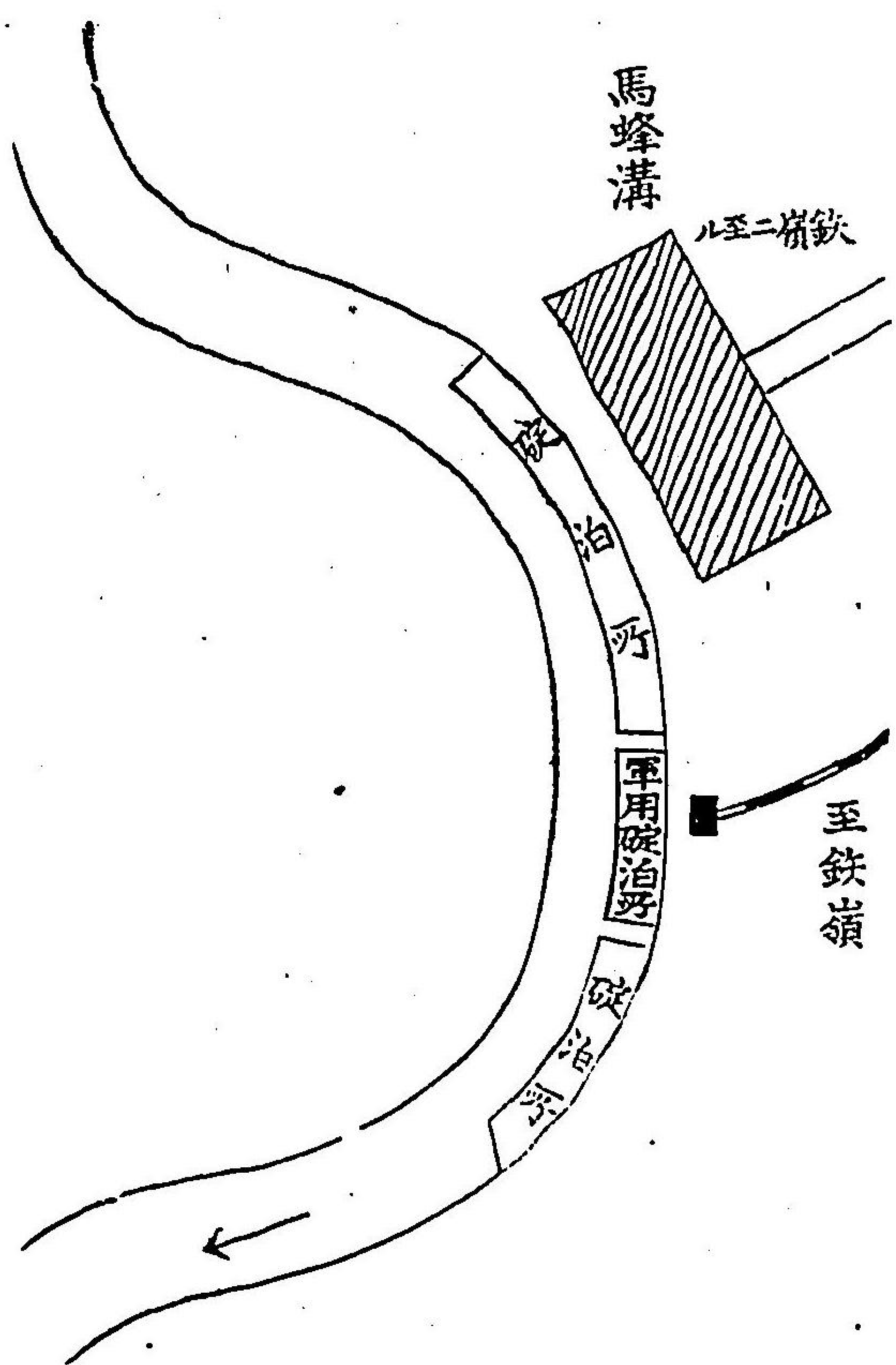


備ふ吾人の訪ひしときは支那ジャンクの碇泊するもの約二百餘艘あり最多きときは殆んど千に達すと云ふ其交通の頻繁なること實に豫想の上にあリ。

鐵嶺に集る大豆は年々四十萬石に及び其大部は實に此地より水運によりて營口に運ばる。即夏季は陸路によるときは、道路泥濘車軸を没し歩行頻る難く、運賃に多大の費を要し、且運搬日數の久しきを要する爲め、殆どすべて水運による。船は大抵四十石より六七十石位を積み、船中を箱の如き構造となし、中に大豆を包装袋の媒介なく、直ちに入れて運搬す。我國にて袋に入れ、或は俵に入れて、俵々相



重ねて積み込み以て運ぶに比すれば、頗る簡單なり、かくして水量の増加せし時を見て下る、而して河中淺瀬の多きと水量の増減著るしくして危険多きが爲めに、船行の際には萬一を慮りて、五隻以上十隻位聯絡して下るを常とすと云ふ。船の種類は主として手子槽子の二種なれど、槽子多くして手子少し、増水時には槽子百石積のものもこの地に來るを得べく、現に吾人は多く之を見たり而してこの地より營口に至るまで約五百浬普通下航九日上航十六日を要す。等の船は營口に至り大豆を卸ろし問屋の手に渡し再び河を遡るこの時には鐵嶺及其附近にて要する種々の雜貨を積み來ると云ふ。されど吾人の見たるときは、營口より積上ぐべき貨物殆んど皆無の由にて、皆空船のまゝ上り來りつつありき。

今より十數年前までは、馬蜂溝は遼河水運の最北端なりしが、今は上流約二十里にある小塔子まで船楫の便開けしを以て、大に昔時の繁榮を殺がるゝに至りたり。現に我陸軍々用船は、小塔子迄遡るに至れりと云ふ。馬蜂溝小塔子間に通江口といへる河津あり、小塔子の下流三里半許のところ位に、亦遼河航路の終點小塔子迄遡らざる當時の終航點たりし所にて附近及び東蒙古よりする物資の集散地として頗盛なり。又日清協約に據れば、滿洲の秩序回復するを待ちて開放せらるべき一河

津たり。

馬蜂溝には又我陸軍々需品揚陸所あり、中央の最良所を占め、碇泊頗る便なり、茲に揚陸せし物品は、直ちに輕便鐵道によりて鐵嶺に運ぶ、三十七八年戰役の際我軍は、漚車により糧秣輸送をなせしに、一日の運搬量僅かに軍隊二日間の用に供し得るに過ぎず爲めに給養上頗る困難を感せしが、營口占領後諸般の準備成ると共に、本國より海路直ちに營口に至り、更に遼河の水運を利用し、馬蜂溝に軍用揚陸所を設けて、盛に輸送を開始してより、茲に始めて其供給も充足せしめ得るに至れりといふ、以て遼河の水運の如何に、重要な位置を運輸交通の上に、占むるかを知らるべし。

遼河を越ゆれば、對岸は即遼西なり、遼西の大臺山附近に至れば、中生層、侏羅紀に屬する石炭を産すと云ふ、西營盤の炭坑は即これなり、該炭坑は西北、河を隔て、四里餘の所にあり、専ら清人の採掘する所にて、其採掘術頗る幼稚、これを見る亦一奇なりと云ふ、されど時間足らずして此珍らしき炭坑も見るを得ざりき。

午前十一時歸途につき、正午宿舎に着く。

馬蜂溝は今や、其勢力の幾分を通江口に奪はれ、又昔日の盛觀なしと雖も、此港は鐵

嶺の附屬港として存するものなれば、鐵嶺の亡びざる限りは必ずその繁榮を保ち、重要な位置たるを失はざるべし、而して鐵嶺は既に述べしが如く、滿洲南北の咽喉に當り、軍事上重要な地たるのみならず、附近に豐沃なる平野を控へ、商業の點に於ても、忽にすべからざる地なれば、今後我國は充分の力をつくして是が經營に當るべく、鐵嶺は益々繁榮に赴くべし、從て其附屬港たる馬蜂溝も、或は今日以上の盛況を再びするの機有るべし、今後鐵道の設備充分なるに至らば、いざ知らず、否、假令鐵道完備したりとするも、尙ほ貨物の運搬は、鐵道によるよりも、水路によれば、運賃の點、運搬力の點に於て、多大の利益あるべければ、水路の利用は益々大となるべく、且つ滿洲の陸路夏期は殆んど車馬を通せざるを以て見れば、鐵嶺の繁榮となるに、つれ馬蜂溝の盛を豫想する事、強ち理無きにあらざる可し、唯吾人の憂ふるは、此地に於ては碇泊場に何等の設備なき事是なり、鐵嶺附近にて産する大豆の我國に輸入せらるゝもの年々其量を増し、又我商品の鐵嶺附近に販賣せらるゝもの日進の様なれば、我國にては鐵嶺の經營につくすと共に、一方馬蜂溝に於て相當の設備をなさんか、彼我を利する事少小にあらざるべし、是れ吾人の切に望む所なり。

午後七時過ぎ宿舎を出で、南行の列車に搭じ、午後八時三十分出發して遼陽に向ふ。

七月二十八日 晴

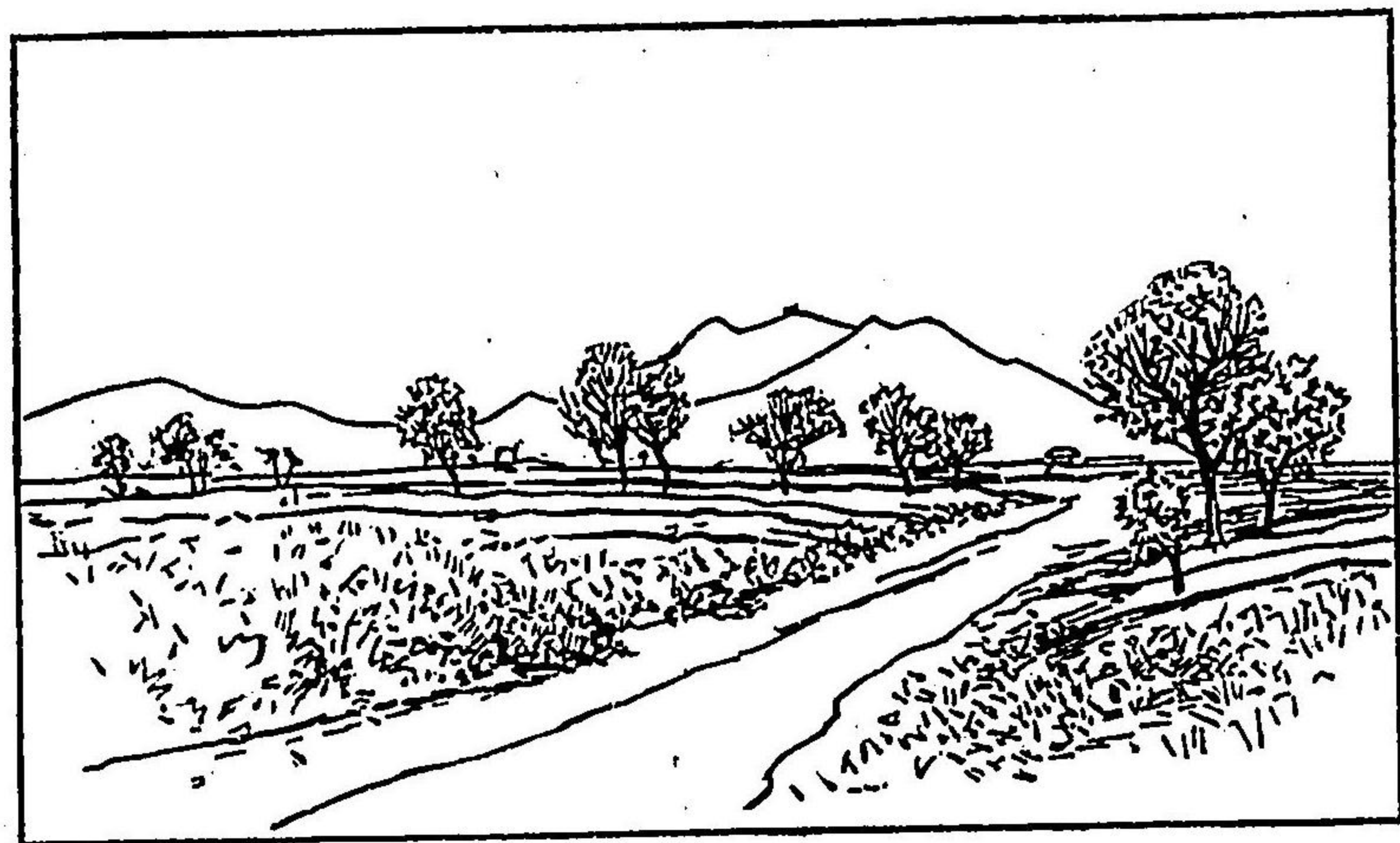
日程 遼陽滞在

昨夕鐵嶺より夜行列車にて南行し、遼陽停車場に到着せしは、此日午前三時なりき、導く兵士の後を追ひて闇を辿ること約三町にして宿舎に入る。これ亦露人經營の紀念物大なる柱厚き壁等に、彼等の計劃を思ひ浮べつゝ、夜の明くるには猶時あれ

ばとて、皆寢に就く、
眠より醒むれば、日ははや白塔寺の彼方に上りて旭日の光をうけて輝ける雲の美しきを見る、附近を散歩して早くより耳にしたりし、露人大經營の跡を見る、

午前八時宿舎より程近き兵站部炊事場前に集合し、二隊に分れ騎馬の特務曹長に導かれて首山堡に向ふ、

首山堡までは道程約一里半あり、道は坦々たる平野の間を通ず進むこと數町にして、右側に遼陽招魂社あり、立寄りつゝ参拜し、附近に多く築かれて、當時の面影残れる角面堡、狼狽等に戦争當時の光景を偲びつゝ、鐵道線路に沿ひて進み九時三十分、首山堡山下に至り急斜せる山腹を攀ちて山頂に上る、この山高き、僅かに九十九米



首山堡山麓

にすぎざれど、平野に屹立するを以て、傾斜頗急に、眺望亦佳なり、南は遠く鞍山站を望み、東方一帯は長白山支脈の連互する間に太子河谷の稍開けたるを見、北は直ちに遼陽を指顧すべく、西方一帶、茫漠たる遼河大平原を望む、眺望の雄大なること多く其比を見ず、
山上に於て、前記准士官の日露戦役遼陽戦の概要を聴き、中食を済ましたる後、山の東側に下る、
四、中腹に一寺あり、清松寺と云ふ、珍らしくも松樹茂れる間に在り、一山を下りて、南方鞍山站より遼陽に通ずる大街路を北進し、東八里庄に至る、
この邊の道路は、大道なれども、水を濫え、泥濘頗る深く、殆ど歩すべからず、人は皆雨側や、高き如地の端を歩す、この日暑さ最烈しく、殆ど堪へべからざるの思あり、

東八里庄に村落生活の状況を明かにし、更に進んで遼陽に近づき、西門より城内に入り、市街の各所を見る、城内を出て、宿舎に歸るべき道は即本邦人の最多く住居するところにして、その如何に活動せるかを見るに足る、故に城内の視察を終りて更にその状況を見つゝ宿舎に歸る。

遼陽の位置

遼陽は奉天府城の南々西三十哩にありて、北緯四十一度二十分、東經百二十三度十五分に當る、南滿洲内地にて奉天に次げる繁華の地にして、人口約四萬、商舖一千餘あり、東南及び東北には、長白山の支脈來りて連山起伏せるも、西及び西北一帯は、遼河流域の沃野に連り、一望渺漫際涯を見ず、太子河は東方威厥賽馬集地方の水を集め來りて城北を流れ、河身大に、水量豊にして結氷期の外は營口よりこの地に至るまで常に舟を上下するを得べく、遼陽に於ける重要な交通機關たり、明治三十四年に至り東清鐵道の南部線開通せられて北は奉天哈爾濱に通じ、南は營口大連及旅順に及び、順に交通の便を加へたり、露國はこゝに二等停車場を置き、附近二百萬坪を買占めて市街地とし、大規模の設備をなし、南滿洲の中央市場露西亞勢力の根據地たらしめんとす、計劃ありしといふ、今や戰勝の結果、此鐵道長春以南我有に歸

し、日々列車を發して盛に旅客貨物を輸送せり、道路又四方に通じ、東北奉天より烟臺を経て來れる大道は、此州城を貫きて、首山堡より海城に達し、東南鳳凰城を經、安東縣に向ふものは、軍道にして、滿韓交通路中第一に位す、其他北して長灘より、新民廳に行くもの、南方家屯より、柞木城に至るもの、等數條あり、此地は實に滿洲と支那本部及韓國とを連ね、遼東の山地と遼河の平野とを結ぶ重要な地點にして、四通八達の要衝に當り、順る形勝の地を占め、奉天と共に南滿洲に於ける、物貨集散の一大中心たり、而してその商業上の取引に就きては、營口と最密接なる關係を有し、營口の巨商富賈は、孰れも支店又は出張所を此地に設く、故に營口の商況の順逆は、直に此地の商業界の盛衰となるものなり。

遼陽の沿革

遼陽の地は、南滿洲の策源地として、古來青史に顯はるゝもの甚だ多く、其沿革を研究するは頗る興味ある問題なり、唐虞三代には、禹貢青州の域と稱し、周の武王が箕子を朝鮮に封せし頃には、遼陽は其西界たりき、秦に至りて遼陽郡を置き、漢はに襄平、遼陽二縣に分ち、東漢に至りて遼陽縣を削り、元菟郡に屬せしめたり、南北朝の際には高麗の領土に歸し、壯大なる遼東城を築けり、今州城の東北に其遺跡あり、唐の太

宗李勛を遣して高麗を征伐せしめ、遂に之を平げ、安東都護府を平壤に置き是と共に遼東を改めて遼州と稱せり、是より遼陽再び支那の版圖に入る、後安東都護府を遼陽に移し、遼東の首府とせり、遼の時代には遼陽城を葺て鐵鳳城となし、後南京となし、天福城と名づけ、次で又改めて東京と云ひ五京の一となし、宮殿を建築し、城壁を修めたり、然れども今は殆んど遺跡を確證するに由なし、金に於ても東京といへり、元に於ては遼東路とし、明には縣を廢して遼陽鎮を置き、舊城によりて新に城壁を築造し、六門をおけり、清朝の初め、天命六年都を遼陽に定め、東京と稱せり、當時の都は太子河を隔て、對岸に在り、新城と稱するもの即是にして、一の大なる屋敷の如し、後天命十年、奉天に遷し、東京遂に廢せらる、何故に清朝が奉天に遷りしや、思ふに種々の原因あらん、他人の都せし所に居りては、威嚴に關するを以て、新都を營みしといふも一理ならん、されど地勢上より考ふれば、長白山の麓より興りたる清朝が、北京を征し、中原に出でんには、成るべく河を渡るを少くする必要あり、或はこの點よりして、奉天を選びしにあらざるか、若し然りとすれば、今日に於ては大に形勢を異にするものあるを以て、必ずしも重きを奉天に置くの要なからむか、順治十年に至り、又遼陽府を置きしも、十四年に至り、奉天に合併せり、康熙三年更に又遼陽州と稱

し、奉天府に屬せしめ、今尙知州を置きて之を治む、日清戰爭の際は、我軍は鞍山站以北には進軍せず、爲めに此地は戰鬪區域たるを免れたり、明治二十七年十二月十三日、日本軍は海城を占領し、奉天、遼陽、海城、蓋平の守兵と北京との連絡を遮斷せり、清將宋慶は此要衝より日本軍を撃退せんと欲し、營口より大軍を率ゐて北進し、同時に遼陽の兵を出して、我軍を夾撃せんとせり、而して宋慶の軍は遼陽軍の至るを待ちて、蹶瓦寨に止まりしに、我軍は時を假さず、直に宋慶を攻めて牛莊に撃退せり、翌年一月十三日に至り、海城にある我軍は、二萬の清軍徐々として、遼陽より來るの報に接せり、十七日に至り、清軍は城壘に接近し、砲撃せしも、却て撃攘せられたり、一月二十二日、清軍再び海城恢復を計りしも、成らず、其後我軍蓋平を取り、牛莊を奪取して、馬關條約茲に成りて、日本軍の滿洲遠征はこゝに終局を告げたりき。

日露戰爭に於ける遼陽

既に述べたるが如く、遼陽の地たるや、東は重嶺に連り、西は曠野に接し、水運の便あり、鐵路の利あり、道路四通し、自ら南滿の中樞たり、殊に露國はこの地を以て、南滿洲に於ける根據地となさんとし、力を盡して、その經營をなせり、されば我軍一度之を占領せんか、以て敵の南滿洲に於ける總ての經營を破壊し、企圖を斷念せしむるに

足るべきも、若し然らずして、此地猶彼の手中に在らば、南滿洲の運命、未だ知るべからず、敵は我軍に對し、有利の作戰をなすこと亦、難きにあらざるなり、露軍が開戦以來、一大土工を起して、其四周に半永久的防禦工事をなし、大兵を集中して、一大決戦を試みんと企てしもの、誠に宜なりといふべし

而して我軍の主力が、旅順の要塞を背後にし、進んで遼陽に迫りしは、頗る冒險に似たりと雖も、實は然らず、旅順は尙檻中の病虎に等し、充分に攻圍せられたる要塞の遂に陥落すべきは、古來戰史の示す所、些の疑を抉むの餘地なし、然るに遼陽の敵に至りては、全く之れと情況を異にす、情報によれば、彼は更に數個軍團を増遣せんとし、已に其一部は、日日滿洲に到着しつゝありと云ふに、あらずや、まことに一日曠せば、一日の損あり、是れ我軍の猛然起て北進の鋒を鋭くし、一大決戦を爲さんと欲せし所以なるべし、彼が此決戦に使用せんとして集中せし兵力は、歩兵殆ど二十萬に近かるべく、加之、彼得利寺の敗後、遼陽を決戦地と定め、五ヶ月の日子を以て、附近の要地に無數の半永久的防禦陣地を構成し、よりて以て、我軍を阻止して、頽勢を挽回せんとし、之れに向ひし我軍亦、連戦連勝の後をうけて、士氣大に振ひ、一舉にして敵を勦滅して、この要地を奪取せんとす、實に彼我主力の衝突にして、本戰役の關ヶ原

といふべく、其重要なことといふを俟たず、此際に於て、獨り人意を強うせしは、常勝軍たる我軍が此會戦にも、必ず勝利を得て、武威を海外に輝かすならんとの信念を有せしことなり、

各特殊の任務を帯び、各方面より遼陽に向ひ、所在の敵を破りつゝ、前進したる我各軍團は、七月末より八月三日の間に於て、個々に、遼陽外郭の榆樹林子、様子嶺、柞木城、海城等の各地を占領し、其後暫く鋭を養ひ、雨期の終了と共に、總司令官の指揮の下に、統一せられたる連繫運動を取り、茲に各方面より一齊に遼陽の主力に向て大攻撃を開始せり、

黒木大將の率ゐる右翼軍は、八月二十四日より運動を開始し、二十七日には紅沙嶺、高峯寺に亘る線を占領して、尙進撃を續行し、三十一日には、軍は主力を鎌刀灣に於て、太子河右岸に移し、其一部を左岸に残置し、中央軍と連繫して動作せしめ、九月一日より四日までは、黒英臺方面にて、劇戦の後、遂に之を奪ひ、太子河左岸にある敵を敗走せしめたり、海城、遼陽街道を前進せし、與大將の左翼軍は、鐵道線路以東を北進する野津大將の中央軍と提携し、廿六日より運動を起し、敵を壓迫せり、翌日下房身、鞍山站の防禦陣地によれる強大なる敵は、遼陽方面に退却を始めたり、依て直に猛

烈なる追撃に轉じ、敵を沙河以北に撃退し、二十九日尙追撃を續行す、敵はヤエチ高地より首山堡西方標高99高地に亘り、堅固に陣地を構成せしも、九月一日拂曉、中央軍は激烈果敢なる強襲により、首山堡の高地を全く占領す、敵は遂に遼陽に退却し、我兩軍直に追撃前進す、敵の主力は太子河右岸に退却せしも、尙一部は遼陽城南西を圍繞せる堅固なる堡壘線、及東北高地に據り頑強に抵抗せり、我兩軍は九月一日より三日夜に至るまで、多大の犠牲を出したるにも拘らず、攻撃を繼續し以て敵の堡壘線を奪取し、四日朝に於て全く遼陽を占領し凱歌を奏せり、嗚呼、是何等の快事ぞや、日露の運命を定むべき此大野戰に於て我軍已に此の如き偉功を奏せり、五千萬の同胞が狂喜して、祝捷に汲々たりしもの偶然にあらざるなり、

斯の如く中央及左右兩翼に分れ三方より攻撃せしが、左翼軍の奪取せる新立屯より右翼軍の占領せる黒英臺までは、戰線十數里に亘り、交戦連續すること一週間、我軍の死傷二萬三千ありしといふ以て其如何に大決戰なりしかを知るべきなり、之を要するに、敵の大敗は黒木軍が迂回して遼陽背後に出で敵の退路を中斷せんとしたるにより、茲に影響を鞍山站方面の主力に及ぼし之に加ふるに、左翼軍中央軍の強烈なる壓迫ありしを以て、敵は鞍山站の好陣地を防守するを得ず、第二陣地

たる首山堡、新立屯方面に退却するの已むを得ざるに至りしに乘じ、我軍は直に追撃を決行したれば、敵の頽勢愈加はりて、遼陽の正面防禦陣地に踏み止まり、最後の防戦すら爲すこと能はず大混亂を惹起して潰走するに至りしなり

城内の状況

遼陽の城廓は、停車場を東北に去ること六七町にあり、東西約二十四町、南北十八町の長方形にして、城壁の高さ、二丈餘、六門ありて城外に通ず、東は綏遠、西は順安、南は南門、北は拱極にして、更に南門の東部に文昌門あり、東門の北部に普安門あり、此地の戦は城外西南の地にて演せられしを以て、此附近の露國官衙も、支那街も、兵燹にかかりしもの更になし、主なる市街は東街、西街、南街、北街、二道街、三道街等にして、人馬の往來繁く最も殷賑を極むるを東街西街となす、大街路は巾六七間あり、兩側には煉瓦又は石造の平家櫛比し、店頭赤紙の招牌を貼付し、種々の物品を賣れり、其飾付の如き毫も意匠を用ひず、

城内の戸數、人口につきては満足なる定數を與ふるは至難のことなり、清國にては、戸口調査不完全にして、唯面積等より測算したる概數を示すに過ぎず、然れども遼陽城内にては、近頃警察制度の發達に伴ひ、戸口の調査に従事せる結果、畧其の數を

知るを得たりといふこれによれば戸數五千三百四十二、人口三萬七千七百六十ありと然れども、もとより精確なりと斷言するを得ず。

遼陽は滿洲唯一の舊都たるを以て、従來外省との交通烈しく、従て各省人民の移住し來れるもの少からず、就中直隸山東の人を最も多しとなす、されど土人と混同して殆んど識別すべからず、清朝、旗民の別を立て滿漢を分ちたれども、漢人は人口の八割を占めて諸般の勢力を有し、旗人は高牙籠的の態度をとれるが如し、されど此地は遼金以來榮えし處なるを以て、自から人の品格も具はれり、婦人は纏足をなせるもの少く、殊に此地婦人の特徴として、頭髮を高燈亮兒と稱する梳法に曲げて結へるもの多し、其の形我が稚兒鬘を更に擴大して、後方に屈せるものゝ如し。

諸官衙の主なるものを擧ぐれば、

州衙門は市の中央十字街にあり、遼陽州内を統轄する政廳にして、長官を知州と稱す、州の行政、司法、警察に關する全權を掌握す、現任知州は何厚琦といひ、山西の人なり、遼陽州は東西約五十里、南北三十五里あり、州としては廣濶に過ぐるを以て、早晚府に改め、中に二縣を置き、府尹をして統治せしむべしといふ。

旗衙門は、東二道街にあり、旗人を治むる軍政の衙門なり、其の長を城守尉といふ、曾

ては、此處にて事務を執りしも、今は貧民、其の内に起臥し、頽廢して衙門の形態を具へず、守尉も公館中に生活して、こゝに出勤することなし、今の城守尉は德裕といひ、宗室の出身に係はる。

巡警總局は、昨年創立にて、城内の警察、衛生並に交渉事務を執掌す、中に警務學堂あり、總辦には何知州之に當れり。

税局には斗秤局、糧貨局、馬稅局、木稅局等ありて、事務を分擔せり、遼陽に於ける徵稅には、知州自ら之をなすと、城守尉の課するものと、二者の共同によれると、奉天將軍が委員を派して徵せしむるとの四種あり。

學校には師範學堂あり、本邦府縣師範學校の課程に準じ、生徒百名、教師には本邦人二名あり。

各商店の有様を述べんに、此地は商業上の要地に當り、貨物の集散大なるを以て、巨商頗る多く、十萬圓以上二百萬圓以下の財産を有するもの、四十餘家ありと云ふ、商家の多くは營口、其の他の市城と連絡を有し、種々の取引をなす、舖店の構造の如きも、南方と大に趣を異にし、皆圓柱を用ひ、彩色を施し、恰も寺院の如き觀を呈せり、主なる商店の種類を擧ぐれば、

燒鍋行は即燒酎製造所にして、其大なるもの十三戸あり、皆高粱を以て醸造す、其法は先づ高粱を碎ける叉子といふものに、少量の小豆麥蕎麥等を以て造れる麴の粉末を混和し、窖に入れて醱酵せしめ、四日の後窖より出して屋内の地上に撒布し、更に麴を入れて攪拌すること約一時間にして、湯釜の上に装置したる圓形の木桶に入れ、中央に經一尺許りの孔ある蓋を蔽ひ、周圍より蒸氣の洩れざる様になし、釜下の爐火を盛にす、此時天井より釣下げられたる錫筒を以て、蓋の中央部にある虛孔を密蔽し之に冷水を注ぎ、始終攪拌しつゝ、下より蒸發する所の水蒸氣を凝結せしめたるもの、即燒酒なり、製品は約三升入りの瓶に入れて發賣す、一日一釜に就て二回蒸溜を行ひ、一回に七百斤を得るといふ、此製法は舊式なるも、亦頗る輕便にして精良の燒酎を得ること少からず、一年の總産額百萬提、代價三十萬圓ありといふ、一提とは一瓶なり。

雜貨店は内外雜貨及絹織物綿布等を販賣する舗店にして、其大なるもの四十餘戸あり、貨物は多く營口より輸入し來る。

木行は材木商にして、大なるもの凡そ二十戸あり、威廠賽馬集附近より、河流を利用して運出し來るものを賣買す、東門外に到れば此等木材の河岸に堆積せらるゝも

の萬を以て數ふるを見るべし

錢行は銀行の小なるものなり、遼陽に於ける金融機關は奉天營口の如く完備せず、只僅かに錢行と當舖あるのみ、錢行は貸金爲替預金を業とし、時々錢票を發し、遼陽商業界の爲に金融を調和する最有力の機關なり、當舖は質屋の如し、されど現今は錢票濫發の弊其の極に達し、不信用頗る甚し、前知州沈氏は貨幣制度の紊亂を防ぐ爲に、錢行燒鍋行等十一行の大商を株主として、公立銀行を設け、紙幣發行の權をも賦與し、舊錢票の回收を勉めしも、容易に挽回する能はざりき、現今市場に流通する貨幣は、元寶銀、銀貨、銅錢、錢票、紙幣の五種あり、元寶銀は馬蹄銀にして、量目を以て取引をなし、銀貨は各省にて鑄造したるもの、及日露のものなるが、賸貨多し、銅錢は鑄造年次を異にし、重量も多少の差あり、錢票は兌換紙幣にして、其額一様ならず、紙幣は北清事變以來露國のもの通用せしが、今や我軍用手票之に代れり。

其他牛皮を仲買する牛皮行、船問屋なる船店、鐵類を賣買する鐵行等種々あり、已に商店の事を記したれば、之より進んで商業貿易が如何に行はれつゝあるかを研究せん。

遼陽一年中の商業繁盛の時期は、春秋兩度にして、春期は遼河開河後、即ち四月より

六月頃まで、秋期は河水結氷前即八月より十月の初までなり、夏季は降雨多く道路泥濘となり、交通不便なるを以て商況閑散なり。

遼陽及此附近にて生産せる物資にして、此地の商人の手を経て賣出さるゝもの實に少からず、其大部分は農産にして、毎年太子河を利用して營口に輸出せらるゝもの、大抵三百萬圓より四百萬圓あり、其の主なるものは大豆、豆粕、燒酒、棉花、米、雜穀等なり、大豆間屋は三十餘戸ありて、年々二十萬石位、此市に聚集す、油房即ち豆油搾取場も大なるもの十餘戸あり、其糟は豆餅といひ、肥料に用ふ、燒酒は滿洲内地の特産にして、遼陽は其製造殊に盛なり、棉花は多からず、米は遼陽青と稱し、遼陽の西北數里の間に作る滿洲中最も名あれども、その耕作區域頗るせまく、その産額も少し、高粱、黍等の雜穀も年々約三十萬石を出し、太子河上流より輸送し來る木材も、此地を経由して各地に出すもの十萬兩以上の取引額ありといふ、此地又家具、棺柩の有名な産地なり。

而して遼陽にて消費せられ、若くは此地を経て附近の市邑に分布せらるゝ輸入品の主なるものは、綿布、綿糸、石油、燐寸、煙草、雜貨類なり、此等は多く外國産にして、内地産には吉林、蒙古、遼西より來る皮類、阿片、羊、豚、藍靛等最も多し、總額は明かならざれ

ども、年額三百萬圓を下らざるべし、南清地方の如く華奢の風習なき故、綿布の需要頗る増加しつゝあり、洋布は英米より入れ、日本の綿は漸次輸入の傾向あるも、絹、瓦斯織は只上流に用ひらるゝのみ、綿絲は印度製最優勢なるが、本邦絲も賣行きよし、石油は米國産を主とし、燐寸は本邦品獨占の姿なり、煙草は從來日露の製品相競争せり、雜貨は毛布、手拭、時計、陶磁器等にて日、英、米、獨、露諸國産のもの一張一弛の勢を有す、要するに遼陽貿易を概言すれば、原料品粗製品を出して精製品を入ると云ふべく、又一面よりは飲食物を賣りて衣服器具を買ふものともいふべし、これ未開地の常として、沃野開け農産物豊なるも、工業興らず製作品乏しきによるものにして、たゞにこの地のみならず、滿洲全部皆この状況に在り、されど遼陽は營口大連の海港と滿洲内地の諸都邑との間にあるを以て、南方の輸送を受け、北部地方の商品仕入所となり、取次所となるに最も適當なる位置にあるを以て、將來大に發展の見込ありと云ふべし。

而して此市城の商業貿易の経路、即ち交通機關は如何にと言ふに、東清鐵道は州城の西門外を通過し、滿洲の平野を貫通し、北は哈爾濱より南は營口大連に至る哈爾濱まで約三百七十六哩、營口まで七十哩、大連まで二百十哩あり、水路は、東門外を流

る。太子河あり、營口に至るまでは舟運の便を有し、鐵道開通前は遼陽に於ける唯一の交通機關たりき。此河は成廠地方の溪谷に源を發し、西流して遼河平原に入り上下する船は槽子及び手子といふ、二種の河船にして五十石乃至七八十石積なり。奉天南方より來る渾河と合し、西南に流れ、三叉河に至りて遼河に入る。遼陽より上流は淺くして、且淺深一ならず、舟運の便なしと雖も、猶上流地方より材木を出すに足る。下流は水深くして、水量多く頗る舟運の便あり時には槽子船百石積のものも遼陽迄至るべし。營口との間、下行は三日乃至五日にして達すれども、上行には二倍以上の日子を要す而して水運には船房と稱するものあり、荷主と船舶との間に立ち、萬般の處理をなす。

附近の市鎮との間に貨物を運搬するには、多く馬車苦力等を使用することに、冬期河流結氷中は主として馬車による。馬車は實に貨物運搬の一大機關たり、現今遼陽に存するもの三千餘ありと云ふ。苦力は頗る多く運搬事業には一大勢力を有す。例の山東省より出稼するものその主要なる部分を占むと云ふ。遼陽郵便局も昨年九月より普通郵便を兼掌し、電報局にても、昨年十月より公衆電報を取扱ふ。既に述べたるが如く、此地は頗る形勝の位置に在り、軍事上にも商業上にも頗る重

要の地なれば、此地の我勢力の下に立つに至りてより、我國は大にその經營に力を用ひ、着々として事業を進めたり。今や此地には第十六師團司令部あり、これに屬する第六十二聯隊あり、以て軍事上の勢力を固め、又經濟上にも大に我勢力の發展を謀れり。戰時行動中は、邦人の居住を許す運びに至らざりしが、昨三十八年七月に至り、始めて移住を許すこととなり、爾來本邦人の來住經營するもの日に月に多きを加ふ。就中營口より至れるもの最多く、大連より來るもの之に次ぎ、韓國より至るもの、若しくは酒保等の戰地解除となりて、其儘開店したるもあり、内地より直行するものは殆なし、總數凡千三四百人ありといふ。是等商人の多くは、西門外より城の外濠に沿うて白塔寺に至る間に、住所を構へたるも、一時的經營をなすもの多く、永住の目的を以て着手するものは甚だ少し、其生業の最多きは雜貨店、料理店、飲食店等にして、其他賣藥、洗濯、菓子、酒店等あれど兼業者頗多し。遼陽に在留する本邦商人は、日本人會を組織し、在留邦人と關係官衙との連絡を確保し、相互の親和を務め、事業の發達を計り、緩急相助けて公益を廣むることを目的とし、頗る好結果を呈せるが如し。

遼陽附近の名跡

遼陽は滿洲に於ける最舊の都城にして、日本の京都奈良の如く、種々の舊跡に富み、史に顯るゝもの少しとせず、されど今は殆ど考ふべきものなし、而して又城内水の疏通頗る宜しく、水溜少くして比較的清潔に、附近にも景色佳良なる處頗る多し、或人の「戰場の遼陽八景」といふを見るに、次の如し。

太子河の大江、之に架せる鐵道の長橋、周圍二里餘の城壁、高さ十五丈の高塔、自然に宇をなす首山堡、遙に馬鞍をなす鞍山站、近く峯巒重疊する千山、連峯の翠黛、遠く眼界際涯なき遼河平原の落日。

東京城の遺跡、遼の太祖、遼陽の故城を葺め、鐵鳳城と稱し、後改めて天福城といひ、南京となし、後東京と改稱せり、金元皆之に因れり、當時に於ける遼の宮殿は今の州城の東北隅にあり。

清朝の初めにも、都を遼陽に定め、東京城と稱せり、然れども、當時の東京は今の州城の東北太子河の東にあり、今は新城といふ。

白塔寺、停車場を去る二三町の處に高塔あり、高さ十五丈、其地盤は方十五間計り、高さ二間餘、土を盛りて築き、周圍は角石を以て組立てたり、前面の階段を上れば銅製の佛像高丈餘のもの二つを安置せる蹟あり、塔は此地盤の中央に立てられ、煉瓦に

て築き、六角形十三蓋あり、六方の各面には、佛像を浮彫し、上方十三階の屋蓋は、瓦にて葺き、各屋角には、舞花形の釣鐘を吊下げ、最上層の屋に尙高五間計りの小塔を立て、屹然雲際に聳ゆる偉觀は、淺草凌雲閣の比にあらず、而して今回の戦役にて敵が此附近にて防戦せしを以て、處々彈痕を印す、好箇の紀念物といふべし、塔下に寺あり、廣祐寺といふ、其白塔ある故、白塔寺とも稱す、漢代の建築に係り、千有餘歳の星霜を経たる古刹なりといふ、寺の内に自來佛といふ佛像あり、此佛小童と化じ、郷民に負はれ來りしと傳ふ、もとより信すべからず、古來此地を過ぐる文人騷客皆此寺を訪はざるなし、然れども露の南下以來、此名跡も蹂躪せられ、今や白塔の下變じて、絃歌の巷となり、昔日の森嚴間ふに由なし。

關帝廟、支那人は、關羽を國民的英雄として尊信し、到る處の都邑、其廟を設けざるはなし、只其の規模に大小の別あるのみ、遼陽に在るは稍大にして、西門外の小丘の上にあり、元の至元元年の建設に係はる、五門あり、奥殿の前面に伏魔殿なる大額を掲げ、正面に關羽の肖像を安置せり、四面の壁間には、古代名家の筆に成れる繪畫、隙間もなく描かれたり、古代美術の進歩、驚く計りなり、殊に三國誌の全幅を畫けるものは、大に珍とするに足る、然れども、今や半廢頽し、人畜の入るに任せ、顧みるものなし。

文廟、孔子以下列聖を祭る處にして、支那二十二行省中、各府州縣、此廟の設なきはなし、遼陽東門内にもあり、元時の創設にして、構内頗る廣く、稍清潔なり、魁星樓、城壁の東南隅に屹然として聳立するものにて、同治七八年頃の築造に係り、天文の觀測をなせし處といふ、今は唯往時の一遺物たるに過ぎず、

寺院及墳墓、城内に四大廟と稱するものあり、城隍、火神、主神、娘々の四廟を併稱するものなり、皆近代の建築なり、其他老爺廟、藥王廟、金銀庫廟等あり、此等には廟會として我國の縁日の如き祭りあり、一定の日を期して各廟の開帳をなし、露店軒を並べ、參詣者群集雜鬧して頗る殷賑なり、清真寺は西門内にあり、回教の寺院にて異觀を呈せり、蓮花寺は南門外にあり、喇嘛教の寺院にして、清朝の天聰四年に建てられ、唐代の古塔と言ひ傳ふるもの、その中にあり、又西門外に土封の點々たるものあり、曾て掘りしに種々の器物を發見し、其中には朝鮮品に類するもの頗る多かりしといふ、遼陽招魂社、社は遼陽西門外約二千米突の處にあり、遼陽の大激戦に於て、名譽の戦死を遂げたる我將卒及此附近に於て病歿せしものを合葬せるものにして、總數三千七百六十七名なりといふ、社は西面にして西面に鳥居あり、中央に星光形の墳墓あり、繞らすに木柵を以てし、四隅に木造の望櫓あり、櫓皆名あり、東は撫韓西は親清、

南は安國北は鎮魯といふ、昨年八月に之を建て、三千餘人の偉勳を永く遼東の野に表彰し、英魂を地下に慰めんとせり、然れども松柏の烈操を顯はすなく、雜草離々として、脛を没し、參拜者をして坐ろに無量の感慨に堪へざらしむ、

首山堡、遼陽の西南一里半弱にあり、高さは僅に九十九米突に過ぎざるも、平野に屹立して、東方一帯は丘陵起伏して遙かに小岳重疊する山地につゞけるを望見すべく、西方一帯は遼河の大平野を展望するを得べし、全山盡く雨露風雪の浸蝕を蒙り、種々に彫刻せられ、頗る異形を呈す、山上に掌指狀の凹痕を生じ、冷泉を出したるこゝとあり、故に一名手山と言ふ、是れ亦浸蝕痕に雨水の溜りしものなるべし、曾て魏の時代に司馬懿、公孫淵を此地に平げ、唐太宗、高麗を征伐せし時にも、此山に蹕を駐めて三軍を統帥せりといふ、因て駐蹕山と名く、今尙山上に烽臺あり、唐時の遺物なりといふ、今回の戦役にて、遼陽攻撃の時、我左翼軍の主力は、明治三十七年八月三十日の拂曉より攻撃運動を開始し、午前十一時頃に至り、首山堡西方高地にある敵を攻撃せしに、敵は機關砲を以て應撃し、頑強に抵抗し、副防禦によりて、我が歩兵の近接を許さず、夜に入り、敵の夜襲ありしも、之を退け、彼我激烈なる戦鬪を交へ、翌三十一日朝に至りても、激戦は猶繼續せられ、午後に入れども、戦機の發展を見ず、九月一日

早朝猛烈なる強襲により新立屯西方高地及首山堡西方の標高九十九の高地を占領せり、是に於て遼陽の戦局は定まり、我軍大勝を博せり、遼陽の首山に於ける尙四肢の首に於けるが如し、古今戦略上の關係同一轍に出づるを見るべし、山の東腹に清風寺あり、頗る閑靜なる處なり。

七月二十九日 快晴

日程 遼陽營口

午前二時衛兵に起され、倉皇準備を整へて停車場に集る、天猶暗く睡氣未だ醒めず、午前三時十三分南行の列車にて出發す、六時頃海城を過ぐ、朝暾已に東山に昇りたれども、市街は薄霧に包まれ、樹影家軒朦朧として、雞犬の聲洩れ聞ゆ、間もなく一天拭ふが如く澄み渡り、風なく雲散じたれど、走山の麓、近村の森に、霧か霞かと見ゆる薄帯の靈巖けるあり、流車絶えず、長白山系の西邊をなす山地の裾を西南行するが故に、左方は稍入だたりて、山岳丘陵の連なるを見れど、右は即遼東の蒼野にして、見渡す限り高梁の穂々たるのみ、午前八時大石橋に着く、停車すると三十分にして營

口に向ふ暫時の間は、左方猶小山丘陵相連り、浸蝕の跡鮮かに右方にも二三の小山存するを見る、暫時にして、この間を離れ、漸く眞の平原に入る、この邊々に豊饒なるべしとの豫想に違ひ多く、植附けられたる高梁はその丈け甚高からず、その色亦黄色を呈しかの奉天附近に見たる濃緑にして、丈餘に達せるものと大に異なる、高梁につぎて多き玉蜀黍も亦あまりに繁茂せず、以て地の甚だ肥沃ならざるを知るに足る、加之耕作することなく、雜草の生ずるに任せたる荒地所々に存し、或は雨水の滯溜して、湿地の如き状を呈せるあり而して、これら荒地の間には牛豚を放牧せるありて、長き煙管を口にせる牧者の監視するものあり、到底我國に見るべからざる光景を呈す、營口に近づくに従ひて、地益平に眼界愈開け、眞に大平原中に在るの感あり、大石橋より約一時間にして牛家屯驛に到着し、程遠からぬ宿舎に入る、此停車場は營口市街の東々北約一里半にあり、南滿洲鐵道營口支線の終點にして、もと東清鐵道の四等停車場なりしが、我軍此地を占領してより、附近の市街地及び種々の建築物と共に我が有に歸したるところなり、

宿舎は例の亞鉛張なれども、極めて廣く、加ふるに屋内娛樂場の設ありて、或は黒白を争ふあり、或は新聞雜誌の閱覽に餘念なきあり、又は硯に向ひて、家郷への音づれ

を認むるもあり、庭球、蹴球また其の使用に任ず、注意は理髪及び襯衣の洗濯などにまで行き届き、其の歡待蓋し第一なり。此の日、炎熱甚だしく、戸外は華氏百十五度、室内猶ほ百度を示せり、あまりの暑さなればとて日中は休息し、二時頃より宿舍を出で、營口に向ふ、牛家屯、營口市街間の交通機關としては、陸には輕便人車鐵道あり、水にはヂャンクあり、この日は、舟行陸行各その選むところに任せられたれば、乃河岸に出で、怪しげなる清語を操りて、舟夫を招き、之に乗りて河を下る、この邊は潮汐の干満を感ずること頗る大にして、その差十尺に及ぶ故に退潮に際すれば、舟は下ること矢の如くなれども、満潮に際すれば、舟は却りて上流に流さると云ふ、下ること約四十分にして、營口市街東端なる公園前に到着せり。

この公園は市街の東部、營口税關と大阪商船會社營口代理店との間に在り、規模もとより大ならざれども、樹木を植ゑる草花を栽培し、池塘を穿ちて水を湛え、以て夏期の水泳場に充つ、直ちに遼河に臨みて、遙かに遼西の大平野を眺め、其茫漠として取りとめなき景又趣あり。

初め牛家屯を出づる時、達示あり、先づこの公園に集合して、軍政署に至り、然る後市街を見んと、の事なりしが、行き違ひの爲めに、軍政署に行く能はず、乃ち各自隨意行

動を取ることとして、四散し、或は河岸に出で、貨物の積卸を見、或は油房に入りて豆餅製造の實況を明にし、或は不潔なる小街路の間に、清人生活の實況を尋ぬる等、各その好むまゝに、この大商港の狀況を觀察し、夕に至りて思ひく歸路を取りて、宿舍に入れり、今營口の見聞を記さん。

市況概要

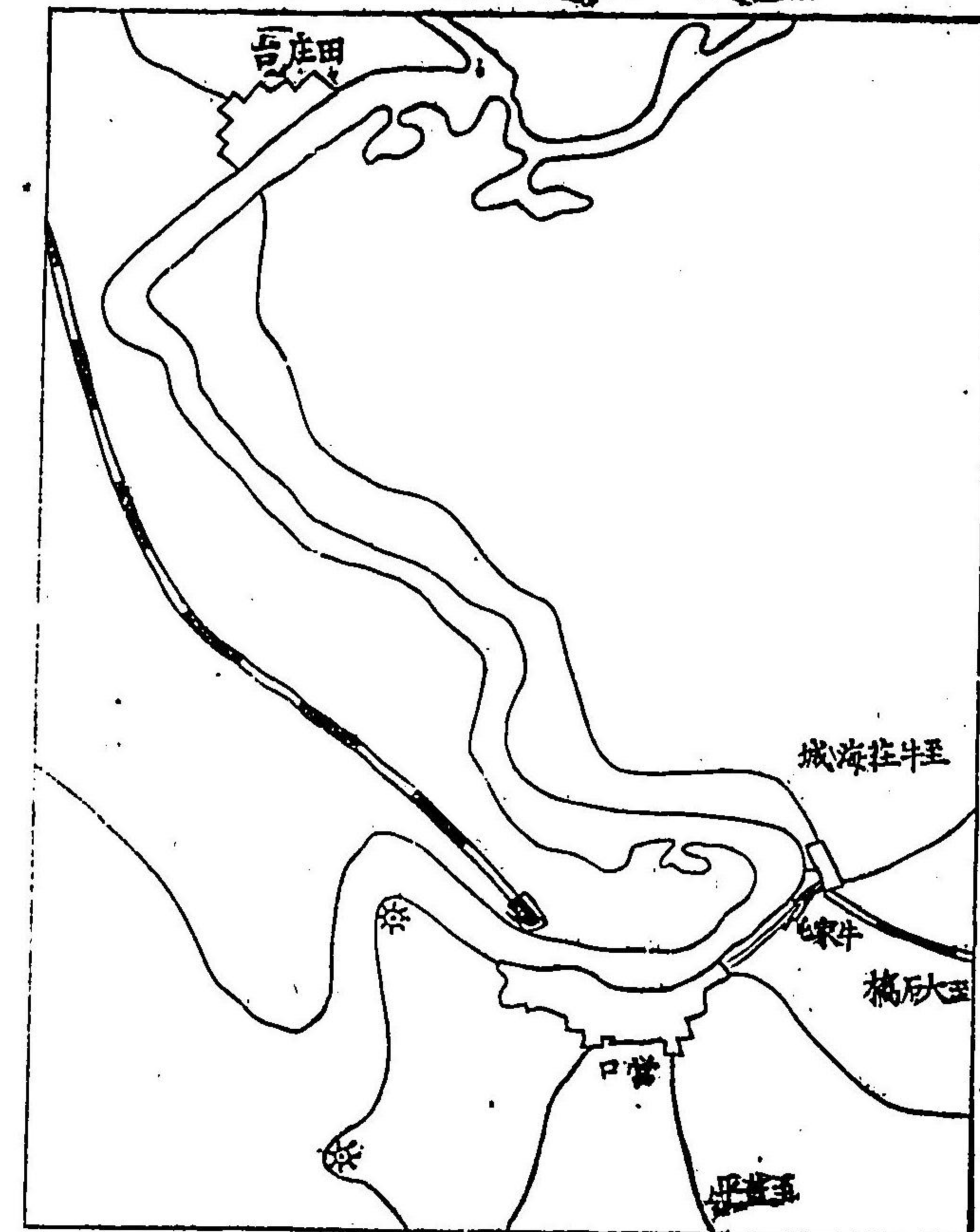
抑營口は遼河の下流の河港にして、沖積平原の中に在り、附近は一帶に茫々たる平野にして、四望殆ど山影を見ず、地頗る低平なり、遼河は遠く東北より來り、平原の間を流れて田庄臺に至り、この邊に於て一大屈曲をなし、東南に走りて牛家屯に至り、茲に再び曲流して、西に流れ、更に南流して遼東灣に入る、營口は即牛家屯より西一里半、西に流るゝ遼河の南岸に在り、河口より遡ること凡十四海里、乃至るべし、遼河は河幅凡五町に達すべく、水深五尋より深きは十尋に至るところあり、満潮時には三千噸の汽船も優に入港するを得べし、唯潮汐干満の差頗る大にして、殆十六呎にも達し、加ふに河に沙泥の堆積するもの多く、爲めに屹水十七八呎以上の大船舶は、出入することを得ずと云ふ。

營口市街は河岸に沿うて立ち、東西に長く、南北に短し、即東西は二里に近けれども

南北は二十町に過ぎず、中央、關帝廟を境として二區に分たれ、西半を西營口と云ふ、殆純然たる支那市街にして、巨商富買多く、商業盛なれども、街路は狭くして頗る不潔、傳染病常に絶えずと云ふ、現に一行の營口に趣かんとするや、軍政署はこの故を以て、西營口に入る勿れと命せり、東半を東營口と云ふ、諸外國人は概皆こゝに在りて、大賈軒を並べ、道路廣く街衢清潔にして、よく整頓す、我軍政署、領事館、郵便局及び英米、獨佛の各領事館、各教會堂、其他正金銀行及び三井物産會社の支店、日本郵船、大阪商船兩會社の代理店、歐米人及び邦人の大商店等皆この部に在り、又營口の一、大産業たる豆餅製造に從事する、東生帖機器油房、太古元機器油房、東升油房の如き大工場は何れもこの部に在り

東營口の東、遼河の屈曲に沿ひて牛家屯停車場に至る約一里半の地は、即我有に歸せし地にして、今や盛に經營しつゝあるを見る、道路は縦横に劃定せられ、木材、土石到る所に堆積せられ、彼處に半ば成れる何々洋行あれば、此處に未礎石のみ置かれ、たるに過ぎざる何々商店あり、我勞働者は彼の苦力と共に、これらの土木建築に従事せり、もしかぐて數年を経ば、一大市街をなすに至るべし、營口の人口は、未精密の調査なきを以てその詳を知らざしと雖、清人は八萬を下

營口附近略圖



らざるべく、その半は近く、苦力等の勞働者なりと云ふ、歐米人の居留するもの約百

五十許ありて英人最多し、邦人は六千と稱すれど、その實七千に近からんと云ふ、邦人の多くは雜貨商、料理店、菓子商、旅館業、大工、職、請負業等に從事し、清人は雜貨商、豆餅製造業、煉瓦製造、鍛冶、染物業等に從事するもの多けれど、その最多きは各種の勞働に従事する所謂苦力なりと云ふ、歐米人は主として雜貨貿易に従事す、

此の地遼河を控へてその全流域の門戸たる自然の良地位に在り近く數年前までは滿洲に於ける唯一の開港場たりき故に商業貿易甚盛にして市況頗る活潑文化又他の都市に比して遙に進み今日猶その繁榮の日々に加はるを見る。營口の地たるや、遼河下流沖積地にありて土地低平に、且つ海を距ること遠からざれば、地水汚濁して鹽分を含み、飲料に供すべからず、又未だ水道の設備もなければ、田庄臺附近より、逶びて隔ぐ石油空罐一荷の水、價十錢乃至二十錢なりといふ、清人は市中溜池の水を飲用し、若し其の盡くるに至れば、遼河の濁水を用ゆ、又雨期増水の時、小溝により河水を池に導きて貯ふ、此等遼河の濁水も、化學分析の結果によれば、飲料として左迄有害ならずとぞ、目下工事中に係はる、我が軍政署の鑽井竣功を見るに至らば、多大の便益を得んか、又此の地は、從來滿洲の病原地と稱せられし所にて、ペスト、虎列刺病毒は、綿糸と共に、印度より輸入さる、其他、赤痢、腸窒、扶斯脚氣頗る多く、清人は天然痘に罹るもの多しと云ふ、然れども我が軍政署にては、銳意市街の整理、及び清潔を謀り、道路の改修、下水の開鑿、其の他河岸に材を打ち石垣を築き、其の崩壊を防ぐ等、毫も間然する所なければ、遠からずしてかゝる災禍を減ずるを得るに至らん。

沿革及び現今の行政

この地、今日に於ては繁榮を極むる一大港たれども、六十餘年前に在りては寂莫たる一漁村に過ぎざりき、即清の文宗の咸豐八年（西紀一八二五）英佛聯合軍渤海に入り、太沽を略し、天津を陥れたるとき、清の使臣と結べる條約によりて、初めて開かれたる開港場にして、然かも該條約には牛莊城を以て開港地となしたりき、されど牛莊は遙かに上流に位し、且碇泊に便ならざるが故に、遂に營口を以て開港場となせり、かくて滿洲唯一の門戸となり、年を経ると共に益その繁榮を加へ來りて、遙に牛莊を凌ぐに至りたれども、條約の文字を改むる煩を避け、營口に冠するに牛莊の名を以てしたれば、歐米人には重に牛莊の名を以て知らる、營口或は營子とは土人の稱するところなり。

營口一度開かれてより、滿洲唯一の開港場として年々その繁榮を加へ、滿洲の一大要地となりしが、日清戰役起ころや、我軍の占領するところとなり、下關條約の結果一時我領土に歸せり、然るに遼東遠附の事ありて、再び清國の主權に屬したりしが、明治三十一年に至り、露國が滿洲占領の素志を貫かんとして、旅順大連を租借し、東清鐵道南部線を布設するに及んで、その支線は大石橋より分れて此地に至り、將に

全く露國の勢力圏内に入らんとせり、かくて滿洲が政治上より世人の注意を惹起せると共に、この地も益重要な地として注目せらるゝに至れり。

日露戰役起こるや、我軍は連勝の勢を以て北進し、三十七年七月二十五日の夜、この地を占領し、直ちに軍政を布きて之を統治し爾來今日に至るまで我軍政の下に在り、その範圍は此地を中心として約一里に及ぶと云ふ、これよりさき此地には支那の官憲として海關道あり、盛京總督に隸して、海關稅務を管理し、兼ねて金州、復州、海城、蓋平等各州縣の交渉を管理せしめ、又通商事務頗る煩雜なれば、州縣を置ける地にはあらざるも、特に海防同知の官ありて、市内の政治を管掌したりき、されど我軍政は、これ等の官憲を認めず、故に事實上全く我施政地たり、我憲兵三十人、守備隊より採れる補助憲兵五十人、及び支那人より取れる巡捕三百人を以て、管轄區内の風紀、秩序を維持し、各屬吏をして司法及び行政の事務を取扱はしむ、又此地には各國領事の駐初するあれど、其事項の他國との交渉に互れるものは、我軍政署の干渉を待つて事を決すと云ふ。

營口と遼河—水運

抑遼河平原は、南滿洲に於ける最肥沃にして、最物資豊かなる地、實に南滿洲の生命

なり、而してこの平原の大動脈となり、廣漠たる平野をして、生氣あらしめ、活動あらしめ、數百萬の生靈をして、その生を樂しみ、業を勵ましむる所以のものは、云ふまでもなく遼河なり、既に鐵嶺の條下に於て述べたるが如く、遼河はその源を蒙古高原及び吉林の山中に發し、南下して廣漠たる平野の間を流れ、鐵嶺河、渾河、太子河等の諸流を合せ、營口の下流に至りて遼東灣に注ぐ、中流以下は平野の中を流るゝを以て、一も急湍瀑布の存するなく、チャンネル遠く遡りて小塔子に至るべく、渾河、並にその支流太子河等亦頗る舟楫の便あり、以つて運輸交通の重要な機關となる、而して其の流域は、遼東、遼西兩山地の間を占め、北は遠く內蒙古東部地方より、松花江源流地方に接し、南直ちに海に臨む、面積約三千五百方里あり、地味一般に肥沃にして、農業に適し、物資頗る豊かなり、ことに奉天、鐵嶺附近及び上流遼東河地方の如きは、其肥沃豊饒なること驚くべきものあり、且地、支那本部と接するが故にその文化を傳ふること最多く、農商共に發達し、人口最多く、文化の發達實に滿洲第一にして、奉天、遼陽を初め、鐵嶺、通江口、新民府、法庫門、昌圖、海城の如き幾多の都邑は、その繁榮を競へり、而してこの地方をしてかくの如く豊饒ならしめ、かくの如く發達せしめたる所以のものは、遼河の存するが爲めなり、實に遼河は滿洲の生命にして、これある

が爲めに今日の富饒を來たし、大市場を現出し、更に將來も益發達して止まざらしめむとす。

營口は實にかゝる遼河の下流に位し、内地各都邑に集まりたる物産の水運によりて輸送し來れるものを集積して外に出し、更に外國の物品を入れて、之を内地に送るべき門戸たり、その繁榮を極むるに至りたるは、もとより偶然にあらずと云ふべし。

遼河水運は營口を起點として、田庄臺、三叉河、小河口、馬蜂溝等を経て通江口に至り、更に小塔子にも遡るべし、其間小河港頗る多し而して支流なる渾河及びその支流太子河により遼陽及び北大溝まで遡るを得べし、航行の船舶はすべて所謂デヤンクなれども、これは三種の別あり、各その形を異にし、大さを異にす、撥船と稱するもの最大にして、百五十石より二百石に至り、手子は最小にて五十石より八十石に至る、槽子と稱するものは、その中間に在りて、七八十石より百二十石に至る、撥船は普通下流、營口、三叉河を往來するにすぎずして、その數少く、槽子及び手子はその大なるものも、通江口まで遡るべくその數最多し、現今に於てはこれら三種を合すれば、遼河水運に使用せらるゝもの約七千ありと云ふ、以て水運の盛なるを見るべし、遼

河はかく水運に使用せらるれども、たゞ水量の増減甚しく爲めに船行頗る困難を感ずることあり、即ち七八兩月の如きは水量最多くして、濁水漫々として流下すれども、六、十、十一月には大に減少して、舟行を阻止することあり、且出水の時は、上流より夥しく泥沙を流し來りて、河床に堆積し、爲めに航路を更ふるに至るあり、されど彼等支那人は巧みにこの間を航行し、常に上流地方と、營口との間を往復して、貨物の運搬に従事す、普通費すところの日數は、營口より馬蜂溝まで、上行十六日、下行九日、通江口まで、上行二十二日、下行十一日なりと云ふ。

營口はかくの如く内地水運の衝にあたり、外は天津、芝罘、上海、香港、仁川及び我國諸港との間に定期航海あり、貿易盛に商業大に繁榮を極むれども、たゞ冬季は互寒甚しく、河海共に氷結して、一時水運は全く杜絶するに至る。

この地は北緯四十度四十分六秒に位し、我青森と同緯度に位するに過ぎざるに、かくの如くなる所以のものは、地大陸内に在り、直ちに蒙古高原、西北利亞地方の氣候の影響を受くるが爲めにして、十二月には攝氏零下五度六分、一月には零下九度、二月には零下六度の平均温度を示し、遼河は例年十一月下旬に至れば、水塊浮流し、十二月上旬若くは中旬には全く結氷して、その厚さ二尺以上に達し、水上馬車を驅る

を得るに至る、而してその解氷期は普通三月下旬又は四月中旬にしてこの間は水路の交通全く止む沿岸の民船は危害を除かんが爲め陸に曳き上げ南清地方より來りて水運に従事するものは皆南方に歸り北清山東地方より來れるものも船主を除くの外はみな歸郷し營口は頗る寂莫となる。

されどこの間も猶全く交通運輸の止むにはあらず、水路こそ杜絶すれどこれと相ならびて滿洲の一大運輸機關たる馬車はこの期に於て最盛に使用せられて交通運輸皆これによる、これ夏季は降雨の爲め道路泥濘車軸を没するに至り、車行頗る難けれども、冬期は河水も地表も共に氷結し、加ふるに降雨あまりに多からず、最車軸の運轉に適するが故なり、かくて冬季に於ては、各地より貨物を輸送し來る馬車の營口に入るもの頗る多く、毎日五百餘輛に上ると云ふ。

又近來に至りては鐵道の開くるあり、西は遼西より山海關を入りて、天津に至り以て支那本部を連ね、北は哈爾濱より南は大連旅順に通じ、これによりて吉林地方の物資直ちに營口に入り、或は遼河上流の諸要港に出づるに至り、この地の勢力範圍の益加はると共に一方には冬季の交通も大に便益を加へたり、されど要するに、冬季は營口の休息季なり、その生命とする海外貿易は、一時全く休

止の姿となる、自然の力は人力の以て如何ともすべからざるなり、然るに一旦解氷期となるや、香港天津芝罘及び我各港より、汽船陸續として來り、南清北清遼東沿岸より來り集まるジャンクの數殆んど數ふべからず、市況俄に活氣を帯び、恰も冬眠より醒めたるの狀を呈す。

商業貿易

以上吾人は略營口の位置形勢を述べたれば更に進んで商業貿易について見るところあらんとす。

營口の貿易は從來は主として遼河流域に産する物資を輸出しまたこの地方の需要に應ずる物品を輸入するに在つて、その輸出する物資の多數は一度通江口、鐵嶺新民府等に集まり、水運によつて更に營口に送り然る後之を海外に出し輸入品は歸路水運によりて内地に入るゝを常とせり、即通江口及び鐵嶺の如きは附近一帯に産する多額の豆類の集合市場となり、價格の標準を定め、定期の取引を行ひ、後水運によりて營口に出す、又蓋平の如きは附近一帯に産する柞蠶絲の集合地となり、取引所絲問屋の手を経て馬車によりて營口に出す、其他奉天、遼陽、海城等皆地方物資の集散地となり、水陸兩方面より營口に送りしかる後輸出せらる輸入する諸物

品はこれと全く反対なる集散をなす既に述べたるが如く遼河流域は滿洲に於ける最物資豊かにして人口多き地なればたゞこれのみに於ても優に一大輸出入港たるに足る然るに近年東清鐵道の開通してより更に北滿洲一帶即吉林、黑龍江及び西比利亞地方の貨物すら陸續南下するに至り、これと共に外國品の輸入も日を追うて多きを加へ、營口の交易は更に一層盛況を呈するに至れり、今營口の河岸に碇泊する民船のみを數ふるも二千に上り、遼河及其の支流を上下する船數は七千に上ると云ふ、以てその貨物の多きを見るべし。

海外より入港する汽船及び帆船は明治三十六年には合せて六百五十五隻、五十九萬餘噸に上れり、而してこれ等船舶によりて行はるゝ貿易額は、三十六年には輸出一千七百三十萬兩、輸入は外國品一千三十萬兩、清國品一千九百八十萬兩、合計四千七百餘萬兩に達し、三十七年には大に日露戰役の影響を蒙りたれども、猶輸出一千二百萬兩、輸入外國品千九百萬兩、清國品一千萬兩、合せて四千百萬兩あり、今三十六年度の輸出入の貨物についてその主なるものゝ價格を略記すれば次の如し。

輸出	輸入
豆類	綿布類
六百八十五萬兩	九百七十五萬兩

其他輸出に於ては藥材、燒酎、米、干鰓、西瓜子、獸皮、輸入に於ては染料、紙卷、煙草、燐寸、絹織物、昆布、紙等は皆十萬圓以上に達せり、更に之を三十七年度に見るに

輸出	輸入
豆類	綿布類
四百四十六萬兩	千百七十萬兩
豆類	綿絲
三百七十二萬兩	三百九十三萬兩
柞蠶絲	砂糖
百八十二萬兩	百十七萬兩
豆油	石油
五十六萬兩	九十三萬兩
豆類	絹絲
七百五萬兩	四百五十五萬兩
柞蠶絲	金屬類
百三十八萬兩	九十一萬兩
小麥	砂糖
百二十三萬兩	六十四萬兩
豆油	鐵道裝置材料
七十二萬兩	五十一萬兩
粟	石油
六十一萬兩	四十八萬兩
阿片	石炭
四十萬兩	四十七萬兩
人參	毛織物類
二十萬兩	二十三萬兩

人參	二十九萬兩	棉花	八十七萬兩
阿片	二十九萬兩	麥粉	七十一萬兩
絹織物	六十七萬兩	藥材	十六萬兩
		煙草	六十七萬兩

にして猶輸出にて干鰯、西瓜子、屑絲等は十萬以上あり輸入に於ては綠茶、燐寸、紙類、袋類、日本酒、家具、蠟燭、石炭、洋酒等は皆四十萬乃至十萬兩あり、

以上の統計によりて見れば、貿易の状況は一目瞭然たり、即輸出には原料品、粗製品、大部分を占め、精製品は殆見るべからざるに反し、輸入に於ては精製品其大部分を占め、粗製品之につぐ、以て滿洲内地の産業發達の状況も直ちに之を推知するに足るべし、

營口貿易の主なる取引先は支那本部、日本、米國、英國、獨國を其の主なるものとなす、ことに輸入は近來米國製品、大に勢力を占むるに至り、綿布の如きは全輸入額の半以上を占む我國との貿易は近く甲午の役以來の開始にすぎずと云ふべく其貿易も徹々として振はず僅に正金銀行、三井物産、東肥洋行、其他二三商會の手によりて行はるゝに過ぎざりしが、此數年間に於て大に進歩し、ことに日露戰役以來益隆盛

に赴けり、我に輸出するものは、豆類及び豆粕を最多とし、柞蠶絲之に次ぎ合せて年額七百萬より八百萬に上る、我より輸入するものは綿絲、燐寸、日本酒等を主とす、三十七年に於ける、金高は綿絲八十萬六千兩、燐寸三十八萬七千兩、日本酒二十三萬九千兩なり、

而して是只直接、日本より營口に輸入する物品にして、税關に於て、特に日本品として統計せるものなり、故に支那品、西洋品の模造品等にして、外人の手を経て、上海、芝罘等より輸入せらるゝものを合すれば、優に倍額以上に上るべし、これ實に我邦人の奮勵を要するところにして、此の如き状態に在る間は、未滿洲貿易を論ずべからざるなり、

今營口に輸出入の各物品について、簡單にその状況を記さん、

豆類、豆粕、豆油、豆類は滿洲に於ける最重要なる産物にして、遼河流域及北滿洲至る處之を産す、南滿洲に於ける、重なる集散地は營口、田庄臺、遼陽、奉天、新民府、榆樹臺、鐵嶺、開原、通江口、法庫門、新城等にて、此等は、既に述べたるが如く、皆營口に集り、然る後輸出せらる、豆油及豆餅は近年に至り、其製造非常に盛大となりしものにして、其製造地は營口を最とし、通江口、鐵嶺、遼陽、奉天等皆盛なりしも、滿洲貿易の未盛ならざ

るに當ては、江蘇、福建、廣東等より、紙砂糖、陶器等を輸入し來れる船舶が其歸途之等を購ひ去るに止まりしが、今や海陸運輸の便開け、各地の需要頓に加はると共に内地の製産亦大に發達し、其の販路は愈廣く、獨り南清に止まらず、我國に入るもの頗る多く、豆類は營口輸出額の四割、豆餅は五割を占め、日本の清國より入るゝ物品中第一に位するに至れり。

柞蠶絲、其の營口より出すものは明治三十七年には實に百八十萬兩以上にのほり、滿洲輸出品中、豆類に亞ぐ、其の大半は我邦に入る、是れ近來我れにて漂白染色の法を發見し、普通生絲の代用品として、貴重するに至りたるがためなり、産地は遼東の各地方なれど、中心地方は蓋平附近にして多くは一旦この地に集まり然る後營口に出す。

阿片、罌粟の栽培は、比較的久しからざれども、現今到る所に栽培せざるなく、優に印度産を凌げり、これより取れる阿片は、盛に北清に輸出され、重要な産物の一となれり。

綿布類、其輸入總額一千萬兩に達し、全輸入額の三分の一を占む、北米製品は漸次英國製品を壓倒し、今日に於ては殆其獨占となり、三十七年には七百萬兩を輸入せり。

我が邦よりは僅かに十萬兩即營口に輸入する綿布の百分の一を入るゝにすぎず、而して其種類は綿、フランネル、縮縮生金巾、天竺布、瓦斯絲織、手拭地等なり、綿絲、英領印度製最も勢力ありて、三十七年には三百十三萬兩の輸入をなせり、我製品は僅かに八十萬兩にすぎざれど、將來は頗る有望の交易品たるべし。

燐寸、もとは瑞典製、支那市場一般に普及し比肩するものなかりしが、明治二十七年頃より、本邦品之を驅逐し、清國全土至る所に、我が燐寸を見ざる地なきに至り營口を通ずるもの十萬兩以上となれり。

煙草は在上海の米國シガレット製造會社の製品、ことにピョコック最名聲あり、輸入の大部分を占む、我專賣局の紙卷煙草も近來大に需要を増加し來りたれども、未ピョコックに及ばず。

石油及び麥粉は頗る有望の輸入品なれども、今は殆米國の獨占に歸し、競争の餘地なきが如し。

其他營口に入るものは、主として雜貨及び水産物なり、これ等は我國産の販路を擴張すべき餘地頗る多し。

以上吾人は略商業貿易の大要を述べたれば、最後に貿易に關する諸機關について

一言せん、

税関は二あり、山海新關及び山海鈔關にして、邦人は多く東税關、西關税と稱し、清人は東海關、西海關と稱す。

山海新關は東營口の河岸に在り、清國關稅制度上の所謂新稅關にして、主として汽船及び外國帆船等に關すること可る、その管掌するところの稅目は通過稅、輸出稅、噸稅、沿岸貿易稅にして、多くは外國との通商條約によりて、規定せられたるところに係り、種々の稅率によりて之を徵收す、山海鈔關は、西營口河岸に在り、所謂舊稅關にして、専らヂャンクに對する課稅を司る。

以上の中西稅關は、露國の此地に勢力を振ひたる頃は、その管掌するところとなり、得たる關稅は、行政の費用に充てたりしが、我軍此處を占領し、軍政を施くや、其權利を引き續ぎ、軍政署唯一の財源とせり、東稅關は清國總稅務司の管掌に屬す。

金融機關は清國所設の銀行なきを以て、清人は概民間の錢鋪、當鋪、銀市等によれど、近來に至りては、邦人ももとより清國人も共に皆、橫濱正金銀行、營口支店に依りて、萬事便するもの多きに、至れり、地方への爲替は、清國郵便によるか、或は私人の爲替手形による、而してこの爲替手形は、確實にして、信用頗るあつしと云ふ、貨幣は清

國にはもとより何等一定の制度あるなきが故に、營口に流通するものも、實に區々にして、其價日々高低あり、取引に際しては、必ず何れの通貨に依るべきかを豫め約せざるべからず、その不便窮りなし、開手銀、元寶現銀、墨銀等最多く行はれ、近來は我貨幣も多く流通するに至り、ことに甲票最多く行はれたりしが、今は漸く減じつゝありと云ふ、度量衡の制度は、稅關に於ては、目下英法によれど、民間に於ては、清國の常として更に定まれるなく、錯雜混亂名狀すべからず、故に取引をなさんには、一々之を定めざるべからず、然らざれば、意外の損失を招くことありと云ふ。

豆餅製造業

豆餅製造業は、滿洲に於ける唯一の工業にして、營口はその中樞たり、抑この工業は、近年に至りて起こり、俄に長足の進歩をなせるものにして、大豆の主産地たる鐵嶺附近に於て、初めてこの業を起こしたるは、僅かに六十餘年前に過ぎず、然も當時は、豆油を得るを以て目的とせしものにして、殘溜即豆粕は、僅かに家畜の飼養料に供するに過ぎず、殆無用物視せられたるものなりき、然るに後數年、偶然にも山東の農夫、之を肥料に施して、その價值を認むるや、忽ちに世に傳はり、之を使用するもの年々増加し、殊に多く南清地方に出され、明治二十年頃に至り、我國にも入り、年々に増

加せりかくて三十六年には營口より輸出するもの七百万兩を數ふるに至り、本來の目的たりし豆油は却りて副産物視せられんとするに至れり、現今に於ては各地に製造場起りて之が製造に従事すれど、その最盛なるは吉林、長春、通江口、法庫門、鐵嶺等の地方なり、近來に至りては營口に於てこの事業大に勃興し、滿洲第一位となり、一年五百萬枚より六百萬枚の製出あり、全産都の半以上を占むるに至れり、これ蓋營口は豆類の全集散地にして、相場の変動を直ちに知るを得べく、且一時に多大の買入をなすに適し、加ふるに豆類の賣買をなし、問屋の業務を兼ねて、利を得べき等の原因によりて、かくの如く發達するに至れるものなるべし。

現今營口に於ける油坊の數は、凡八十餘戸あり、太古元、東永茂、怡興源、義大德、西義須、興須金、大古盛等其の大なるものにして、皆數十萬乃至數百萬の資本を運轉して之を營めり、殊に太古元、東永茂、怡興源、三油房の如きは新式汽錘を有し、日々百四五十の苦力を使役し、一日少くも四百五六十枚を製出す營口全體を合すれば、一日の製出萬一萬五、六千枚に上り、これと共に一萬二、三千斤の豆油を得ると云ふ。

豆餅製造に用ひらるゝは、種類多き豆類中の大豆及び黑豆にして、製法には新舊二法あり、舊法はその動力として總べて人畜を用ひ、機械は破砕器、蒸豆器、壓搾器の三

よりなる破砕器は直径六尺餘なる石轆轤にして、之によりて壓碎せる豆は、直径二尺五寸餘の籠に入れ、煉瓦石造の爐に沸騰せる釜上に蒸し、然る後鐵框をあて、後油草内に包被し、壓搾器に挿入す、壓搾器は螺旋にあらずして楔を用ひ、石槌を以て打込み漸次に壓搾す。

新法も要する機械の種類は略同じけれども、すべて大なる装置を用ひ、動力は主として蒸汽力を使用す、その破砕器は最堅牢にして、大なる一對のローラあり、汽力により絶えず回轉し、種々の装置によりて、砂石塵埃等と區別されて、落下し來れる豆を受けて之を破砕し、下層に出す、破砕されたる豆は、蒸豆器に入れて蒸煮し、油草に包みて、壓搾器にかけ強大なる螺旋によりて壓搾す、兩法共に壓搾し了りたるものを取り出して、油草及び鐵輪を去り、刀を以て縁邊を削去してその形狀を正し、直ちに倉庫に入る。

營口と大連

咸豐十年開港せられたる營口は、實に滿洲に於ける對外貿易の第一着手にして、爾來今日に至るまで、滿洲貿易は殆その獨占に歸し、滿洲唯一の通商港として繁榮を加へ來れり、然るに露國が金州半島を租借するや、東清鐵道會社をして、大連に大規

橋の築港をなさしめ、壯大なる市街を建設し、東清鐵道を延長し、哈爾濱より滿洲の西部を通過して、直ちにこの地に開通し、軍事上の便宜を計ると共に、大に殖産興業の策を取るに至るや、營口貿易は爲めに大なる影響を蒙らんとせり、唯露國の經營未成るに及ばずして日露戰役となれるが故に、未營口の實勢に影響を及ぼすに至らざりき。

今や大連は既に全く我手に歸し、我勢力の根據地となれり、故に云ふまでもなく、先見ありし露國の計畫を繼續し、この地を開放して、鐵道を利用し、以て滿洲貿易を收攬せざるべからず、もしくはかくの如くんば、勢營口と競争の態度を取るに至らざるべからず、而して營口は自然の良地を占め、六十年の歴史あれば、之が競争は頗る問題たらざるなきを得ず。

されば近來我國にて、或は大連經營論、或は營口勝利論、或は兩立論等の、露々として唱道せらるゝものまことにその故なきにあらず、吾人先きに大連を見今又この地を見る、茲に兩者の關係について一言なきを得ず、されど兩者の比較はやがて遼河水運と南滿洲鐵道との比較となり、對外關係の問題を伴ひ來り頗る複雑となり、正當の判斷はもとより容易に下すべからず、故に吾人はたゞ簡單に兩者の得失を比

較するを以て満足せん。

營口の便とする點

- 一、遼河の水運と鐵道と兩者の便あり。
- 二、豆類の集散地點の河運に便にして、鐵道に不便なること。
- 三、附近幾多の都邑を控へ、平原を擁し、上流地方に至るまで、土地豊穰、産物饒多なること。

四、六十年來の開港場たる歴史を有すること。

其不便なる點

- 一、冬季四ヶ月間氷結して、運輸交通の杜絶すること。
- 二、棧橋埠頭の設備不完全なること。
- 三、南滿洲、關外兩鐵道の便あれども、甲は停車場まで約一里許を隔て、乙は對岸にあること。
- 四、潮汐干満の差、十數呎に及び、且泥沙港口に堆積せる爲め、吃水十七八呎以上の大船の入港を妨げ、且小船も常に水先案内者を要する事。
- 五、遼河の水運は、貨物の品質を害することあること。

更に之を大連に見るにその便とするところは

- 一、年初一二週間は薄氷を見るも船舶の出入を妨げざること、
 - 二、大棧橋を有し、鐵道直ちに汽船と連絡し得べきこと、
 - 三、水深頗大にして、優に屹水三十八呎以上の船を入るべき事、
 - 四、我國及び南清地方との航程、營口に比すれば一日程の近距離に在ること、
- その不便とするところは

- 一、背後は直ちに物資豊かなる平野に接せずして、礧礧なる山地を負ふこと、
- 二、從て貨物の出入は常に一條の鐵道によらざるべからざる事、
- 三、多くの場合に於て鐵道貨銀の水運賃に比して大なる事、

以上列記するところを通覽するに碇泊場としての價値に於ては大連は遙かに營口に優り港の位置に於ては營口は遙に大連に優るたゞ營口は結氷する一大缺點ありされば要するに各一得一失にしてその優劣は容易に判すべからずたゞ營口の失とするところには人力の以て如何ともすべからざる結氷のことあるに反し大連の失とするところは人力を以て左右し得べきもの多きは頗る注目するの要ありと云ふべし、即大連の最缺點とする生産地消費地を去ることあまりに遠きの

點は鐵道經營の如何によりて之を補ふこと能はざるにあらず、且滿洲西北利亞を通じて歐洲に至る大交通線路にして曾て世人の唱道したるが如き價値を有するに至るとせばその海陸の接續點となるべきは必ず大連たらざるべからずさればその最終の勝利の果して何れに歸すべきかは之を問はずとするも大連の益繁榮し滿洲の一大關門たるべきは明かなりされど究極するところこの問題はむしろ我國の滿韓經略の手腕如何によりて決定すべし茲に至りては吾人又多言を用ふるの要を見ず、

三十日 晴

自營口至金州

朝七時頃發車、大石橋を経て南下す、大石橋は南滿洲鐵道の營口支線を出すところ軍事上の重要地點たるが故に、我第三十一旅團司令部第十六師團に屬す及び歩兵第六十一聯隊設置せらる、地東に山を負ひ、西に遼河平原を望み頗る形勝の要を得たり、幾もなくして、蓋平を過ぐ、此の地は一に蓋州といひ、其の河口は渤海灣内の一良港として、康熙より乾隆に至る間、滿洲南部第一の貨物集散地なりしが、營口が互市場となるに及びては、又昔日の繁盛を見ること能はずされど、附近豆類高粱鴉片

の産額多く、特に柞蠶養成の業は滿洲第一なれば今猶繁華の城市たるを失はず、この邊より高度著しからざる山峰左右より相近づくされど其間に平地の廣やかなる處なきにあらざる熊岳城附近の如き是なり熊岳城迄は往行夜中に過ぎたる地なれどもこの地以南は日中に過ぎし地にして既に記したるところなれば記事を省略す熊岳城より瓦房店得利寺普蘭店等を過ぎて午後七時半金州城驛に着し驛前の陸軍宿舎に投ず、

七月三十一日 晴

日程、南山、金州城、柳樹屯、

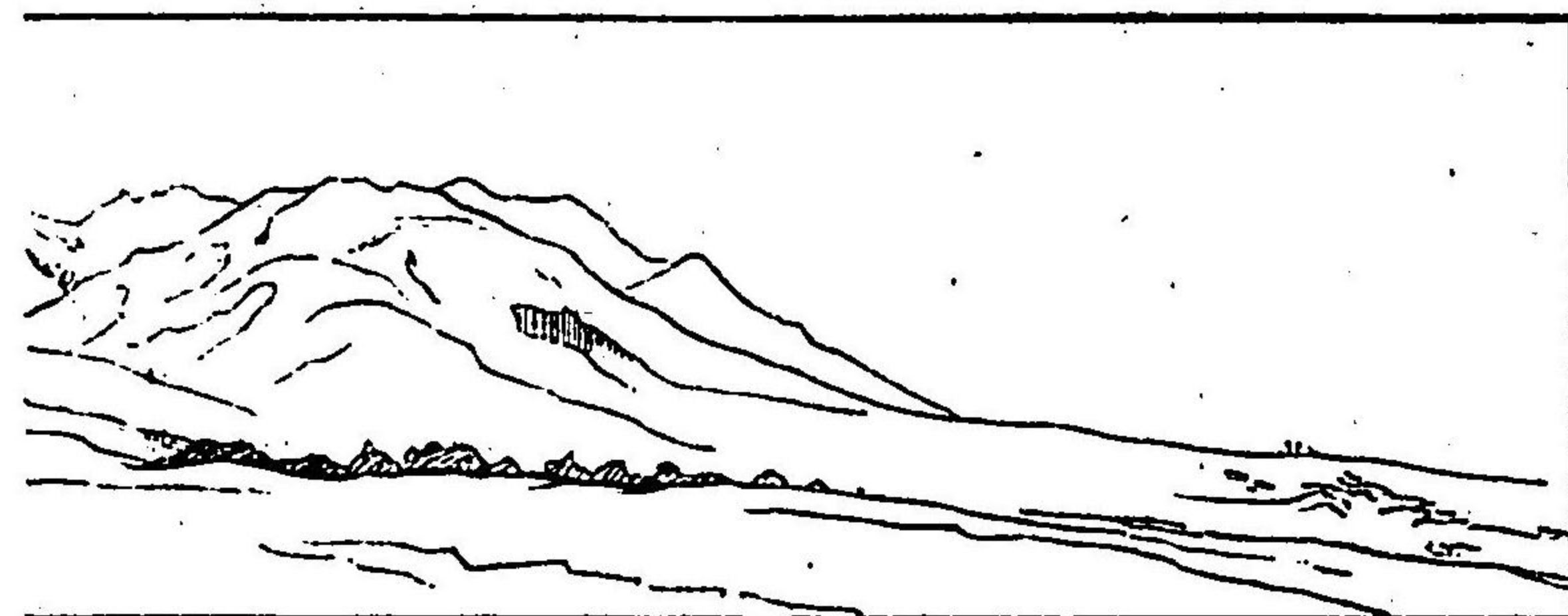
金州停車場側なる我等の宿舎より、南方約九町(千米)を隔て、恰も臥牛の如く横はれるは、是れ即ち南山なり、午前八時一同南山の頂に集り、先旅團副官より近傍地點の説明あり、尋で伊崎旅團長より南山戰團に關する講話あり、

抑遼東半島は、楔形をなして南西に斗出し、此部分に至りて幅僅に一里弱となる而して半島を縦貫する山脈は、金州城の東北一里(四基米)なる大和尚山(一名老虎山)八四四米に至り、岫々として聳え、急傾斜を以つて金州城附近の平原に低下し、南山より再び隆起をなして金州半島に入り、歪頭山(三七二米)劍山(三六八米)等となり、以て

旅順方面に及び南端に至りて老嶺山(四六一米)となる南山は、一名扇子山と云ひ、金州城の南約二千米にあり、支那屏の赤色粘板岩より成る極めて緩傾斜の丘陵にて、高二〇〇米に満たず、山麓にはよく其地盤をなす岩石の露出するを認む、東北より北方にかけては小平地を隔て、大和尚山及金州城北方の高地と相對し、南方は高原的地形つゞきて丘陵その上に相連なり、西北には近く金州城を瞰下し、東南には遠く柳樹屯を望む、大連灣には和尚島砲臺あり、金州灣は淺洲遠く連なり、以て軍艦の近接を妨ぐ、實に金州半島の鎖鑰にして、旅順方面の第一關門なり、此附近一帶の高地には、今猶掩蓋散兵濠等の跡歴々として存し、人をして當年激戰の跡を偲ばしむ、山頂忠魂碑あり、一木もあるなき、兀々たる禿山、邦人に由て植林せられたれば、他日鬱鬱たる樹林を見るの日あるべし、此地の衛戍に當らる、第三十二旅團長伊崎少將の講話は最もよく南山戰團の光景を説明するを以て、下に其大略を掲ぐ、

明治三十七年五月三日我軍は第三回閉塞の舉を決行し、十二隻の運送船を旅順港口に沈め、以て露國軍艦の出動を止め、一方に第一軍は九連城に於て露軍と戦ひて大勝を得たり、此機に乗じ我第二軍は、突如として遼東半島に現れたり、その編制は

第二軍司令官 奥 大將



大和山を金州州車

第一師團師團長 伏見宮中將殿下

旅團長 松村 少將

同 中村 少將

第三師團師團長 大島 大將

旅團長 山口 少將

同 見玉 少將

第四師團師團長 小川 中將

旅團長 西島 少將

同 安藤 少將

砲兵旅團長 内山 少將

にして五月五日片岡艦隊掩護の下に、金州の北東十六里なる貔子窩の海岸に至り多大の抵抗を受くることなくして上陸し、直に歩兵第三十四聯隊と工兵若干とを普蘭店に派し、鐵道及電信を破壊切斷せしめ、他の一枝隊をして貔子窩に於て電線を切斷せし



大和山より東方に望む

め以て金州半島に於て敵の後方連絡を断たしむ命を受けたる第三十四聯隊は翌六日午前八時三十分上陸地より九里を隔つる普蘭店に達し守備の敵兵を撃破し鐵橋を破壊し電線を切斷す敵は火薬庫を破壊して南方に退却せり、こゝに於て旅順口の連絡全く断えたり、かくて枝隊は其目的を達し、七日午前無事本隊に合せり、第二軍の全部上陸するや、第一師團は金州城に向て進み其東方及北方の高地を占領し、第四師團は金州街道を行進し、第三師團は普蘭店貔子窩の間に於て敵の南下を警戒せり、抑第二軍現下の目的は、大連灣を占領して良好なる策源地を得るにあり、然るに敵帥クロバトキンは遼陽にあり、大兵を擁して我背後を窺ふ我軍これを患ふ、恰よし第五師團亦上陸せしかば、之を以て遼陽方面の警戒にあて、第四師團及第三師團の一部を以て之に附し、軍

の主力を以て金州南山に向へり、五月十六日、各師團は豫定の順序に従ひ、金州城より三里を隔つる十三里臺に向ふ、時に敵は歩兵三大隊砲若干を以て其附近の高地にあり、第三師團の前衛之に向ひしも、敵砲の威力甚大にして我軍頗苦戦に陥れり、されど暫時にして我砲兵續々到着し、歩兵は敵の右側背に出で、猛射せしかば、敵は老虎山の谷地に死屍數十を棄て、退却せり是より彼我斥候の衝突絶えず、中にも第一師團の將校斥候山田大尉の如きは尙金山北方に於て最壯烈なる最後を遂げたり、二十五日、軍は遂に金州城東北方に集合し南山攻撃の部署全く定れり、今各師團の運動を各別に觀察せん。

右翼、第四師團

軍の命令によれば、師團は敵の左翼に向ひ、二十五日、金州城附近の高地に集合し其一部を以て金州城に據れる敵を撃破し、夜十二時頃、之を占領し、師團の主力を以て南山に向ひ、城の南門より海岸迄を線とし、左翼は第一師團と連系し、南山を包圍するが如く運動するを目的とす、此夜大雷風雨咫尺を辨せず、師團の一部隊は金州城西北なる岬山の龍王廟に集合し、夜暗に乘じ敵兵を搜索しつゝ、金州城に近づく、城外の敵は直に之に應じて激戦となり、我兵進で城門に迫るや敵は一分間三百を

發する機關砲を以て我軍を掃射す、勇敢なる我工兵はこの間を潜りて、遂に城門に達し、爆薬を裝置するも棉花藥は暴雨に濕ひ、點火すること九回にして、しかも遂に爆發せず、夜は將に明けんとし、左翼の敵砲は盛に我軍に向ひ砲撃を開始せり、此間に工兵の爆發幸に効を奏せしを以て、歩兵は砲兵の猛烈なる援護射撃の下に城内に突撃し、二十六日午前五時遂に之を占領せり、此に於て我砲兵は轉じて南山の敵左翼を砲撃し、敵軍亦抗戦尤も勉む、午前七時十分我歩兵の第一線は紅家窰に向ひ、右翼の一部は海水中を徒渉し、一進一止頗苦戦をなし、漸次進みて南山西北麓の清國舊兵營跡に達す、時に我砲兵は全力を舉げて南山の敵壘を猛射すれども、敵砲の威力毫も衰へず、我兵死傷續出し、又如何ともすべからず、然るに幸なる哉、午前九時我艦隊は砲艦四隻水雷艇二隻を以て金州灣に現れ、敵の左側背を砲撃せしかば、其効力により、師團の後續隊は進んで攻圍の形を取り、九時十分に至り更に猛烈なる戦闘開始せられたり。

中央、第一師團

師團の目的は、金州城東南角より東は七里庄に亘り、南山突角の敵陣地を攻撃するにあり、その砲兵陣地は尙金山にありて、軍司令官及師團長亦此山にあり、師團は第

四師團の右翼に連絡して、金州城に達せんとするや、午前四時過城内の敵より急射撃を受け、我兵之に應じて奮戦し遂に其工兵をして城の東門を爆破せしめ、第四師團と殆同時に城内に侵入せり。當時師團の本隊は龍家屯にあり、松村少將は報告して曰く、

一、敵は南山の東北斜面に三段配備をとり、掩蓋を築き、鐵條網を設く。故に榴霰弾及小銃弾は効力なし。

二、敵は機關砲及小銃を以て我軍を掃射す。

と、是に於て先づ工兵を派して鐵條網を破壊せんとするも、敵は機關砲を雨射し、死傷相踵ぎ手を下すに由なし。午後三時大房身に通ずる道路を通過せんとせしに、此處には地雷の附設あり、是に於て松村旅團長は突撃隊を組織し、一氣に敵壘を攻略せんとせしも、第一第二第三の突撃隊皆龍家屯を去る五十米にて全滅し、又如何ともするなし。旅團長は自ら、天皇陛下の御爲なるぞ進め進めと連呼し、以て士氣の維持に勉めたり。

左翼第三師團

師團は大和尙山の北方より出で、右は七里庄より左は大連灣に至る間を進む砲兵

陣地は旅家屯にありて、其一大隊は別に密家屯にあり、後馬家屯閭家屯の間に進出せり。師團は二十六日午前八時三十分、第一師團の前進を見て運動を起すや、敵は猛烈なる砲火を加ふ。九時三十分、師團の戦線閭家屯の西端より馬家屯に至りし頃は、死傷愈増加し、戦はその極點に達せり。由て師團長は豫備隊を増加して援護せしむ。時に敵の砲艦ホープル太連灣に現れ、我左側背を砲撃し、我左翼は頗る苦戦に陥る。南山の敵は鐵道線路を越えて魏家屯に進出し、以て我兵を撃退せんとせり。敵亦頗る損傷を受けしも、猶その豫備隊を大房身に有せり。已にして悲しむべき報告は、續々師團長の下に達せり。

曰く、敵の重砲陸戦隊は、小汽艇三隻に乗り上陸せんとす。

曰く、我彈藥縦列は敵襲に遭ひて潰亂せり。

曰く、野戦病院は敵の襲撃に遭ひて敗潰せり。

よりて師團長は工兵其他少數の豫備兵を増加して援護す。かくの如く苦戦奮闘して日没に至り我兵始めて鐵道線路を越ゆるを得たり。

總括

かゝる苦戦奮闘の間に日は漸く暮れんとす。この時軍司令官より命あり、各師團は

如何なる困難あるも攻撃に前進すべしと、是に於て我軍は奮進敵壘に迫り、百十四門の陸海軍砲は南山に集中し、砲烟全山を蔽ふに至れり。さすがに頑強の敵も、左翼先動くや、我軍全線をあげて勇奮突入し、午後七時三十分遂に全く南山を占領せり。戦始まつてより實に二十四時間なり、南山は旅順大連の關門にて、此役は旅順陥落の第一歩なり、金州已に我手に入り、ついで青泥窪の占領となり、大連灣の輸送是に於て始まり、第三軍は易々として上陸し、戦況は一大發展をなすことを得たり。云々、午前十一時宿舎に歸り、晝食を済ませ、午後は隨意に金州城内を見る、停車場より城の南門まで約半里、坦々たる大路あり、支那には珍らしき道路なり、人に問へば是露人の設計に成るものなりと、今も車馬の通行を禁じ、犯すものは罰金を課すと云ふ、市街は略方形をなし、高さ約一丈の城壁に圍まれ、周圍約一里四方各一門あり、街路は整然としてあまりに不潔ならず、さすがに露人經營の跡を偲ばしむ、人口は調査中にしてその數確かならざれども一萬を超ゆること多からざるべしと云ふ、邦人の此處にあるもの本年三月の調査によれば五百餘人あり。

この地往時は遼東の雄鎮として政治上重要な地位を占め、且沿岸航行の民船はみなこの沿岸に碇泊し、芝罘天津營口等と貿易上の關係を有し、商業上に於ても重要な地位に在り、半島第一の隆盛を極めしが、露國が旅順大連を經營するに至り、其利權は全く二港に移り、金州は又渺たる一小市たるに過ぎざるに至れり。

關東州即我租借地界は舊金州廳治下の殆全部を占め、西は普蘭店より東は畢利河口に至る一線以南、五島及長山列島を含み、面積二百五方里、人口三十七萬、中邦人八千七百餘人あり、至るところ丘陵起伏し、地味礫確なり、産業は農業漁業鹽業にて殊に鹽業は諸處に於て行はるれども、就中魏子窩近傍に盛に行はれ、將來最も有望なり、近時邦人の着目するもの多く、既に數個の株式會社事業を創めたり。

此地は古來重要な地なりしが、故に政事上の變遷亦頗複雑なり、秦漢の時は遼東郡に隸し、後漢の末には公孫氏の領土となり、公孫氏滅びて魏に歸せしが、晋の衰亂に乘じ、高麗之を得て初めて南蘇城を城き、爾來高麗西陲の重鎮となれり、後燕王慕容皝慕容盛等之を陥れしことありしも、地は依然として高麗に屬せり、隋の大業七年(西紀六一二)煬帝高麗を討つや、段文振を派して此城を攻めしめしも、効なかりき、唐貞觀二十一年李世勣大に高麗兵を南蘇に破りて歸り、乾封二年(西紀六六七)薛仁貴又高麗兵を此城に破り、是より地全く唐に歸し、唐は此處に南蘇州を置き、安東都護府に隸せり、遂に至りて蘇州と云ひ、來蘇縣を此城に置き、州治とせり、金には化成縣

と云ひ元代は州縣共に廢せり。明洪武四年(西曆一三七二)舊城を修築し、金州衛を置き遼東都指揮司に隸せり。明の洪武永樂の頃は倭寇此沿岸を掠め、生民安せず。至るところ石壘を築き、以て其變に備へたり。清朝に至り初海城縣に隸せしが、康熙三年改めて蓋平縣に隸し、雍正五年金州巡檢を設け、同十二年(西曆一七三四)始めて金州廳と改め、海防同知を置き、奉天總督に隸せり。又武官としては金州副都統を置き、奉天將軍の節制に屬し、金州水師營復州城蓋平城熊岳城の協領を領せり。城內には副都統衙門協領衙門十二旗衙門あり、金州内旗兵の數は一千二百名なりと云ふ。海防同知は賦稅訟獄の事を管し、其下に巡檢及訓導を置き、巡檢は諸般の小事務を辦理し、訓導は教育の事を管掌す。學堂として南金學堂ありき。後露人此に於て露語を教へ、今は南金書院と云ひ、民政署管轄の下に日本語を教ふ。下級行政機關としては金州治下を堆金社(城北普蘭店一帶)積金社(皮口一帶)南金社(董家溝一帶)玉金社(華家屯一帶)旅安社(城西一帶)の五社に分ち、毎社に郷約一人保正二或は三人を派し、以て探偵警察及び民爭和解等の事を司らしめたり。されど一定の給料なく、その所得は賄賂等によるものなれば、弊害百出し、且彼等は一人の部下を有せざるを以て、その事務もとより舉ぐべし。もあらず。是に於て、人民は數屯或は十數屯相謀りて團練

會を組織し、以て安寧を維持せり。又商業上の機關として公議會ありき。甲午の役起るや、明治二十七年十月二十四日、第二軍司令官大山大將は、山地中將の第一師團(第一旅團長乃木少將、第二旅團長西少將、及混成第十二旅團長谷川少將)谷せて一萬八千の兵を以て、金州を去る約十六里なる花園口に上陸し、十一月四日我偵察隊は始めて大和尚山に於て敵騎若干と衝突し、之を擊退す。翌日我前衛は敵が金州前面の高地を占領して、魏子窩復州兩街道を扼止するを發見し、其夜之を占領せり。明れば六日、山地中將は乃木旅團を左縱隊及中央縱隊とし、自ら第二旅團及砲兵を以て右縱隊となり、金州城に迫る。清兵二千三百砲三十門を以て城壁に據りて抗戦す。午前九時我二十四門の野戰砲は、城の北方二千五百米に砲列を布き榴霰彈を雨射す。清軍應射少時にして、辟易す。十時工兵先づ北門を破壊し、遂に突撃して之を占領し、逃ぐるを追うて之を蘇家屯に殲せり。清軍の死傷二百、我損害極めて小なり。かゝる我軍は容易に金州の險要を破り、直ちに旅順口に迫り、月の二十一日遂に旅順口の戦となれり。是より先き、銘字軍司令官劉盛休は、摩天嶺方面にありしが、李鴻章より金州赴援の電命を受け、部下を率ゐて南下し、我軍の殘兵及軍需品尙魏子窩にあり、且つ魏子窩

より金州に通ずる街道は我兵站基地なるを聞知し、健氣にも我電線を切斷し、兵站地を襲はしめ、躬ら主力を提げて金州城に迫れり、時に老将宋慶亦旅順救援の途にありしかば、相合して兵總て一萬五千而も一門の砲をも有せず、恰も我主力の旅順に戦ふの日、十一月二十一日を以て金州城守備隊を攻撃せり、されど却りて城外に於て我兵に破られ、死傷二千捕虜四百を殘し、大敗して四十里堡に退く、翌日、日没頃に至り、旅順の敗兵三々五々來り合し、敗將徐邦道亦來り、大事已に去れるを告げ、且再び金州城を攻撃せん事を乞ひしも、宋慶肯かず、翌二十三日、蓋平に向ひ、二道を取りて背進せり。

かくの如く我將士の熱血を以て染めし遼東の野は一度我有に歸せしも、忽遼東の詔勅となりて再び清國の主權に歸せり、されど半島の地は永く平和の風に浴する能はざりき、我官民が所謂戰後の經營を喋々し、區々たる價金の處分に窮せる間に、禍機は着々として熟せり、然り喀希尼密約此間に成り、華俄道勝銀行(露清銀行)此間に起り、大清東省鐵道公司(東清鐵道會社)此間に創められ、尋で明治三十年露國艦隊の旅順口占領となり、越えて三十一年、千八百九十八年三月二十七日、旅順口大連灣租借條約となり、露國は此地に關東省を置けり、かくて金州半島中只斗大の金州城

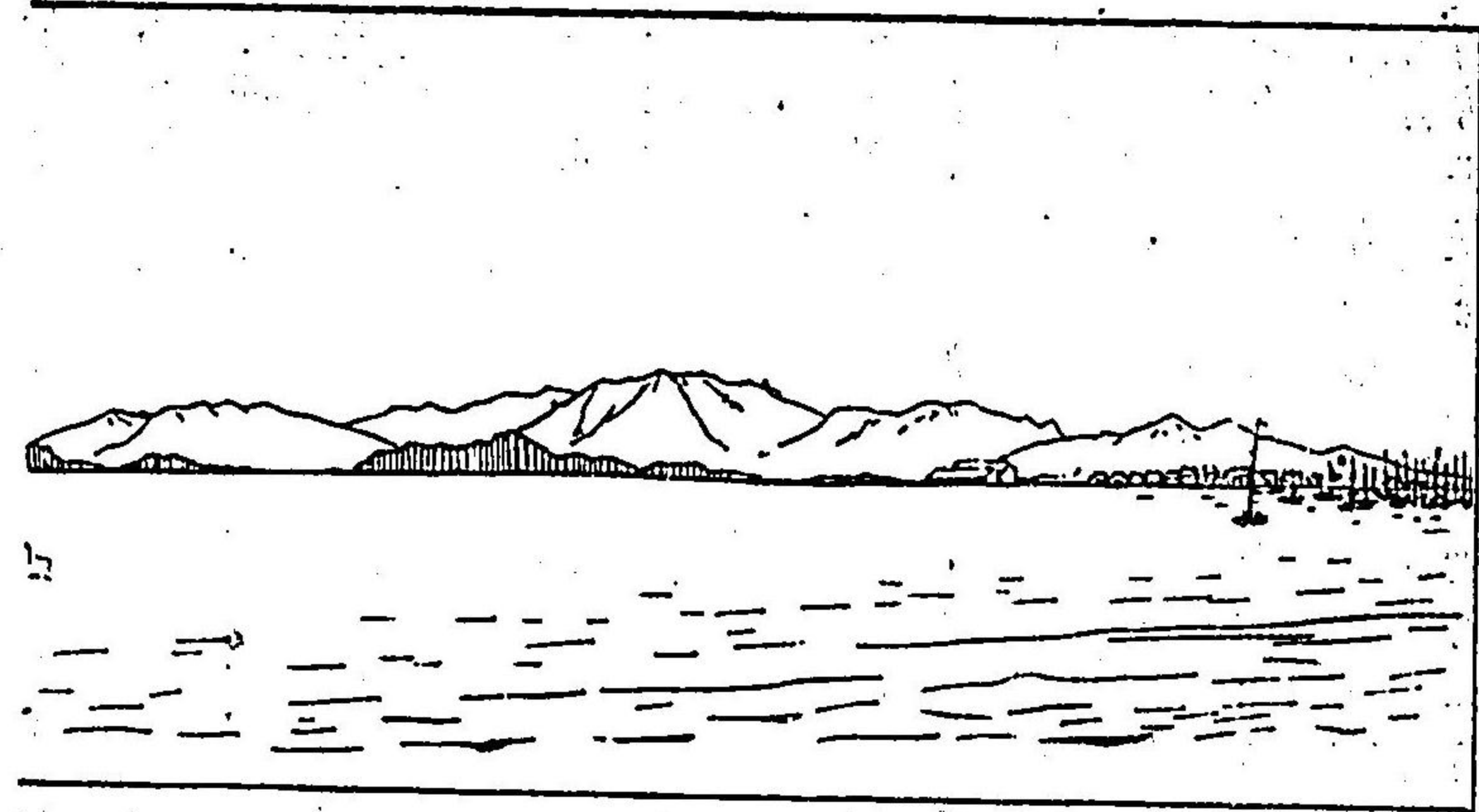
壁内のみは、條約中の「金州城内暫留作華官居住之所の項により、尙清國官憲の在任を認たり、かくて金州城は租借地界内の一孤島の如くなれり、されど貪欲厭くなきの饑鷲豈此孤城を啄まずして止まんや、果然明治三十三年七月初二日は實に憫むべき孤城の最期なりき、露人は匪類の占居を名となし、城内に侵入し、當時の副都統福璽、左右協領富倫、慶霖、及び海防同知馬宗武を捕へて浦鹽斯德に送致す、爾來今日に至るも遂に其消息を知らずと云ふ、是より城内の政治露人に歸し、金州公議會の月稅酒票等凡て撫民府にて取扱ひ、海關稅鹽稅等の徵收も此後に至りて始まれり、露國は半島の軍事民政の長官として、總督を旅順に置き、其下に民政委員あり、又巡撫とも云ひ、民政警察の事務を總管せり、下級行政機關として、全租借地に、金州、水師營、大連灣、貔子窩、郭家嶺の五撫民府、及旅順巡捕廳を置き、撫民府に民政區長、巡捕廳に警部長を置き、各管區内の民政警察及土人に對する裁判權の一部を行はしめたり、撫民府管内は又數個の郷に分ち、郷約一人を置き、支那人を以て之に任じ、月俸三十五留を給せり、每郷更に數個の村團とし、各村團に一方長を置き、土民の公選により、任期三ヶ年とし、月俸十留、約十圓を給せり、各屯には又人民の選定によれる屯長あり、任期三ヶ年とす、司法制度として、土人裁判所、區裁判所、地方裁判所、軍法會議あり、

ゆ覆審制度を取れり、土人の裁判に關しては公正人として土人中より二人の辯護士の如きものを擧げて、法庭に列せしめたりと云ふ。之を要するに、露人の目的は、元より東三省にありて、一小金州半島にあらず、故に半島の行政司法の事に關しては、未だ注意を拂ふに暇あらず、刑罰の如きも禁錮の煩をいとひ、罰金を主とせしかば、兇惡なる紅鬍子(馬賊)の徒は、法の輕きに慣れ、尤も跳梁を極めたり、若夫れ半島人民の區々たる怨嗟愁訴の如き、元より露人の解意する所にあらざりしなり。

我金州軍政署員一行は既に第二軍と共に上陸し、五月二十六日、南山の敵壘未だ陥らざるに先ち、金州城に入り、城内の紳士を集めて辨事務所を設け、交代を以て日常の政務に干與せしめ、こゝに軍政の端を發せり、三十八年六月、關東州民政署開くるや、こゝに其支署を置けり、其下級行政機關として關東州を五民務區に分ち各區に民務所を置き、清人をして組織せしめ、その長を民務長と云ふ、民務區を更に若干會に分ち、會長を置き、會下又若干村に分ち、村長を置く、其下に又區あり、正副區長を置く、會長村長は、人民の推選せるものにて、民務長の承諾を経たるものなり、當時兵馬恣虐、秩序未だ定まらずして、租賦を課するに至らざるを以て、民務所等の經費は凡

て地方紳士の寄附に依れり、又警察機關として、尙團練會を存し、又會の自辨にて更夫を設けしめ、其節制は凡て憲兵之を掌りしが、漸次之を止め、今は、我警部巡查及び巡捕(支那人)を以て之に充つるに至れり、我等恰も金州城に遊ぶの日、明治三十九年七月三十一日、關東都督府制度、關東州法院令等發布せられ、九月一日より實施することとなり、金州民政署は、關東民政長官に直屬するに至れり、嗚呼、眇たる金州城、近く十年の間に於て、二度大戦の街となり、三度主權を換ふ、如何に無智なる清民と雖、其適歸するところに迷はざるを得ざるべし、今や皇威半島に治し、庶くは生民永く其堵に安ずることを得んか。

午後五時頃、皆宿舍に歸り、柳樹屯に向ふ、道程約二里半、驢馬を驅れば五十錢なり、鐵道線路に沿ひてすゝむこと十町許にして左折し、高粱玉蜀黍の間をすぎ、大房身東方より右方小山の東側を東南に進み、柳樹屯に入らんとする時、低き丘陵を越ゆれども、傾斜緩なれば上ること易々たり、されどこの邊一帶に風雨の侵蝕作用烈しきが上に道路は修繕を加ふることなきを以て平坦なる地と雖も、鉸曲せる岩頭の露出するもの多く、して、路は凹凸頗る多し、七時頃、柳樹屯の宿舍に入る、宿舍は市街の西方小丘をへだてたる、海岸の平地に在りて、露人の兵營所在地として經營したる



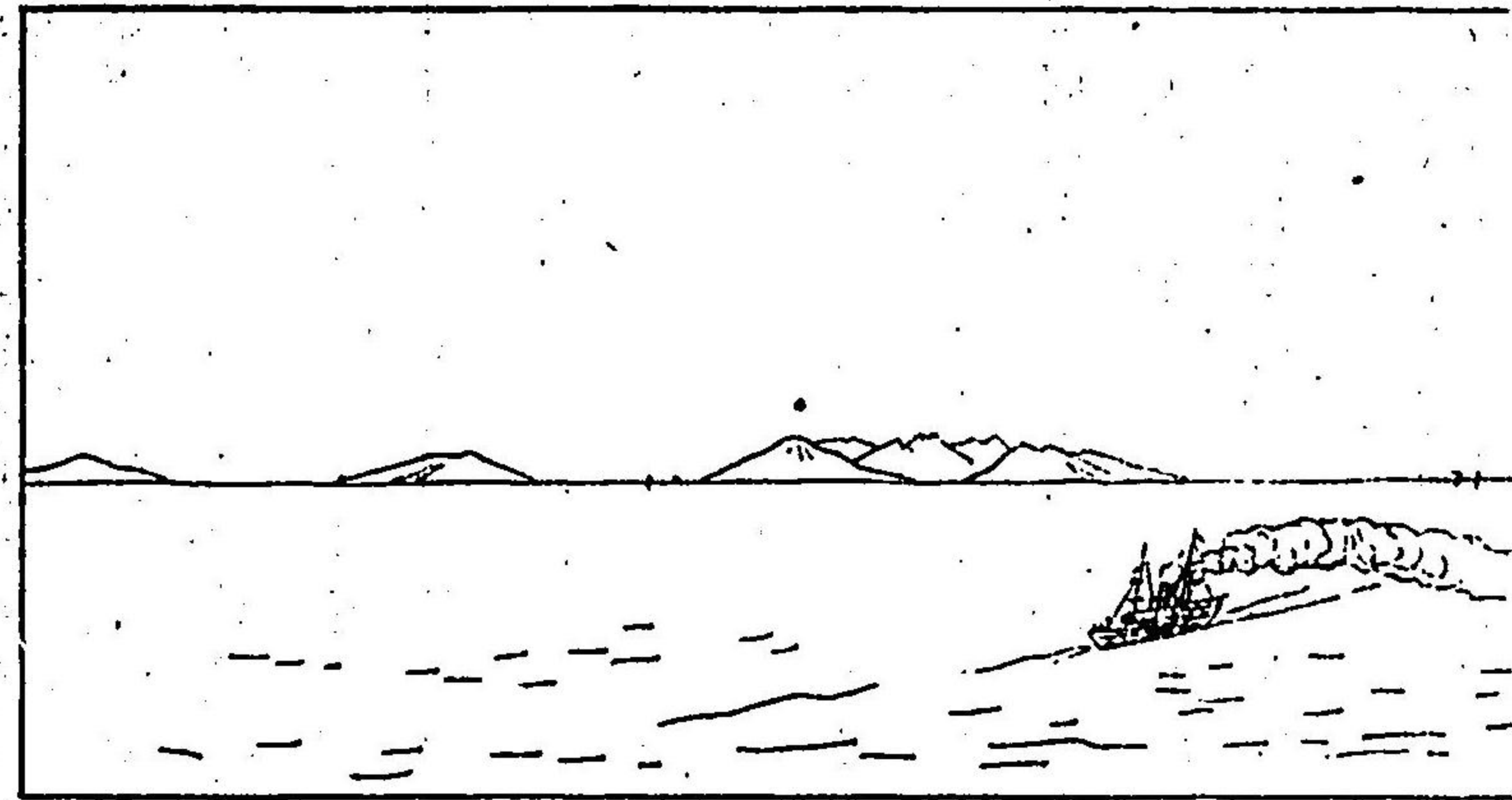
所なりと云ふ此夜月明に乘じ海岸に出れば海面鏡の如くして涼風肌に快く故山に在るの思あり海をへだてて遙に燈火の群がるを望む是れ即ち大連の埠頭なり。

八月一日 晴

早朝宿舎を出て午前七時和尙島砲臺に上る島の名はあれど低地に由て半島に連る大連灣内に突出し一名を南山と云ひ清國舊砲臺あり今は山上

和の忠魂碑遙に甲午甲辰の役を偲ばしむ此地にて駐屯軍副官の説明あり柳樹屯に歸り市街を見本派本願寺出張所の歓迎を受け又此地の支那紳商蓋より茶菓の饗應あり蓋し清人の歓迎を受けしは之を嚆矢とす

柳樹屯は明の季世已に金州和尙島の名ありしも



大連港を記す

未だ人家なく秃山芝原なりき只此地の東北沼地に數百年を経たる柳樹五本あり遠方より望むとを得たり後ち山東地方より僅に十二戸許り移住し來れり由て此地を柳樹屯と云へり柳樹惜むらくは四十年前に枯死せりと云ふ後道光年間凡八十年前には一百戸に達せり明治二十年清國は此港灣の良港なるを認め旅順の狹隘の故を以て此港を軍艦碇泊所とし大連灣と稱し隨て此地をも大連灣と云ひ劉盛休(金州に我守備隊を襲ひたる人)を大連灣記名提督とし積卸場船渠及倉庫等を造り兵舎は五千人を入るゝに足り砲臺は和尙島徐家山等に十三個を築く豫定なりしも日清戰役前僅に六個を完成し砲三十六門を以て防禦せり明治二十七年十一月六日金州城陥るや其夜山地中將は一擧に此地を陥れんとし歩兵第一聯隊騎

兵一小隊、工兵一中隊を徐家山に向はしめ、歩兵第十五聯隊騎兵一小隊、工兵一中隊を和尚島に派し、各砲兵一中隊を附して援護せしめ、七日午前七時を期し攻陥せしむ。然るに我歩兵は砲兵の力を借らずして、七日午前六時三十分全く之を陥れ、清兵は小舟に乗り、南の方旅順方面に逃れたり。

明治三十一年露國の租借地となりてより、露國は對岸の青泥窪を以て商業上の中心とし、此地を軍事上の根據となさん爲、幾多宏大なる兵舎を建築し、東清鐵道支線は大房身より分ちて此地に來らしめ、柳樹屯以下の十數個村は露人の一令の下に立退くべき約をなさしめたり。

然るに三十七年に至り日露戰爭となり、その年五月二十六日、金州南山の役終るや、露兵は砲臺及建築物、棧橋の一部を破壊して退却せり、故に我軍は抵抗を受けずして、同二十八日之を占領することを得たり。是より後、青泥窪と共に兵站根據地となり、棧橋を五個に増設し、頗る繁忙を極めしが、戰後又寂莫となり、大連の名も青泥窪に奪はれ、棧橋は目下殘存するもの二個、大房身より來る鐵道も運轉を中止し、徒らに風雨に委するのみ。

柳樹屯民務所は金州民政署に隸し、柳樹屯以下の十八個村を管し、管内畑一萬四千

七百八十二畝、其地租一千四百七十八圓なり。此近傍は玉蜀黍よく生育し、一段五斗の産ありと云ふ。目下當地住民は、邦人百三十人、支那人一千八百人許あり、邦人は例に由て料理店を主とし、支那人は雜貨多し、港は四乃至五尋の深を有し、波靜にして頗る良港なれども、今は大船の此港に入るものなし、只六漚を隔つる對岸大連とは、毎日小燕漁船及支那船の來往あり、當地在留邦人の談によれば、大連開放後、即九月一日以後は、此地は關東州駐屯軍の根據地として、又撫順烟臺石炭の輸出港として、昔日の繁盛の繰返すべしと、今駐屯軍は一大隊あり、我一行の至りし時は、其三個中隊は馬賊討伐の爲、貔子窩方面に派遣せられ、一層寂莫を感せられたり、當地にて稍見るべきものを列舉すれば下の如し。

天后宮は柳樹屯の北方三丁の高地にあり、嘉慶初年(百餘年前)の創立にて、天后母を祀れり。明治三十二年露兵之を占領して病院宿舍とし、明治三十七年我軍の此地に至るや、以て碇泊場司令部とせり、今は陸軍運輸部派出所となれり。

關帝廟は柳樹屯の西方海濱にあり、今を距る八十年前、道光十年の創立なり。

水雷營は明治二十年春二月築造し、清國營官大尉相當袁某之に長として、港灣を守りしが、明治三十二年露人之を以て騎兵の宿舍とせり、我軍占領以來は碇泊場司令

部其他の宿舍となれり、其中央に劉盛体の居所たりしところあり、清國兵營は三個所にあり、于家屯の北部にあるを副營と云ひ、劉家屯の北部にあるを中營と云ひ、李家屯の東南にあるを後營と稱す、共に歩兵一營五百人を入るゝに足る。

演武廳は、西王家屯の東方にあり、明治二十年夏の築造にして當時劉盛体の休息所たり、明治三十二年、露人之を占領して、フーカー少將の居所とせり、我占領後は、凱旋隊將校宿舍となれり。

正午過宿舍に歸り休息し、午后三時頃より思ひ思ひに宿舍を出で、昨日の道を辿りて再び金州停車場側の宿舍に至りて、夜食をすませ、残し置きたる携帶品をまとめ、て乗車時の來るを待つ。

七時三十分發車し、丘陵の地の間を走り、南關嶺に再びかの一行中に幾多の摸倣者を出したる驛夫の呼聲を聞き、午後十時大連停車場に到着し、月を踏んで日本橋を渡り、監部通を過ぎて正金銀行裏なる宿舍に入る、去月二十一日この地を出で、より十有二日茲に至りて我等の旅行は一大段落を劃せり。

八月二日、晴。

是より三日間、此地に滞在することゝなれり、此間或は老虎灘を訪ひて、大孤山層の特徴岩たる砒岩を採集する者あり、或は大連富士に東郷草を採集する者あり、只皆歸郷の日に近づくを待つのみ。

八月三日、晴。

有志の者は再び旅順口に至り、港内を巡航し、巖に見残しし白玉山水師營等を巡覽せり。

八月四日、晴。

午後旅順口に行きし者歸り來れり、夜十時月蝕皆既あり。

八月五日、晴。

今日と云ふ今日は、愈出發の日となれり、或は紀念品を求むるあり、或は知己親戚に別ら、あり、朝來準備に忙し、午前八時大連小學校前にて、一行の職員生徒、紀念の爲め撮影し、正午波止場に至れば、我等を乗すべき琴平丸は、已に黒烟をあげて待てり、午後三時船は、愈纜を解けり、天氣よく海上も晴れ渡りたれば、大連灣口を出で、右に小平島旅順等の山々を指呼し、左には日露戰役に有名なる帝國艦隊根據地長山列島をながめ得て、皆々終りある旅行とよろこぶ。

八月六日 雨

昨日迄の快晴に似もやらず、風雨交至り波高く皆氣色悪し、午後四時より七時迄濃霧の爲洋中に假泊し、爲に明日門司に入るべかりし豫定、一日後れたり。

八月七日 晴

夕刻始めて九州の山々を見る、皆心躍れり、薄暮六連島沖に假泊す、月明を利用して甲板上に開かるべかりし懇話會は、天候と氣色との悪しきに妨げられて果さず、此夜一同に酒肴を配付せらる。

八月八日 晴

朝八時門司に入り、碇泊すること二時間、九州及此近傍の人は是より上陸す、此日瀬戸内海波静かにして鏡の如し、點々たる漁舟、我汽船の波に弄ばるゝも可笑し、午後八時似の島にて檢疫を受け、宇品港に入る。

八月九日 晴

朝八時宇品に上陸し、此處に我等が最も紀念すべき旅行を終へて一同解散せり。

本旅行記は、元本科三年及二年の一部にて分擔執筆し、大谷自良兩兄之を編纂したり、今や二兄遠く任に在り、余敢て校正の任に當る、責誠に不肖に在り、下田禮佐

博物部

滿洲はどんな所であらうか平原はどんな植物で飾られておるか山にはどんな樹木が生えておるか地面はどんな岩石から構成せられておるかさてはどんな動物が棲んでおるだろうかといふ様な事は滿洲旅行ときくや否や僕等の頭に湧き出でたがそれと同時にこの千載一遇の好機會を利用して滿洲の動植物や地質礦物を調べて見やうといふ好奇心否な研究心も一時に勃興したのである。

しかし時日は僅かでありそれに只一通り観察したといふだけでは甚だ不十分であるから是非標本を採集する必要があるそれには特に採集するの用意もせねばならぬ故豫じめ分擔を定めてそれぞれ観察もし採集もしたならば全體としては比較的好結果を得らるゝであらうとの事で先づ次の如くに組分けをした

動物 檜崎淺太郎 木村榮吉(本三) 仁科壯一 細木志朗 土公藤六

新帶國太郎 田中次郎(本二)

植物 岡崎常太郎 茨木一 青木秀次郎(本三) 福田卓 高山孫三郎

久保田一男 八木善治 黒川多三郎(本二) 横山實 中島光三 藤井友吉

(本一)

地質鑛物

柳沼瀨右工門 藤原眞吾(本三) 宮内安之 重山眞 森了造 居石四郎 小野久七(本三)

農業 田川秀夫 杉浦勝次郎(本三)

其他 伊藤佐武郎(研) 太茂野直二(本三)

かくて洋々たる希望を囑して出發したのである。

凡そ物事は豫期した通りには行かぬ事は先づ普通なので豫定通りにといふ事は寧ろ例外かも知れぬが今度の旅行にも僕等が始めに考へて置いた事と實際に得られた結果とを比較して見ると随分其間に甚しい相違があるそれには勿論それぞれ止むを得ぬ事情のあつた事故この記事の始めに當つて一通りに説明して置く必要があると思ふ

全體今度の旅行は陸軍省から萬事世話をして呉れるので僕等は凡て其命令の範圍内で行動せねばならなかつたのである處が陸軍省の目的は主として戰場を見せて如何に吾軍が苦戰奮闘したかを示す考であつた故かその方には幾多の便利を與へられたと同時に其他の目的に對しては頗る不便の多かつたのは自然の結果である

第一自然界の觀察や博物材料の採取は主として平原若しくは山岳地方に於て其機會が多いので市街の真中や阜頭の上では其目的を達することが六ヶしいのである然るに今度の旅行の道行は主として大連奉天營口などの様な都會や湊であつたが爲めにそれらのことには甚だ不便であつたのは勿論である聞く所によれば鐵道線路の東部太古時代の地層から出來ておる山岳地方では松、柏、樺などの森林が翁鬱として繁茂しまだ百合科蘭科菊科其他種々の草本が至る所にあつて實に豊富なる自然界を現出しこれを大連や旅順方面の荒蕪たる光景に比べると全く別天地の感がするようだ従つて其間に接んでおる動物も亦其種類が少くないとの事であるが僕等にはこれに似よつた所へも殆んど行かなかつたのである

第二に自然界の地理的分布に關した事は一々其のうつり代りを觀察することが必要である特に地質上の研究の如きは一つの地から他の地方まで連續した觀察をせねば殆んど何等の結論を得ることが出來ぬのであるが今度の旅行では全くそれが出來なかつた今日旅順にあるかと思へば明日は一足飛びに奉天に行き次は鐵嶺といふ風であつたが爲めに觀察といひ採取といひ全く切々で其の間の關係が殆んど解らずに終つた位である

第三に時日の短かゝつた事も確かに結果の不完全になつた原因の一つである大連へ上陸してから再び内地へ出發するまで出入十九日に過ぎなかつたのに其中前後約一周間は大連に滞在したので實際大連から向ふで費したのは僅々十二日であつた

尙一行中に博物の方の先生がおられなかつたので必要な示導を仰ぐことが出來なかつた事並びに標本を送る便利の少かつた事も亦其原因の一部分であらう要するに材料の少いこと、断片的であることがさなきだに不完全なる僕等の記事をして一層不完全ならしめたのである

以上述べた次第でこの記事は博物的の價値は割合に少いかも知れぬ併し材料は少いにもせよ断片的なるにもせよ得た丈けの事實はそれ自身に相當の價値を有することは疑はぬのであるが特に今回は旅行の紀念といふ意味を持つておるのだからその方の價値は亦別に存する譯故敢へて粗雑を願みず茲に掲げることにした次第である

(太茂野誌す)

遼東の動物

遼東の動物と云つたとて山にも登らねば海や河にも行かず只汽車旅行の途次ちよい／＼草原を探した迄の事で獲たものは昆蟲の僅かだ。

余等の採集しないもので日露戦役中特志の人の採集にかゝりしものもその方々の厚意により加へる事にした。

◎蝶の繪は岸田松若君の特に學習の余暇に寫生の勞を取られたものである其他記事等も同君の手になるもの多く常に研究上の便宜と補助とをあたへられた又田中五二、同健太郎の二君も貴重なる標本を貸與せられ且種々の便宜を與へられたのでこゝに此等の諸子に向つて深く謝意を表するものである。

種々の事情により時日切迫し暇のなかつた爲め先生の檢閱を得ず誤謬の責は完く余等にあるものである

木村榮吉

檜崎淺太郎

LEPIDOPTERA 鱗翅目
RHOPALOGERA 蝶類

PAPILIONIDÆ あびはてふ科

Papilio xuthus L. あびは

翅の擴張春形一寸四分二寸二分夏形二寸六分三寸四分翅は淡黄綠色にして黒紋黒條を有し翅縁及び脈は黒色を呈すその春期發生するものは形小にして黒形のものゝは變種 *Var. xuthus* Brem. にあつることあり

幼蟲は綠色にして黒條眼狀紋あり黄色の肉角を有し其初期に於ては鳥糞に擬す柑橘類の葉を食す

蛹は帶蛹にして普通綠色なれども其周圍の關係によりて異なる極めて普通に見るものなり

採集地旅順 大連

Papilio machaon L. あびは

翅の打眼

翅は黄色にして黒條紋を有す後翅外縁の黒色部に藍色紋を有す内角に藍色を以てかこまれたる赭赤色の眼狀紋あり子は多少黒味を帯ぶ該種も

春季出するものは小形にして黄色部多く夏季現るゝものは大にして黒色部多し夏季發生のものを *Var. hypodates* Feld. とすことあり本年八月一日

南山に獲しものは兩種ともにありたるは大に見るべきものなるべし

幼蟲は黄綠色にして黒帶あり又赤點黒紋散在し赤黄色の肉角を具ふ繖形科植物を食ふ

蛹は帶黄綠色若くは帶黄褐色にして褐條あり帶蛹なり

採集地 南山 金州

Papilio alcinous Klug. やまじょうらう

翅の打張 二寸七分三寸

る子によりて色彩を異にするは前翅黒色にして脈は明瞭なる黒色を呈し脈間中室に異條あり後翅も略前翅と同じく基部紫色を帯び天鷲絨襟の觀あり外縁にそひ各脈間半月形紋を有すれども明ならず此半月形紋は春形にては紅色をなし夏形にては淡褐紅なるが如し裏面は表面よりも淡く後翅は前翅よりも色濃く外縁の半月形紋は明瞭にして内角紋は二紋合して

不規則の方形を爲す

♀は淡黄褐色にして外縁濃褐色を呈し多少天窓絨状の觀あり紋様は♂に大差なし燕尾は長し♂♀共に一種の香を發する故に又じやこうあげはの名あり四月の頃より夏末まで緩漫に飛翔す

幼蟲は黒色にして不淨の白色純白等の紋あり小突起多く固有の形を有す
イケマ、ガ、イモ、ウマノス、クサ等を食す

蛹は凹凸多く奇形にして亦固有の形なり

採集地 旅順 大連

Luedorfia puziloi Ersch. ひめぎふてふ

翅の擴張 一寸七分内外

翅は黄色前翅基部及外縁は黒色にして前縁より後縁に至る幅廣き黒色斜帯ありその外縁帯は二分してY字状となりて前縁に終るこの黒帯間に二個の短黒帯ありて中室の後縁に終る

後翅基部及内縁三分の二は黒色外縁に巾廣き黒色帯あり内に藍色紋あり外縁にそひて新月形紋を有す後角に紅色紋あり延いて第四室に至る又二

個の黒帯を有す燕尾は細短なり裏面は略表面の如く後翅外縁に大なる橙黄色の半月紋ありて列り一帯をなす紅色帯は表面よりも鮮明なり三四月の候現出す♀は腹端に革質の囊狀の附屬物あり

採集地 旅順背面

Serisius telamon Donovan. Var. *telmono* Gray

淡黄白色にして黒紋あり♀は黒色部多し春季に出づるものは形小にして燕尾短かけれど夏季發生のものは非常に長し

採集地 コキン

Parnassius Stubbendorffii Men. Var. *curvatus* Motsch. うすはしろてふ

翅の擴張

翅は淡黄白色にして稍透明なり脈は黒色を呈す前翅中室の先端及び中央に淡黒色の斑あり後翅基部内縁中室第一第二室に黒色斑あり變化多き種なり滿洲に産するものは本邦のものよりも透明ならず且光澤弱きの觀あり關家屯には此種を産すること多しといふ♀は腹端に革質囊狀の附屬物あり

幼蟲は黒色圓筒狀にて突起を有しエンゴサク屬の植物を食ふ
 蛹は莢莖狀にして葉片をまとめて不完全なる繭を作り其中に蛹化する

採集地 關家屯

Parnassius Apollo L.

翅は淡黄色にして少しく暗色を帯び稍透明に翅脈は黒色なり前翅基部は暗色を帯び中室の先端及び中央に黒斑あり三個の黒紋を散在す後翅基部中室第一第二室に黒斑あり又二個の黒環ある紅赤色紋を有す

PIERIDAE しろてふ科

Aporia Crataegi L. えぞしろうてふ

翅の擴張 一寸九分—二寸

全翅白色にして多少透明なり殊に早に於て然りとなす翅脈は明瞭に黒色にして末端に多少の黒色鱗を有す體は黒色にして白毛を蒙る本邦にては夏月の候北海道にては極めて普通なり然れ共同島以南には産せざるものゝ如し本種も前出ウスバシロテフと同じく關家屯地方には極めて普通にして此二種の蝶のアヤマの花上を飛翔するもの恰も雪の如しといふ

幼蟲は背面は黒く二條の黃褐條を有し兩側腹部は鉛色を呈し白毛を被る
 萃樹櫻等を害す

蛹は淡黄色にして稍綠色を帯び黒紋多し

Pieris Rapae L. もんしろうてふ

翅の擴張 一寸四分—二寸

白色にして黒紋を有す裏面は多少黄色を帯ぶ其形状色彩等期節によりて多少變化あり

幼蟲は淡綠色にして背面兩側に黃條を有し細毛を生ず十字科植物を食ふ
 蛹は擬白色にして細黒紋を有す

採集地 大連 奉天 鐵嶺

Pieris napi L. すぢくろてふ

翅の擴張 一寸四分—二寸

翅は白色にして翅脈黒色なり前翅基部前縁は淡黒色を帯ぶ黒紋を有す亦發生の時期によりて形状色彩に變異あり

幼蟲は暗綠色にして兩側は鮮綠色を呈し氣門は赤色若くは黄色なり十字

科植物を害す

蛹は前種に酷似す

Pieris dapeioides L.

♂翅雪白にして前翅前角に黒紋なり後翅外縁に數個の黒點を有すれども之無きものなり裏面には暗黄緑色の斑紋あり♀にては表面に現れて黒色を呈す然れども極めて微なることもあり裏面の斑紋は初めは美はしき黄鱗にて被はる

採集地 大連 金州 鐵嶺

Lepidia sinapis L. ひめしろてふ

翅の擴張 一寸四分—一寸七分

小形の優しき蝶にして全體白色前翅前角に黒紋あり♀に於ては微なり裏面は基部前縁暗色の鱗を裝ひ翅端の黒紋は淡黄色なり後翅中央にうすき黒條を有す春形種は裏面に暗黄鱗を裝ひ翅多少丸味あり北海道に産するものは夏形にても翅に丸味を有す四五月頃より八月頃まで飛翔す

幼蟲は背面に暗黒色條を有し兩側に黄條あり豈科植物を食す蛹は灰色或

は黄緑色にして翅廓及び側面は暗紅色を呈し角ばる

Colias hyale L. もんたてふ

翅の擴張 一寸四分—一寸八分内外

♂♀色澤を異にするは黄色にして前翅外縁は帯褐黒色を呈し内に黄色の紋を有す黒色の室點あり後翅は多少暗色を帯び外縁黒く橙黄色の室點を有す之れ其名の起る所以なり縁毛は淡紅色體は黒色にして黄粉を裝ひ軟毛を密生す觸角は暗紅複眼は淡綠色なり裏面前翅は黄色にして室點は明かなり表面外縁の黒色は極めて微々二三の點列をなす後翅は暗色を帯び室點は銀色にして黄褐色にてふちどらる♀は其紋様合に大差なきも白色黄色の二形あり極めて普通なる種にして晩秋羽化するものは成蟲のまゝ越冬するを以て又オツチンテフの名あり

幼蟲は暗綠色にして背に二條兩側各一條の白條あり豈科植物を食す

採集地 大連 コキン 關家屯 南山

Gonopteryx khannini L. やちたてふ

翅の擴張 二寸内外

る子により色彩を異にすにありては黄色にして後翅は稍淡し前翅前縁外縁後翅外縁は暗紅色にしてふちどらる室點は前後翅ともに橙黄色なり體は黄白色にして銀色の軟毛を裝ひ觸角は暗紅色にして截斷狀に終る裏面は色うすく室點は褐色なり下胸脈は太く幅二厘あり子は其紋様はるに異らず淡黄白色を帯ぶ
幼蟲は暗緑兩側は鮮綠にして擬白色の波狀線ありクロウメモドキの葉を食す

蛹は美麗なる綠色にして兩端に於て尖り胸部太く翅廓突出し頭胸部紫褐色を帯ぶといふ

採集地 關家屯 コキン

NYMPHALIDAE たてはてふ科

NYMPHALINAE たてはてふ亞科

Apatura jia Schiff. Var. dytie Schiff. こむらさき

翅の擴張 二三一分内外 二寸四分内外

前翅黒褐色にして三條の黄褐色あり中室内の黄褐色部内には四個の黒

點を有す前角に近く二個の小白紋あり後翅は黒褐色にして黄褐色の外縁帶中央帶を有し内縁角に同色の環狀紋あり裏面は淡黄褐色にして後翅基部暗色を呈し表面に於ける黒褐色條は白鱗を混するの翅表黒褐色部は方向によりて美しき堇紫色を現す七月―九月
幼蟲は綠色にして頭部に二個の角狀突起を有し形稍ナメクサに類す柳類の葉を食す

採集地 奉天

Neptis lucilla Hb. ふたすぢてふ

翅の擴張 一寸五分内外

翅黒色にして前翅前角に近く白紋あり中室内に數個の白色點列を有すれども又微なることあり前後翅を貫く白帯は幅廣し外列紋なし裏面は濃藍色にして中央白帯は黒くふちどられ微なる二條の新月形白色外列紋あり後翅外縁の鋸齒は割合に深し

幼蟲は褐色にして兩側は淡く棘毛を有しホザキノシモツケを食す

採集地 コキン

Pyraeas indica Hbsk. あかたては

翅の擴張 二寸内外

前翅翅底は帯緑褐色にして多少金光を帯び前角大部は黒色内に數個の白色方形紋あり外縁中央より外縁角に亘り不規則なる黄赤色の幅廣き帯あり之に圍まる紋は黒色なり後翅は帯緑褐色にして多少金光を帯び外縁は幅廣き黄赤色の帯を有し此の内小黒點あり此の内方に大なる黒點列ありて黄赤色帯の界を明になす裏面前翅は翅表と大差なく黄赤色帯は紅色を帯びて一層鮮麗に前縁角は黄褐色を帯び不明なる眼狀紋を有す後翅は褐色にして不規則なる紋様を有し白條あり外縁に沿ひ不明瞭なる環紋を點列す

幼蟲は暗褐色にして背上及兩側に黄條を有し又黄斑を裝ふ黄色又は灰色の棘毛を有すイラクサ類を食ふ

蛹は突起多く頭部は鈍く二又狀をなし黄褐色若くは緑褐色にして黄金色の點あり

採集地 大連

Pyraeas cardui L. ひめたては

翅の擴張 一寸九分内外

前種に類し前翅はあかたてはと大差なきも黄赤色帯は二條の觀あり後翅は黄赤色部多く翅底のみ帯緑褐色をなす外縁に接して脈上に黒點あり各室間に黒き圓紋及半月形紋と有す裏面は前種に類するも淡色にして後翅環狀紋は黒黄藍の三環を有し中央黒色にして顯著なり

幼蟲蛹ともに前種に類し亦イラクサ類を食す

採集地 大連 關家屯

Vanessa io L. Var. *exoculata* Wey. くじやくてふ

翅の擴張 一寸七分—二寸内外

翅表朱褐色にして外縁は黒褐色なり前後翅に孔雀紋あり前翅の紋は黒色にてかこまれ内部朱褐色にして黄色半月紋あり外縁に近く青銀色の點列あり後翅の孔雀紋は黒色にして中に藍色紋あり馬蹄形の黄色紋にてかこまれ内方に黒紋を有す裏面は黒褐色にして黒色の細線を有し後翅中央に明瞭なる黒色波狀線あり

幼蟲は黒色にして黒點あり黒色の棘毛を装ふイラクサ、ヤブマヲ、カナムグ
ヲ等を食す。

蛹は突起多く角張り頭部二又狀をなす。

Vanessa l-albana Esp. えるたては、

翅の擴張

翅縁凹凸多く表面赤黄色にして黒斑あり前翅前角及後翅外縁に顯著なる
白斑あり裏面は蒼色にして外縁にそひて藍色紋あり中央帯は淡黄色にし
て前後翅を貫く後翅中室内にL字形の白色紋あり裏表の紋様に變化多し
八月の候出現すれども普通ならず

幼蟲は蒼色にして背及兩側は黄褐色の點線あり黄色にして先端黒き棘毛
を有し、デロ、ハコヤナギ等を食すといふ。

Vanessa canace L. むらさきたては

翅の擴張 一寸八分—一寸八分

翅表黒藍色にして前翅前角より後翅内角に亘り青藍色の廣帯あり翅脈は
黒く著れ各室間に小さき黒點あり前翅中室の前方に大形の白色紋あり又

前角にも同色紋を有すれども春形に於ては青藍色をなす裏面は一體に暗
黒褐色にして藍紫色を混し黒褐等の帯あり又不規則なる細微の波を有す
前後翅の黒點は淡黄色なり

幼蟲は黒色にして黄條黄斑あり棘毛は黄色にして先端暗色なりサルトリ
イバラを食す。

採集地 大連 鐵嶺

Polygonia calluna L. しーたては、

翅の擴張 一寸五分—一寸八分

翅表は黄赤色にして黒斑あり翅の外縁は凸凹甚しく尖端は丸味あり夏形
と秋形とによりて色澤を異にす夏形は大形にして翅表赤黄色を呈し翅底
の斑紋は黒色外縁は濃蒼色なり後翅外縁の濃蒼色帯中に黄赤色半月形紋
を有す裏面は暗褐色にして中央以内は濃色を呈す外縁にそひ金綠色紋を
散在す後翅中室先端にO字形の白色紋あり多少銀色を帯ぶ秋形は形小に
して翅表濃色を呈し紋様は夏形種と差なきも外縁帯も黒褐を帯ぶ裏面も
色濃く複雑なる紋様を顯はす時として殆んど黒褐色のものあり夏形種同

様C字形紋を有す

幼蟲は褐色にして背部の前半は黄赤色後半は不淨の白斑あり棘毛を装ふイチゴ類を食す

採集地 開家屯

Poligona caucensis L. きたては

翅の擴張 一寸五分—一寸八分

前種に類すれども外縁の凹凸少なく突端は尖る亦夏形と秋形とにより色彩形状を異にす夏形は形大に翅表暗黄にして黒紋を散在す外縁の斑紋は多少褐色を帯ぶ後翅五室の黒紋は内部藍色なり裏面は帯褐色にして褐色の帯條點及び微細の波紋を有す後翅中室先端にC字形の銀白色紋あり秋形は形小さく翅表鮮黄色にして黒紋を散在し外縁は淡褐色にして内方に褐色條あり夏形種同様第五室内黒點は内に藍色點あり裏面は濃褐色にして外縁は幅廣く黒褐を帯ぶ中央以内は赤褐色にして其の外方は黒褐帯を有す外縁帯と此の帯との間は白鱗を混す後翅中室先端にC字形銀色紋あり裏面は變化多し

幼蟲は前種に酷似しアサカナムグラを食す

採集地 開家屯 旅順 大連 鐵嶺 奉天

Arsenina hevana L. あかまたら

翅の擴張 一寸—一寸二分

小形の蝶にして多少角ばり後翅外縁中央は突起して稍尾狀をなす季節によりて色澤と異にす春期發生するものは小形にして翅の地色黄褐色を呈し基部は黒褐色にして内に細條を有す前翅より後翅に渡りて黒色班を列ね其間に一條の黄褐條を成す而して後縁は此帯よりも廣く黄褐色なり前翅外縁に沿ひて白色の小圓紋を列し前角にも淡色部あり前翅後縁の中央部には決して黒色部なし後翅外縁は巾廣く黄褐色にして内に小黒色の小圓紋を列す初夏發生するものは

Var. *porina* Olive.

翅の擴張 一寸二分—一寸二分五厘

と稱し全體黒褐色にして前後翅を貫きて白帯ありこの白帯は前翅第一室には入らず亦中室前にも大白紋あり前後翅とも外縁に沿ひて黄褐色及び

白色紋あり晩夏發生するものは

Var prorsa L.

翅の擴張 一寸四分

と稱し前種に酷似し只外縁の黄褐紋を缺くのみ

採集地 コキン

Arschnia burejana Brem. さかはちてふ

翅の擴張 一寸三分—一寸五分

前種に酷似せるも稍圓味を帯び後翅外縁中央は尾状をなさざるを以て容易に之を區別しうべし季節によりて三形あり春季發生するものは前種春形に酷似するも稍黒色部多く前翅後縁は翅を貫く黄褐條と同じ巾の白色紋を有す

初夏發生するものは前種のこの季節に發生するものに酷似し只異なるは前翅の白帯が第一室に入ると後翅外縁中央に尾状突起あらざるのみなり
晩夏發生するものも只之あるのみ

採集地 コキン

Melipotis aethalia L.

翅の擴張 一寸三分—一寸五分

全體橙赤色にて黒條黒紋を有す雄は前翅翅脈は黒色前縁後縁及び外縁は淡黒褐色にして基部は黒色中室には一の黒斑と二ヶの黒褐色にて囲まれたる褐色部あり其他外縁に沿ひて微かなる二條の黒帯あり其外方にあるものは翅脈に沿ひて犬牙状を有す後翅も翅脈黒く外縁は淡き黒褐色にして三條の黒褐色環ありその外方のもは翅脈に沿ひて犬牙状をなす中室には黒褐色環を有する褐色部あり早にありては多少淡色にして黒紋黒條は明瞭なり前翅裏面は橙紅色にして前角は黄金色を帯び表面に於ける斑紋は極めて微かなり後翅は黄色にして二條の橙赤色環ありすべて黒褐色にて縁とられ其内部にあるものは二個の黄色紋を包む
早は之と大差なきも多少黒色多きが如し

採集地 コキン 關家屯

Argynnis daphne Schiff. へうもんてふ

翅の擴張 一寸七分—一寸九分

橙赤色にして翅脈は黒色を呈し其間に黒紋黒條を散在す前後翅脈共に外縁犬牙状黒色にして内に三列の黒色の圓紋あり其最も内方にあるものは前翅にては多少半月形をなし後翅にては連結して黒條となる前翅中室には三ヶの黒色の圓まれたる橙黄色の部あり

早は多少暗色を帯ぶ裏面前翅黄赤色にして前角は多少うすく表面に於ける紋を表はす後褐基部黄綠色にして二條の暗褐色體ありて栗色にて縁どらる外部の茶褐色にして基部に接する部分は黒褐色の暈ありて二列の暗色にて圍まれたる緑色紋を有す其紋様極めて變化多し

採集地 奉天 大連 コキン 關家屯

Argynnis adippe L. うらぎんへうもん

翅の擴張 一寸二分—一寸四分

翅は橙赤色にして黒條黒紋あり基部は暗褐綠色を呈し前翅外縁は黒色にして内に三列の黒色紋列あり中室内に三個の黒條を有すは第二第三翅脈上に二條の *Punius* を有す後翅は外縁黒色にして之に沿ひて一條の新月形の黒色紋あり其内方に大小五個の黒色紋列と屈折せる一條の黒色帯あり

裏面は前翅黄赤色にして前角は多少綠色を帯び三ヶ所の銀白色紋あり其間は濃綠色をなす後翅外縁に沿ひて黄色帯を有し一列半月形の銀白色の紋あり仲は暗黄綠色にして内に銀白色紋散在し外縁黄色部の堺には濃褐色の紋列あり内に銀白色の微點を有す

雌は其色淡色なり

採集地 奉天 コキン 大連

Argynnis neippe Fall. たほうらぎんへうもん

翅の擴張 二寸乃至二寸五分

前種に酷似し稍大形なりは前種より稍濃色にして *punius* は第二翅脈上に於て極めて僅かに存す後翅の外縁に沿ひてB字形の紋列あり其内方には三個の黒色紋列と甚しく屈折せる黒條あり裏面は前翅より一般濃色にして外縁に沿ふて一列の銀白色のB字紋あり中央の褐色紋列は相接せず之を以て前種と區別しうべし

採集地 北陵前

Argynnis rufana Motsch. おほうらぎんすじへうもん

翅の擴張 二寸二分—二寸五分

全體橙赤色にして黒紋黒條を散在す *Plumius* は第一第二第三の脈上に明瞭に存す後翅表面の翅底には屈曲せる黒紋ある裏面前翅は黄赤色にして微かに表面の紋を表はし前角は暗黒綠色を帯ぶ後翅は恰んど中央に於て切れくなる銀色紋列によりて二分せられ基部に向へる部分は帶黄綠色にして二條の細き淡褐色線あり外部は黒褐色にして暗綠色の紋列あり多少汚點に類す

(この種に甚だ酷似するものに *A. Indice pull.* なるものあり其前翅前角の長く伸びざると

Plumius の一二の翅脈上に止ると後翅表面の翅底の黒條は翅脈によりて切られ點列をなすによりて區別せらる)

SATYRINAE *じやのめつと* 亞科

Satyrus dryas Scop. Var. *bipunctatus* Motsch. *じやのめつと*

翅の擴張 一寸六分—二寸三分

翅表は一様に黒褐色にして前翅基部及び外縁は多少濃色を呈し普通前翅

に二個後翅に一個の内部藍色の環紋有す裏面は稍うすく外縁は色濃く前翅上部の環狀紋は細き暗黄色にて縁とらる後翅には小き褐色の連狀紋あり雄には裏面後翅に黒褐灰白暗褐の三條を有す變化非常に多き種にして時に褐色を呈し前翅環紋往々にして三個なる事あり雌草間に極めて普通なり

採集地 北陵前 關家屯

Parage achine Scop. Var. *achinoides* Butl. *うらじやのめ*

翅の擴張 一寸六分

全體暗褐色にして前翅に五後翅に三或は四の微かなる黄環を有せる黒色環紋あり各にありては前翅環紋の後方に灰白色の斑紋あるを常とす裏面は色稍うすく前翅に於ては環紋表面よりも明瞭にして内部に白色の美點あり外縁に沿ふて二條の黄條あり後翅には六ヶの環紋あり其後角にあるものは内に二ヶの白色微點を有すこの環紋の後方に白色若しくは擬白色の帯あり早にありては往々中室内に白色の三角紋を表はす事あり樹間陰地を緩慢に飛翔す

採集地 コキン

Parage delaminia Ev. つまじろうらじやのめ

全體暗黒色にして前翅前角に近く一後翅に二の中心白色の黒色環紋あり
 縁毛は白色にして予に於て殊に著し前翅環紋の後方に斜に平行せる二紋
 ありこの色は否にありては灰色或は擬白色予にありては純白色にして甚
 だ著し

裏面はほゞ表面の如く前翅の環黄は表面よりも顯著にして淡黄色にて縁
 とらる表面の白紋は否予共に裏面に於て甚だ明瞭にして多少電光状をな
 す後翅には六個の環紋あり皆淡黄色にて縁とらる又内に白色の微点を有
 す其中肛角にあるものは内に二個の白色微点を包むこの紋列の内方に白
 色點列あるを常とすこの蝶は飛翔の状奇異にして稍尺蠖蛾に類す

翅の擴張 一寸七分—二寸

採集地 コキン

Parage epaninondas sign. きまじらもどき

翅の擴張 一寸八分—二寸

全體淡黄褐色にして外縁に渡りて暗褐色を呈す内に不規則にして朦朧た
 る淡黄色の班紋あり前翅前角に近く一個後翅外縁にて沿ひて數個の黒色
 圓紋を有す

裏面は全翅帯褐鮮黄色にして前縁より後縁に向ひて走る數條の暗褐色の
 屈曲條あり前翅前角に近く環紋一ヶを有す後翅は基部稍暗色にして數條
 の不規則なる屈折せる暗褐色あり外縁は多少暗色を帯び六個の環紋を列
 す其後角にあるものは二個の白色微点を存す

Parage Schrenkii Men おほひかげ

翅の擴張 二寸—二寸五分

翅表は暗黒褐色にして外縁及基部稍濃く前翅前角に近く一或は二後翅外
 縁に近く五個或は六個の黒色圓紋あり裏面は稍淡色にして外縁に沿ひて
 三條の暗色泉あり前翅に一個後翅に六個の黄色環を有する内部白色の黒
 色環ありこの内方に茶褐色の線状を走らす盛夏の候に現出し樹林の間を
 静かに飛翔す

Coenonympha oedippus F. ひめひかげ

翅の擴張 一寸—一寸三分

全體黒褐色にして表面に於ては完く紋なし裏面は黄褐色にて稍黄金色を帯びるは後翅に五個の黄色環を有する内部に銀點を有する黒色環紋あり外縁に沿ふて美はしき銀色條を有するにありては前翅に四ヶの黄色環を有する、黒色環あり外縁に沿ふて美はしき銀色條を有を後翅雄と大差なしこの蝶は常に草間にあり飛力甚だ弱し

採集地 大連

Coenonympha sp.

翅の擴張 一寸—一寸三分

採集地 奉天北陵前

♂♀其色彩を異にす翅表鮮かなる橙黄色にして多少金光を帯び前翅外縁に沿ひて三個若しくは小環紋を有す裏面前翅は基部多少暗色を帯び外縁は黄色を呈し之に沿ひて三個若しくは四個の中心銀白色の黒環紋あり黄色にて縁とらる後翅は大半暗色を帯び外縁は多少橙黄色を帯び銀條を有す之に沿ひて黄色にて縁とられたる中心銀白色の黒環紋六個を散在す其

色澤に變化多し

翅の擴張 一寸六分—一寸七分

採集地 コキン

翅は白色翅脈は黒色にして黒條黒紋を有す前翅は外縁黒色にして前縁より外角に向ひて二條の黒帯を有す後翅前縁より肛角に用ひて切れたる一條の中廣き黒帯あり裏面は多少淡黄色を帯び前翅表面の紋狀は微かに表れ前角に近く極めて微かなる中心藍色の環紋あり後翅前縁より後角に斷續せる暗黄帯あり其内に三個の明瞭なる環紋と極めて微かなる二個の環紋を有す

LYCAENIDAE. シツミゴキ科

Niphandia fusca Brem. et Gray. くろしツミ

翅の擴張

翅表は全體暗黒褐色にして♂は多少紫藍色を帯ぶ縁毛は白色なり裏面は淡黒褐色にして黒褐及淡黒褐紋を散在し周圍は白色にて縁とらる

採集地 二百三高地 大連 奉天 鐵嶺

Chrysophanus phlaeus L. めにしんみ

翅の擴張

春形に季節によりて色彩を異にし前翅橙赤色にして多少金色を帯び前縁外縁は黒褐色にて縁とらる内に數個の黒點を散在す紋翅は一樣に黒褐色にして外縁に沿ひ鋸齒狀の黄赤色體あり間々其内方に藍色の小圓紋列あるものあり裏面は前翅黄赤色にして外縁は灰褐色にて縁とらる十數個の黒紋を散在す後翅は灰褐色にして二列の小黒點列あり外縁に沿ひ半月形若しくは鋸齒狀の黄赤色體あり

夏形は春形に類するも一般に黒味を帯び前翅黒紋は大なるを常とす後翅裏面の黄赤色體は殆んど紅色を帯ぶ間々殆んど暗黒色のものあり幼蟲は短くスイバを食す

採集地 旅順口

Lycaena argus L. まじみてふ

翅の擴張

さす其色彩を異にしさの翅表は淡藍紫色にして外縁は稍黒味を帯び縁毛は長く白し裏面は灰色にして基部稍濃く三條の黒紋列あり第一第二の間は橙紅色帯をなす第一列の黒紋内は藍鱗を含む

♀は黒褐色にして裏面の橙紅色體を表はし後翅に於ては極めて顯著にして半月形となす一種 *Agon* と稱するものあり稍小形にして細く裏面色濃く黒點は比較的大なるが如しこの種は變化甚だ多く殆んど別種の觀を呈するものあり春季より晩夏にかけて山地に普通なり

採集地 コキン

Lycaena euphemus Hb. こままじみ

翅の擴張

全體暗黒褐色にして外縁は多少濃く微かなる黒紋列あり雄は翅底銀黄色を帯ぶ裏面は褐色にして黒點列及び黒點を有し後翅後底にあるものは濃色にして白き臨劃を有すこの變種に

Var. *Kazanoto* Druce と稱するものあり翅の大半は藍色を帯び黒紋明かにして甚だ美麗なり

採集地 奉天 大連

Cyaniris argyolus L.

Var. *leventi* Burt. ろりしりみ

翅の擴張

♂は全體空色にして外縁は黒く縁とらる裏面は銀白色にして前翅には二條の黒點列あり後翅には黒點及び黒點列を散在す

♀の翅表は翅底を除く外大部分暗褐色なり

採集地 奉天 旅順口

HESPERIDÆ

せりてふ科

Thanaos montanus Brem. みやませり

翅の擴張

♂前翅は黒褐色にして前角は大部分灰色を帯び外縁に沿ひて二條の褐色條あり基部は稍濃色を呈す後翅は黒褐色にして黄色紋を散在す裏面は前翅褐色にして二條の黄色點列を有す後翅は黒褐色にして表面の紋様を表はす♀にありては前翅表面の前縁に灰白色の白斑あり早春發生す

幼蟲は竹葉を食す

採集地 關家屯 コキン 奉天

HEPEROCERA.

蛾類

SPHINGIDÆ.

すめが科

Macroglossa stellarum L. ほじや

前翅は黒褐色にして二條の黒褐横線あり後翅黄褐色にして基部外縁部暗色を帯ぶ幼蟲は緑色にして白點及び白線を有しカハラマツバを食す

Hemaris radians Walk. すきばほうじやく

翅は暗褐色にして中央部透明なり基部縁部に黄褐色毛を有す體は黄褐色にして腹部黒色を混す第六節黒色なり尾總は黒色に黄褐色を混す

LYMANIIDÆ

どくが科

Portesia similis Fuess. もんしろどくが

翅の擴張 八分—一寸三分

翅は雪白色にして前翅の前縁角に近く暗色の二點ありされど往々にして

之を缺くことあり尾端に黄色毛を叢生す幼蟲はキンケムシと稱し桑梅櫻
葉すぐり等の葉を食す

Lymnobia dispar L. きいまいが

翅の擴張 合 一寸六分内外

♀ 二寸八分内外

♀は灰白色にして兩翅にく字形黒褐紋を有し外縁に八個の黒褐紋あり前
褐に數個の暗色齒牙形條を有し後翅に一個の灣曲條あり

♂は殆んど黒色にして紋理は略♀に同じく飛翔の際回旋するを以て此名
あり

幼蟲は褐色にして藍色及赤褐色の疣狀突起を有しそれより長毛を生す梨
櫻はんのき等の葉を食す

SATURNIIDÆ やままいが科

Anthaena Pernyi Guér. ろくさん

翅の擴張 四寸—四寸八分

翅は黄褐色を常とすれども往々緑褐色赤褐色を呈する事あり前後翅の中

室前に眼狀紋あり外半は黒色内半は赤黄色にて縁取られ中央は透明なり
前角近くより外縁に平行して黒褐色と灰白色との相接せる一横帯あり内
方にも三條の褐色條を有す我國に産するやままい (*Anthaena pernyi Guér. Var*
yamamai Guée) に酷似すれども前翅前角の鉤狀銳きが如し

幼蟲は黄綠色にして疣狀突起を有し之より短粗毛を生じ兩側に銀白點を
有すカシ、クヌギ等を食ひ黄色の繭を營む此種は本邦固有のやままいに類
すれども二回の發生をなすと繭の黄色なるとにより區別し得べし本邦に
於ては明治十一年頃支那より輸入せりと云ふ

採集地 賽馬集 四方砦子 蛤蟆塘

BOMBYCIDÆ 蠶蛾科

Bombyx mori L. かひこ

全體灰白色にして顯著なる斑紋を有せず翅脈は隆起し淡黄褐色を呈す幼
蟲は灰白色にして淡青色を帯び第二節背面に黒褐色の○字狀の斑紋あり
普通桑を食へどもコウゾ、ドシヤ、チサ、キバナノバラモンジンを食ふと云ふ
白色の厚き繭を營み之より絹糸を紡ぐ

採集地 四方位子

NOCTUIDÆ 夜蛾科

QUADRIFIDÆ 列蛾亞科

Palaella Virgo Tröt. うすむらさきうは

記載略す 採集地 旅順

GEOMETRIDÆ しやくとりが科

LARENININÆ なみしやくとりが亞科

Gandaria Fisseni Brem. おまたらおほなみしやく

翅の擴張 一寸七分—一寸八分

前翅は橙黄色にして外縁部は暗色を帯び前縁の翅尖に近く三角形黄斑を形成し暗色の横帯數個を暗褐の室點を有す後翅も黄色にして室點暗褐に三個の暗褐横帯あり

採集地 關家屯

ACIDALIINÆ ひめしやくとりが亞科

Gn. sp.? ひめしやくの一種

ORTHOSTIXINÆ ほししやくとりが亞科

Orthostixia textilis WK. Var. *seriaria* Motsch. ほししやく

翅の擴張 一寸五分内外

白色にして外縁部は二列に黒點を散し中央に一黒點あり前翅には基部に近く三黒點を有す晝間飛翔す

幼虫は黒色に黄白色線を有すいはたねすみもち等の葉を食す

BOARMINÆ えだしやくとりが亞科

Bizia sexaria WK. つきとびえだしやく

翅の擴張 一寸七分内外

翅は暗黄色前翅外縁は幅廣く暗褐色を呈し前縁に同色の二斑あり中央には淡黄褐黄帯を有す後翅は外縁は暗褐色にしてかすかなる二條の帯あり

採集地 賣家堡子

SYNTOMIDÆ かのこが科

Syntomis germana Feld. おぼだかのこ

翅の擴張 八分—一寸

前翅は黒褐色にして紫光を有し白色の透明斑紋五個あり後翅は前外縁部黒褐色にして中央より基部に至る部白色透明なり胸部は暗黒色腹部は黄色にして各節に黒環條あり

ARCTIDÆ

ひとりか科

ARCTIINÆ

ひとりか亞科

Spilosoma bifrons WK. はらあかひとり

翅の擴張 一寸二分—一寸二分

兩翅共に白色にして時として前翅の内縁に近く二個の黒點を有す腹部赤色にして背側に黒斑紋を有す

幼蟲は褐色を密生し種々の植物の葉を食す

採集地 旅順 大連

Spilosoma niveus Men. しろひとり

翅の擴張 二寸四分内外

兩翅共に雪白色にして腹背には黒點縦列す其の右左に赤色斑あり

採集地 旅順 大連 鐵嶺

Creatonotus laetivens Cram. きへあかひとり

翅の擴張 一寸六分内外

前翅の前縁に赤條を有す前翅に一個後翅に二三個の黒點あり腹は各節に黄色と黒色との環帶を有す

幼蟲は黄色にして褐色の粗毛を有すとうもろこし、すいたまは、き、等を食す

採集地 旅順

LETHOSIINÆ

Oeonistis quadra L. Var. *dives* Butl. よつほしほそば

翅の擴張 一寸二分内外

合は前翅灰黄色にして基部は前縁に沿ひて黒色をなし後部に黄褐色なり外縁部暗色を帯びて後翅は淡黄色あり早の前翅は黄色にして二黒點を有し後翅は合に同じ

幼蟲は黒色にして白條及灰藍色條を混じ赤褐色の顆粒を有し且つ毛を有

す樹木及屋根に生ずる地衣類を食すといふ
採集地 ヨキン 鐵嶺

COCHLIDAE. 刺蛾科

Monema flavescens WK. いらが

翅の擴張 一寸—一寸二分

前翅は黄褐色にして基部黄金色を呈し前縁は黒褐なり翅尖より二個の褐色線を發す黄褐の室點あり後翅は淡黄褐色なり

幼蟲は黄色、綠色、紫色等を混じ甚た美なり又枝ある刺毛を有す腹脚甚しく退化せり繭は堅牢にして俗にすゞめのつぼ又はすゞめのたまごともいふ

採集地 旅順

PIRALIDAE. 螟蛾科

PYRAUSTINAE. 野螟蛾亞科

Sylepta multinealis Guen. わたのめいが

翅の擴張 九分内外

淡黄色にして暗褐色の脈と同色の横線とは網狀紋理をあらはす

幼蟲は黄緑にして小疣を有し且つ粗毛を有す草綿其他錦葵科の植物を食す

ODONATA 蜻蛉目

LIBELLULIDAE. とんぼ科

Pantala flavescens Fabr. うすばきとんぼ

採集地 七發島(朝鮮)

Sympetrum sinensis selys. なつあかね

採集地 大連

AGRIONIDAE. いととんぼ科

Istes temporalis Selys. あをいととんぼ

採集地 大連

ORTHOPTERA. 直翅目

BILATIDAE. こまぶり科

Phyllodromia germanica Steph. ちやばわこまぶり

採集地 大連 旅順 奉天 賣家堡子

ACRIDIDÆ いなぎ科

Sphingonotus sp.

採集地 大連 *S. japonica* Sauss. かはらばつた

採集地 大連 *Trilophidia annulata* Thunb. いぼばつた

採集地 鐵嶺

Oedaleus infernalis Sauss. くるまはばつたもとぎ

採集地 大連

Tyxalis nastia L. きやうりやうばつた

採集地 大連

LOCUSTIDÆ

ありありす科

Gompsocleis nikado Burm. ありありす

採集地 大連

GRYLIDÆ

こほろぎ科

Oceanthus longicauda Mats. かんたん

採集地 コキン 關家屯

Nemobius nigrofasciatus Mats. きたらす

採集地 關家屯

PHYLNCHOTA

有吻目

CERCOPIDÆ

あむあむこ科

Aphrophora Sibirica Mats. はこむぢあ

採集地 奉天

Aphrophora sp.

採集地

CICADIDÆ

蟬科

Pemponia muculicollis Matsch. はんくせみ

採集地 奉天

Gnaptosaltia corolula Stal. おみらせみ

採集地 鐵嶺 奉天

CIMICIDÆ

とこじらみ科

Cimex lectularius L. とこじらみ(なんざんむし)

採集地 大連 奉天

GERRIDÆ

あめんぼ科

Hygrotrichus sp.

採集地 遼陽

COREIDÆ. へりかめむし科

Megalotanus costalis Stal. ゑばねほごかめむし

採集地 不詳

Corizus hyalinus F. ひめかめむし

採集地 不詳

PENTATOMIDÆ. かめむし科

Graphosoma rubrilineata West. おかすぢかめむし

採集地 奉天

Jala decunnectata Mats. とほしかめむし

採集地 不詳

NEUROPTERA 脈翅目

CHRYSOPLIDÆ. くらかげろう科

Chrysopa perla L. くらかげろう

採集地 大連

TRICHOPTERA. 毛翅目

PHRYGANIDÆ. とびげら科

Holosoma regina M'L. むらさきとびげら

採集地 大連

DIPTERA. 双翅目

MUSCIDÆ. ろくばり科

Gonia fuscipes Mats. おほつぐらすぢはりばり

採集地 大連 奉天

SYRPHIDÆ. 食蚜蠅科

Gn? sp?

採集地 大連

JABANIDÆ. あぶ科

Chrysophos dispar L. めくらあぶ

採集地 大連

CULICIDÆ. か科

Culex pipiens L. か

採集地 奉天 大連

Anopheles Sinensis Wied. はまじらか

採集地 大連

SIPHONAPTERA. 微翅目

PULICIDAE のみ科

Pulex irritans L. のみ

COLEOPTERA. 鞘翅類

COCINELLIDAE. つんとうむし科

Coccinella 2-punctata L. なつはしてんとう

採集地 旅順口

Troylen conglobata L. ひめかめのこてんとう

採集地

Psychantia axyridis pall. てんとうむし

採集地 奉天

Orthone hexapilota Hope. かめのこてんとう

採集地 奉天 南山

Seymuns sp. せすじてんとう

採集地 四方砦子 關家屯

CHRYSOMELIDAE. はむし科

Gr. sp?

CERAMBIIDAE. かみきりむし科

Melanaster chinensis Foster. ほしかみきり

採集地 鐵嶺

Cytus sp.

採集地 旅順

MELOIDAE. つしはんめう科

Epicauta Gorthami Mans. ちめはんめう

Epicauta sp.

採集地 南山 奉天

CURCULIONIDAE. ろうむし科

Chlorophanus grandis, Roel. むぎろうむし

CERIDAE. 朝公蟲科

Cleroides formicarius L. むりもどろ

CANTHARIDAE. はたる科

Pyocelia aturipennis. Lew. むろはたる

採集地 寛家堡子

BUPRESTIDAE. たまむし科

Agrilus bispinipennis, Lew. くるほしたまむし

採集地 ノキン

SCARABAEIDÆ. つかねむし科

Catharus sp.

採集地 大連

Ceonia Vrevilarius Lew. まほしうぼじはなむぐり

採集地 鐵嶺 大連

Popilia japonica Neuman. まめこがね

採集地 大連 大石橋 鐵嶺

Aphadius soluskyi Harold. まぐそこがね

採集地 大連

Onthophagus atene. Welterh. くるまるこがね

採集地 金州

PLATYCERIDÆ. くわんだむし科

Macrodarcus rectus, Motsch. くわがたむし

採集地 關家屯

Cladognathus inclinatus, Motsch.

Var *inferus* Harold. のこぎりくわがた變種

DERMESTIDÆ. かひぎむし科

Dermestes cadaverinus, F. かひぎむし

採集地 大連

SILPHIDÆ. しじむし科

Necrophorus Concolor, Kromb. くるしじむし

採集地 二〇三高地

CARABIDÆ. せむし科

Pseudophonus tridens Mor. こむくむし

採集地 旅順

Calosoma chinensis Kirby. ゑぞかたびるせむし

採集地 大連

HYMENOPTERA. 膜翅目

ICHNEUMONIDÆ. ひめばす科

採集地 大連

SCOLIDÆ. つらばす科

採集地 大連

うすばやどりばす

Vespa oingriata. 5145

採集地 大連

APIDÆ. みつばち科

Apis japonica Rad. みつばち

採集地 賣家堡子

遼東の植物

岡崎常太郎

まるで鐵砲丸見たやうな通り抜け一遍の旅行なれば新戰場を駆けめぐることさへ十分には出来ず、まして専門的研究は夢にも叶はず、只だひた走りに走りつゝ時々目にとまりしものを拾ひ集めて、古雑誌の間にたばさみて持ち帰りしものを左に掲ぐることゝなしたつされど本邦産と同種のもの殆んど無く標本も亦不完全なる爲め明かに其種名を知ることが得ず、よつて只屬名のみを掲げ、又煩を厭ひて種の特長を書き加へず、されば専門の人々に對しては参考にもならず、斯の道ならぬ方々には無意味なる名前の類並へにて、誠に乾々燥々にして恰も生獣を噛るが

如しこの御批評は素より甘んじて受くるところなり

Polypodiaceae 水龍骨科

Woodsia sp. (首山堡)

ワクロソダ類

Polypodium sp. (首山堡)

ヒトツバ類

Athyrium sp. (首山堡)

アキノラビ類

Asplenium sp.

トクノラシダ類

Equisetaceae 木賊科

Equisetum rumanissimum Desf. (金州)

イヌボクサ

Equisetum sp. (老虎灘附近)

イヌボクサ類

Lycopodiine 石松門

Lycopodiaceae 石松科

Lycopodium sp. (二〇三高地)

ヒカゲノカヅラ類

Lycopodium sp. (旅順大連)

ヒヤマヒカゲノカヅラ類

Selaginellaceae 巻柏科

Selaginella involvens Spring. (大連富士)(首山堡)

イハヒバ

Pinaceae 松杉科

Pinus sp. (北陵)

クロマツ類

Alisnaeace 澤瀉科

Alisna plantago L. Var. parviflorum (Beck) Torr. (大連—老虎灘)

サジオモダカ

Gramineae 禾本科

Rottbaccia sp. (大連)

ウシノシツメイ類

本邦産カニハニシツメイ類なるものあり。

Panicum sp. (大連)

ノビエ類

日本産ハコギリ類なるものあり。

Pleurum sp. (大連老虎灘)

アハガヘリ類

日本産ハコギリ類なるものあり。

Pileum sp. (大連)

ミヤマアハガヘリ類

日本産ハコギリ類なるものあり。

Setaria sp. (大連旅順)

ユノコログサ類

日本産ハコギリ類なるものあり。

Stenria Viridis Beauv Var. gigantea Fr. et Sav.

オホエノコロ

Panicum sp. (大連)

ヒエ類

日本産ハコギリ類なるものあり。

Panicum sp. (大連)

ヌヒシバ類

日本産ハコギリ類なるものあり。

Panicum sp. (金州)

キビ類

Eragrostis sp. (奉天北陵内大連)

ヌバズガヤ類

Avena Sativa L. (老虎灘附近大連)

カラスムギ

Avena fatua (旅順)

チヤヒキ

Calamagrostis sp. (首山堡大連)

ホツスガヤ類

Themeda sp. (旅順)

カルカヤ類

Poa sp. (大連)

ヌバズノカタスビラ類

Dactylis sp. (大連)

カモガヤ類

Melica sp. (大連)

ミチシバ類

- Eriochloa Villosa Kth. (大連撫順) チルコビエ
- Pennisetum sp. (老虎灘附近) チカララシバ類
- P. japonicum Trin. Var. viridescens, Miq. (大連) アラノチカララシバ
- Pollinia sp. ウソヌケ類
- P. sp. ウソヌケ類
- Cyperaceae 莎草科 ミコシガヤ類
- Carex sp. (撫順) ヤヤキ
- 日本種「ノコギリ」の葉は「ヤヤキ」
- Fimbristylis sub-bispicata Nees. (老虎灘附近) ヌヤハリキ
- Helosciaris palustris R. Br. (馬蜂溝) サソカクキ
- Scirpus triquetra L. (大連老虎灘) ウキヤガラ類
- Scirpus sp. (大連老虎灘)
- 日本種「キヤガミ」の殆んど同じ花序の全形稍小なる様なり。
- Commelinaceae 鴨跖草科 ウエクサ
- Commelina Communis L. (大連)

- Juncaceae 燈心草科 ミヅキ
- Juncus Gerardi Loiscl. (大連) カウガイイゼキシヤウ類
- Juncus sp. ユウ類
- Liliaceae 百合科 ヤハラウキヤウ類
- Allium sp. (首山堡) ハナヌゲ類
- Allium sp. (首山堡) クサスギカヅラ類
- Anemarrhenen sp. (奉天)
- Asparagus sp. (大連) キジカクシ類
- 日本種「近似」の葉は赤色なり葉は頗る細狭にして尖り葉腋に二個への葉質
- Asparagus sp. (大連) ヒメクランボウ類
- Homocallis sp. (南山) ツルボ
- Scilla japonica Bal. (首山堡)
- Liliaceae 慈尾科
- Iris? (柳掛屯)

Orchidaceae 蘭科

Spiranthes australis Lindl. (遼陽)

キヂバナ

Salicaceae 楊柳科

Populus sp.

ヤチナラシ属

一見梨樹に似て葉は之れより小なり、大連小學校構内に植ゑられ、其他鐵道の沿道各所に於て見受けられたり、清人之れを柞樹と稱す、所謂柞蠶の飼料なり。

Salix sp. (奉天)

カハヤナギ類

日本産「カハヤナギ」に近似の種なり。

Salix sp. (大連西公園)

コリヤナギ類

日本産「コリヤナギ」に近似

Salix sp. (鐵嶺)

サロコヤナギ類

日本産「サロコヤナギ」に近似

Salix sp. (金州)

ヤナギ類

Retulaceae 樺木科

Carpinus sp. (鐵嶺)

シデ類

Carpinus sp. (鐵嶺一馬蜂溝)

クマシデ類

Fagaceae 殼斗科

Quercus sp. (二龍山)

カシハ類

日本産「カシハ」に近似

Ulmaceae 榆科

Ulmus sp. (鐵嶺龍首山)

ユレ類

Moraceae 桑科

Cannabis sativ L. (大連)

アサ

Humulus japonicus S. et Z.

カナモヅラ

Urticaceae 蕁麻科

Urtica sp. (奉天)

イラクサ類

Polygonaceae 蓼科

Polygonum Convolvulus L. (大連)

ツバカヅラ

P. orientale L. Var. *pilosum* Meisn. (鐵嶺, 燕順)

オホケダマデ

Polygonum sp. (老虎灘附近)

ウナギツカミ類

Caryophyllaceae 石竹科

Dianthus sp. (老虎薺)

オウゴンダセキチク類

「アンシヤペン」に似て、萼下の苞は萼長の約三分の一にして卵形にして先端著しく尖る。

Dianthus sp. (旅順西木陽蕪)

カウチヂシロ類

「コナキミンコ」に似たれども花瓣の弦狭く、裂状至つて不規則なり。

Dianthus sp. (旅順)

チヂシロ類

Gypsophila sp. (旅順)

イトチヂシロ類

本邦庭園に栽培せるものと殆んど區別なし、只之れより花梗短かきを以て、花葉密なるのみ。

Melandryum sp. (旅順)

フシジロ類

Segina sp. (奉天)

シメクサ類

此の外奉天に於て得たるもの一種あれども日本産の之れに類似せるもの無し

Ranunculaceae 毛茛科

Clematis sp. (奉天北陵)

セニンソウ類

「ギンニンナツ」に近似す、羽状複葉をなし、小葉は披針形をなす。

Ranunculus sp. (奉天)

キンギョウダ類

Ranunculus sp.

キンギョウダ類

全形は「ヒキノカサ」に近似す、花は「ヒキノカサ」に似たれども葉は少しく異なり、根出葉の先端は五乃至十出なり、馬蜂溝遼河沿岸に産す。

Ranunculus sp. (鐵嶺)

フトロゼツ類

「トコロザン」と同種か。

Thalictrum sp. (奉天、撫順)

ノカラヤツ類

「ハカニヤン」と同種ならんか。

Berberidaceae 小蘗科

Berberis sp. (鐵嶺)

メギ類

日本産「メギ」より荒大にして、狭長なり、大なる鋸齒ありて、堅硬なり、刺は小なりとす。

Cruciferae 十字花科

Ardis sp. (奉天)

エゾハタザホ類

Camelina Sp. (金州)

日本産タマシナに同じ、大連伏見臺にも産す。

タマシナ類

Dontostemon sp. (大連)

ハナハタザホ類

Nasturtium montanum Wall (大連)

イヌガラシ

Nasturtium sp. (大連)

スカシタゴバウ類

Rhaphanus sp. (皆山堡 99 高地)

ズイロン類

Rhaphanus sp. (大連)

ズイロン類

「ズイロン」に類似の種あり、大連宮士に産す、長さ五、七

グンバインナジナ類

Thlaspi P. (旅順)

發せニツクニタマシナに似るにして、各胞に一子を藏す、翅を狭くして、喉に「ハシ」ト

ナシナに類似の種あり

Risclucene 木犀草科

モクセイイサウ類

Reseda sp. (金州)

Dryasulacene 景天科

Penthorum sedoides L. Var. chinense (Pursh.) Maxim. (馬蜂溝)

タコノアシ

Sedum sp. (北陵)

キリンサウ類

「ギンバイン」ギンバインナジナに似る

Rosaceae 薔薇科

Agrimonia pilosa Ledeb. (旅順)

キンミジヒキ

Geum japonicum Thunb.

ズイロンサウ

Mespilus sp. (奉天北陵)

オホサソウサウ類

本邦種オホサソウナシに似たれども、其裂狀二層深くして殆んど全裂なり。

Potentilla chinensis Ser.

カハラザイコ

Potentilla sp. (旅順 西太陽溝)

カハラザイコ類

莖葉共に白き柔毛密生してピロイドの如し、殊に葉の裏面に多しとす、羽狀裂の各裂片又羽狀に裂くること「カハラザイコ」の如くにして、其各片又更に二乃至三裂す。

Potentilla sp. (大連)

カハラザイコ類

Potentilla sp.

ツルキンバイン類

北陵より奉天に連る芝原に産し、日本産ツルキンバインに近似す、葉の裏面に純白

こして堅剛なる毛密生す。

Prunus japonica Thunb.

日本産と同じ、嶺南の谷間盛に茂る。

Prunus sp. (北陵)

北陵の森林中に多し、葉は本邦産「イヌザクラ」より大にして、表面平滑なり。

Rosa sp. (旅順)

Rosa sp. (首山堡)

Rubus sp. (旅順)

Sanguisorba officinalis L. (大連)

Leguminosae 苜蓿科

Acacia sp. (大連)

Aeschynomene sp. (撫順)

Astragalus sp. (大連)

Astragalus sp. (撫順)

Colutea arborescens L. (旅順公園)

ニハクメ

イヌザクラ類

ハマナス類

タカキバラ類

ナハシロイチボ類

フレモカク

アカシヤ類

クサキム類

ゲンゾク類

ゲンゾク類

バククソクメ

Colutea arborescens L. (旅順)

果皮は蒴状に膨れ空気を含有し、小さな種子を藏す。兩葉を以て壓迫すれば音を發す。恰も膀胱の如し。

Desmodium sp. (首山堡)

日本産「ニギカンギク」に比して羽状複葉の小葉が厚くして小なりとす。花は稍大なり。

Glycine sp. (遼陽)

Glycyrrhiza sp. (長嶺子)

Indigofera sp. (首山堡大連)

「ニンニキ」と異なるは葉形圓狀楕圓形にして花は淡紅色なることなり。大連宮土の標野に於て満開せるを見たり。

Indigofera sp. (鐵嶺)

Lespedeza buergeri miq. (旅順)

Lespedeza sp. (鐵嶺)

日本産「ニギカンギ」に近似す。小葉は稍大形。花軸亦長し。花は黄色なり。

バククソクメ

ニギカンギク類

ダメソク類

カンザク類

ニハクメ類

ロヤクナギ類

キハギ

メドハギ類

Lespedeza sp. (大連)

イヌハギ類

葉は小葉三個より成る、各小葉は「ハンズハギ」に似て、花序は葉腋より生じ、短柄に
しずくさ。

Lespedeza sp. (撫順)

イヌハギ類

Lespedeza sp. (旅順)

ハギ類

Lespedeza sp. (大連)

ヤハズサウ類

Lespedeza sp. (鐵嶺)

ヤハズサウ類

Medicago lupulina L. (奉天)

コマツナウヤゴヤシ

Medicago sp. (大連西公園)

ムラサキウヤゴヤシ類

Medicago sp. (旅順首山堡鐵嶺)

シナガハハギ類

Sophora sp. (遼順北陵)

クラ、類

日本産「ララ」に酷似すれども羽状第葉の小葉は概して小形なり。

Trifolium lupinaster L. (奉天)

シヤヂクサウ

Trifolium sp. (大連)

アカツクサウ類

Vicia (大連)

クサフヂ類

葉大く下部の小葉は甚だ大にして、日本産「クサフヂ」に倍す、頂端の葉は細小にして日本産の二分の一に當る、花は日本産に酷似す。

尙ほ南山山嶺に於て得たるもの一遼陽に於て採集したるもの一種あれども其屬名を知ることを得ず。

Sophora sp. (北陵)

ヒメシユ類

日本産「ヒメシユ」と同種なるが如し。

Robinia pseudacacia L. (大連)

ハクエンシユ

Geraniaceae 犛牛兒科

Geranium sp. (大連)

フクロサウ類

「フクロサウ」に酷似す。

Geranium sp. (大連)

ヒメフクロ類

「ヒメフクロ」に最も近し、葉は羽状裂し各區分更に羽状裂す、裂状は披針線形なり、是れ一見「ヒメフクロ」と異なる所なり、花梗又甚だ長し、萼片は其尖部長くして、全長の半に及ぶ、されば一見稻の芒の如し、莖葉に密生せる毛は「ヒメフクロ」より一層密にして且つ大なるものあり。

Zygophyllaceae 莢蒾科

Tribulus terrestris L. (大連小學校内)

Simarubaceae 苦木科

Ailanthus glandulosa Desf. (金州, 大連西公園)

Polygalaceae 遠志科

Polygala sp. (奉天)

「ユキイキ」と殆んど區別する所なし、只葉の線形なるは明瞭なる區別なり、全長五
十指の

Euphorbiaceae 大戟科

Flueggea sp. (首山堡)

「ユトクハキ」に近似す、葉は卵形楕圓狀なり、果實は一見して大戟科なることを
知らざる、鐵嶺の谷間に深緑、吾人の目に映す。

Celastraceae 衛矛科

Euonymus europaea L. Var. *Hamiltoniana* Maxim. (奉天)

Aceraceae 槭樹科

Acer sp. (大連北公園)

葉は掌状7裂なり、葉も葉柄に近き一對裂片の外は何れも三淺裂なり、其狀「ヤグ
ハヤハヤ」の葉の裂片の如く従つて一葉の外形「ヤグハマサウ」の如し。

Sapindaceae 無患樹科

Cardiospermum Halicacabum L. (營口)

Rhamnaceae 鼠李科

Rhamnus sp. (北陵)

「ハロハキ」に似て、我が北國の森林中に繁茂す。

Zizyphus sp. (首山堡)

Vitaceae 葡萄科

Ampelopsis Serjaniaefolia Rgl. (鐵嶺)

Malvaceae 錦葵科

Abutilon Theophrasti Medic. (大連鐵嶺)

Hibiscus trionnum L. (鐵嶺)

Malva verticillata L. (大連)

ハナヒシ

シラビソ

ヒメハギ類

ヒトツバハギ類

アユミ

カデカヘダ類

フクセンカヅラ

クロクサモドキ類

ナツメ類

カイミヅサ

イナビ

ギンセンクワ

フユアソビ

Guttiferaceae 金縷桃科

Hypericum ascyron L. (北陵内、老虎灘附近)

トモユサ・ウ

Hypericum sp. (撫順)

ヲトギリサウ類

Violaceae 堇菜科

Viola sp. (南山)

スミレ類

Flacagnaceae 胡頹子科

Elaeagnus sp. (大連西公園)

グミ類

Onagraceae 柳葉菜科

Oenothera biennis L. Var. *Lamarckiana* Ser. (大連)

ツキミヅサ

Umbelliferae 繖形科

Bupleurum sp. (奉天)

ミシマサネゴ類

Bupleurum sp. (大連)

ミシマサネゴ類

Renicium sp. (大連)

ウキキヤウ類

Seseli sp. (鐵嶺)

イブキバウフウ類

葉が著しく羽状に深裂す。

Sium sp. (奉天北陵)

オハゼリ類

羽状複葉の小葉は狭長にして鋸齒多し。

尚ほ一種發陽(陽)名不詳

Ericaceae 石南科

Rhododendron sp. (大連富土)

メシヤクナゲ類

「メシヤクナゲ」以て

Rhododendron sp. (旅順)

ツ、ジ類

Primulaceae 櫻草科

Lysimachia sp. (西太陽灘)

トラノヲ類

花序垂るべくなく密生し、花梗は花より長し、葉は狭披針形なれば一見して「メシヤクナゲ」の如きにも區別せらる。

Lysimachia sp. (奉天北陵近傍)

トラノヲ類

葉に茸毛を密生し、日本産「トラノヲ」より厚く硬くして、狭長披針形なり。

Lysimachia sp. (北陵附近)

メシヤクナゲ類

葉は狭披針形をなし、一見「メシヤクナゲ」に似す、然れども花序は甚だ相似たり。

Lysimachia sp. (大連)

スベトラノヲ類

Stryraeaceae 齊墩果科

Stryra sp. (大連)

ユゴノキ類

Oleaceae 木犀科

Fontanesia phillzroides Labill

コバタバ

Fontanesia sp. (大連富士)

コバタバ類

「コバタバ」は種似葉は少なくして廣楕圓形にして小なり

Asclepiadaceae 蘿藦科

Asclepias sp. (奉天北陵, 首山堡, 旅順, 馬蜂溝)

タウワタ類

「タウワタ」は葉は長楕圓形に非らず近傍に多し

Metaplexis Stuntoni R. et S. (奉天)

カバインモ

Metaplexis sp. (南山)

カバインモ類

奉天近傍に種々なるもの白色の花を開くものと紫色のものがある

Pyconostelma sp. (撫順)

スバサインゴ類

Vincetoxicum sp. (首山堡)

カモメヅル類

Convolvulaceae 旋花科

Calystegia sp. (首山堡)

ヒルガホ類

花冠二個裂片と同長倒卵形にして先端微凸

Calystegia sp. (旅順)

ヒルガホ頭

葉は線状披針形にして葉脚著しく互形をなす

Calystegia sp. (遼陽)

ヒルガホ類

「ユハンゴ」に近似葉は廣き披針形にして白色茸毛を密生し葉脚は戟形をなし漏

ホ状の花冠を有す

Cuscuta chinensis Lam. (奉天)

オメダラシ

Cuscuta japonica clois. Var. Thyrsoides Engelm. (奉天)

チナシカヅラ

Borraginaceae 紫草科

Gynoglossum sp. (大連)

オホルリサウカ類

Omphalodes sp. (首山堡)

ルリサウカ類

Omphalodes sp. (老虎灘附近)

ルリサウカ類

Omphalodes sp. (大連)

キホルリサウカ類

葉は細小葉として対生する

Lithospermum officinale. (大連?)

ムラサキ

Tournefortia sp. (金州)

スナビキサウシ類

Tournefortia sp. (大連)

スナビキサウシ類

俗名 Sibirica L. など

Verbanaceae 馬鞭草科

ムンジソボク

Vitex negundo L. (柳樹屯)

Phymaceae 蠅毒草科

Phytolacca leptostachya L. (大連)

Tabatacaeae 唇形科

Calamintha Chinensis Benth. (首山堡)

クダマバナ

Dysophylla sp.

ミヅトウノヲ類

Leonurus macranthus Maxim.

キセウツ

Leonurus sibiricus L. (大連)

スハシキ

Lycopus sp.

シロネ類

日本産シロネに酷似す北陵の森林中に於て得たり

Linaria sp. (遼陽)

セナギウソノソノ類

首山堡九十九高地の西南鐵道線路に於て採集したり

Lophanthus sp. (老虎灘附近)

カハミドリ類

Salvia sp. (鐵嶺城外)

フキノタムラサウシ類

日本産「キノタムラサウ」に近似す葉は單葉のものあり又三個の小葉より成る複葉のものあり葉に粗毛を生ず花は本邦産より大にして花序は明かに穗状である

俗名

Salvia plebeia R. Br. (大連)

ユキミサウ

Scutellaria sp. (旅順)

コガネセナギ

Scutellaria sp.

ナミキサウシ類

Stachys sp. (馬鈴薯)

スヌヅヤ類

日本産「マッコウ」に酷似す

Thymus scrylham L. Var. *Valgaris* Benth.

スナギシヤカウサウ

大連小岡子附近伏見臺に多數自生し満開なり

Solanaceae 茄科

Capsicum sp. (首山堡)

Datura alba Nees. (大連)

Solanum sp. (旅順)

本邦産イヌホウソクに似て、葉縁の鋸齒更に烈しく深く缺刻す。

Solanum sp. (大連)

日本種イヌキマンキに類似す。

Hyoscyamus niger L. (大連)

開花中ならぬ葉縁をのみあり、食用に供す。

Scrophulariaceae 玄參科

Siphonostegia sp. (首山堡)

Veronica sp. (大連)

Veronica sp. (北陵)

Orobanchaceae 列當科

Orobanchale sp. (大連富士)

ハダカホウソク類

チヨウセンアサガホ

イヌホウソク類

イヌホウソク類

ヒヨク

ヒキヨモギ類

クガイイサウ類

ヒメトラノヲ類

ハヤウソクホ類

「イロハ」に於て

Plantaginaceae 車前科

Plantago Kamtschatica Link. (大連小學校)

Plantago lanceolata L. (旅順)

Plantago major L. (大連)

Rubiaceae 茜草科

Galium Yermi L. Var. *lactem maxm.* (奉天)

奉天郊外に生ずる。葉面に蜜腺を有し、その花を黄色の花を生じ、甚だ吾人の目を惹きしめる。

Rubia sp. (首山堡)

Dipsacaceae 山蘿蔔科

Scabiosa sp. (北陵)

Scabiosa japonica Mig. の同種か。

Campanulaceae 桔梗科

ユゾオホバコ

ハクサンオホバコ

ヘラオホバコ

タウオホバコ

カンラヤツバ

アカ子類

マツムツサツ類

Adenophora Strica Nip. (皆山堡)

Adenophora sp. (旅順)

Adenophora sp. (撫順)

Adenophora sp. (鐵嶺)

「ペンナ」に類似す、葉は硬直にして鋸齒鋭し、

Platyodon grandiflorus DC. (旅順)

Compositae 菊科

Artemisia sp. (鐵嶺)

葉極めて細小にして花は日本産「ヨモギ」に近似す、

Artemisia sp. (遼陽、金州)

日本産「ヨモギ」に類似す、

Artemisia sp. (旅順)

Artemisia sp. (鐵嶺)

葉は披針形にして明瞭なる鋸齒を有し、其の裏面には純白の茸毛を生ず、花序は葉腋より生じ、白き茸毛を以て掩はる、

タヂシヤジン

ヒメシヤジン類

ツリガキニンジン類

ソバナ類

キキヤウ

ヨモギ類

ヨモギ類

ヨモギ類

ヨモギ類

Artemisia sp. (旅順)

Aster fistiginatus Fisch, et Mey. (皆山堡)

Asteromaea sp. (旅順)

Achillea sp. (撫順)

Bidens sp. (大連西公園)

葉形少しも日本産センダングサに似ず、羽狀に分裂すること深く、而かも細裂す、其異質は日本産のものに類似す、

Cacalia sp. (撫順)

Centauria cyanus L. (大連)

Cirsium sp. (鐵嶺)

Cirsium sp. (大連)

葉は長橢圓形にして、葉縁に鋭き刺を有す、表裏ともに粗毛を生ず、總苞の先端は堅く尖りたる針となる、全形は日本産「アザミ」に近似す、

Chrysanthemum sp. (大連)

Cicholium Endvia L. (大連西公園)

Krigeria sp. (大連)

カハラヨモギ類

ヒメシヤジン類

ヨモギ類

ノコギリサウサ類

センダングサ類

ヤブレガサ類

ヤブアルハギ類

アザミ類

アザミ類

シロソウ類

キクダサ

ヒメカサヨモギ類

日本産ヒメムカシヨモギに同じるか

Erigeron sp. (蕨類)

日本産「コノハヨモギ」に同じるか

Echinops sp.

Hieracium sp. (蕨類)

Gnaphalium sp. (大連)

日本産「キ・コノハ」に同じるか

Lactuca sp. (大連)

Lactuca sp. (大連)

Lactuca sp. (首山堡)

Lactuca sp. (大連)

Amphelis sp. (奉天)

Pteris hironoides L. Var. *japonica* Rehl.

Soorzonera hispanica L. (二龍山, 大連, 首山堡)

Sonchus sp. (旅順)

ヒメダヨウソク類

ヒゴクイ類

ヤナギタツボ、類

チ、ユズサカ類

ニガナ類

カハラニガナ類

ヤマニガナ類

ヤクシササカ類

カハラハ、コ類

カサヅリナ

キバナバラモソクソ

ハチジヨウソクナ類

Taraxacum sp. (大連, 首山)

日本産「タラシ」に同じるか

Xanthium Strumarium T. (大連)

Tanula sp. (大連)

Gerbera amandria Sch. Bip. (旅順, 西太陽湖)

Eupatorium sp. (首山堡)

タラシ、類

ラナモミ

ナガバノラゾクソ類

センボンセン

ヒヨドリバナ類

遼東修學旅行地に於ける地質の見聞

本三博 柳沼彌右衛門

左の記事は本校地質學教授佐藤傳藏先生の校閲を経たるものなれば此旨を豫め記して置く。

(一)

日露戦争の結果、日本政府の司配を受けることとなつた清國盛京省の南端の關東州に行くものは、何人も皆大連に上陸するであらう。二三日の間蒸氣の杜林を動かす

音に聞き飽き、石炭の烟に咽び、機械油の臭に苦み、青きが如く白きが如くにして一種凄惨の趣ある海の水に對して、詩的感想のありたけを、使ひ盡し、其上に船内の事務員や水夫などの横平なる仕向に懲々したものは、何人も大連附近の島か山かの行先の水平線上に雲の如く髣髴として現はるゝを見て、甲板に足の踏み立たぬやうな感じがするまでであらう。然して船が大連灣の中に入り、大連港の埠頭に近づくと、大連の市街を眺め、大連灣の周圍に聳えて居る餘り高からぬ多くの山を望むるとき、一種の失望の感じて己を打ち沈ませるやうな思がするに相違あるまい。大連附近の山には樹木と云ふ樹木が一本もなく、唯細い寂しい草が山面に疎に生ひて居るばかりで、所々に白と黒と赤とを混合したやうな色の極めて光澤に乏しい岩石が露出して、山の風景の乾燥無味の度を一層ひどくして居る。日本のやうに至る所の山は緑に水は清しと形容するやうな土地に育つたものは、假令陸地に渴して此港に着いたに拘はらず、一味の失望の感じを催すのも無理はない。

大連地方の一帶の風景が斯様に無趣味なのは、何のためであらうか、樹木を其上に生へしめないで、生へしめた草さへも、斯様に見すほらしく寂しいものとなして居る。此地方の地質構造は何様であらうか、何様な岩石が何様にして此邊の地質を造

つて居るか、此地方の地質と風景とは何様な因果の關係があるではなからうか、此等の問題に對して詳細の答を與へるとは、自分等の出來ぬことである。自分等は地質の實地調査をやるために遼東半島に渡つたのではなく、日露戦争と云ふ世界的歴史の空前の大戦争に於て、日露兩軍の銃丸砲彈を飛ばし、劍戟を閃かして、兩軍の兵卒や將校の面々幾萬の血を染め流し、故郷に居て安否を氣遣ふ眼を天涯遙に揚げて居つた幾百萬の家族遺族の悲泣慟哭の的となり、閉氣なる物共の旅行列や提灯行列の狂氣めいた騒の本となつた、壯烈無雙悲惨至極の活劇のあつた場所を實地に見傍ら、世界文明の人士より人間以下の劣等動物の如く見られて居る支那の人民の有様や其住居して居る土地の状況を少しでも見届けたいと思つて、遼東半島に行つたわけ、それを僅か十二日位で百數十里に亘る廣い土地と、幾つかの大戦場と、幾つかの都會とを見廻つた次第であるから、見廻つた土地の地質の調査などの出來なかつたのは勿論である。我國とは最も關係の深い否事實に於て、我國の領地となつて居る面積も餘り廣からぬ、關東州の地質をさへ詳細に學術的に調べることは、できなかつた否殆んど調査に手を下さぬと云つてもよい位である。夫故、此地方の地質に就て文に書くとしても、自分等が實地調査をやつた結果を書

くのではなく、唯、岩石の標本を採集する序に少しばかり見たことや、散歩の道すがら知りたることや、又は戰場を見るときに目に止まつた位のことを書き得るに過ぎぬ。夫以上の學術的のとは皆農商務省の地質調査所より出た某報告書に據つて書くのである。尙ほ其上に大連の關東州民政署の技師理學士吉田氏の講演と他の書物をも少し参考した。旅行中の地質見聞録としては實際に見た事實と人より聞いた多少の報告的のもの、此等を本としての多少の推定とを記載すれば充分なわけであるが、夫だけでは餘り簡單で物足らぬやう感じもするし、此記事を讀んで呉れる人に取つても餘り面白くはなからうし、又自分等は人の報告や書物の中より、恰も蜂が蜜を集める如くに種々の事實を拾ひ取り、此等を以て一つの纏つた文句に作り上げると云ふとは、自分等のやうに事實の蒐集蓄積に半ば以上の精力を費さなければならぬ學問をやつて居るものには、多少稽古になるでもあらうと思ひ、且つ關東州は餘り土地も廣くないから、自分等の見たての外に人の報告や書物に據つて關東州全體の地質を比較的詳密に記載する積である。關東州以外も自分等の旅行した土地だけに就ては前と同じやうな道方で極めて大體の地質を記載する積である。自分等は未熟淺學のもので、實地上の經驗にも極めて乏しいのであるから、

地質學者とも云はるゝ人は勿論思ふ筈はないが、地質學に縁の遠い素人の人々でも此を以て完全なる地質的記載であると思つたならば、それは大變な間違である。自分等は唯自分等の眞と思ふことを記載するだけで、自分等の見識と力量との屈かぬ所に對しては如何ともする事ができぬ。

大連に上陸したものは誰しも支那風の建築物や、西洋風の建築物を見て奇異の感を起こすであらう。特に注意して見るまでもなく、此等の建築物の土臺は無論石である。又幅二十間以上もある人道車馬道の區別を明に設けた市街の道路の極めて堅固に築造せられてあるのに氣が付くことであらう。此等の道路は真中高く、岸に至るに従ひ少しづつ低くなつて、道路の全體の形は恰も汽車の屋根の如くでもあり、蒲鋒の彎曲面を蒲鋒の平い方向と直角に引き延ばした如くでもある。そして恰も其彎曲面の盡きる兩岸の所で突然切り上げたやうに一尺ばかり道を高くとある。是が兩側の人道で其幅は二三間位はあらう。故に道路の全體の有様は東京の銀座通りの如くであると思へばよい。人道と車馬道との境の所は低くなつて居るから、自然に道路の排水の渠となつて居る。抑此渠は五寸乃至一尺立方位の岩石を以て造られてある。道路の真中でも少し土を剥けば直に岩石が出て來る。偕て此

堅固なる街路を西の方に辿つて大連の町深く入つて行つたならば、人馬絡驛織るが如しと云ふべき賑かなる大廣場に達し、そして右手に當つて西洋風の煉瓦の家屋の壯大なるものが、數多く嶄然として立ち並んで居るを見らう。此等の建築物を見ると、恰も東京の駿河臺にあるニコライ會堂を見るときと略同様の感じが起ることであるが、此等は無論露西亞政府のものであつたので、今は日本政府の所有物となつて居る。此建築物のある町に行つて見ると、特に著しく岩石の多いのに眼が付く。人道は東京の銀座通と同様岩石の敷詰で、自分等は底に多くの鐵を打ち着けた靴を穿いて此上を歩くのであるから、歩行の震動が頭まで傳はつて一種無類の不快感が起る。此不快なる道を無理に歩きながら左右の煉瓦の塀を見れば、其塀の礎石も道路の石と同様のもので、嚴めしい大きな建物の礎石も矢張り同じものであるらしく見える。岩石の産地に遠い所では何程露西亞人が雄大の氣魄に富むとしても、斯くも豊かに岩石を用ゐられるものではあるまい。大連の西に小崗子と云ふ小さな支那人の町があるが、此町に行つて見ても、岩石が随分多く建築に用ゐられて居る。町で商賣をせぬ家では家の周圍に塀を築いて居るが、其塀は下より上まで盡く岩石を以て積み上げられたものである。此町の家は大抵は土若し

くは煉瓦と石とで造つたものである。小崗子の北方の海岸に露西亞の舊製鐵所がある。其中の重なる工場は長さ三十間位幅さ十間位高さ數十尺の大きな建物なるが、此建物は四壁盡くセメントで膠着せしめた岩石より成り立つて居る。以上述べた通り、大連より其近傍の小なる町に至るまで、大小の家屋より道路垣根に至るまで、岩石が随分豊かに用ゐられて居るが、此等の岩石は大抵石灰岩であつて、道路などには間々粘板岩や珪岩なども見受けける。然して花崗岩とか安山岩とか云ふやうな火成の岩や、日本の都會によく見る大小の馬鈴薯を集めたやうな砂礫の積み重ねなどは、絶對的に見ることができぬ。是だけ述べたなら、中學校で少し岩石のことを習つた人は、直に此地方の地質が水成岩より成り立つて居ることを推定し、又礫を作る原因たる河流に乏しきことを知るであらう。

珪石 Quartzite

珪質砂岩 Quartzose sandstone

粘板岩 Clay-slate

礫岩 Conglomerate

礫岩と石灰岩は主として大連の西方より出で、石灰岩は大連の海岸にも見出さるゝと云ふことである。其他の岩石に就ては多少實際に見たことであるから少しく委しく述べて見やう。

大連の町の略中央に常磐公園と云ふ名前のみ美しい矮小の松の樹の數十本塵埃の裡に辛うじて其縁を現はして居る公園があるが、此公園の裏手に出たならば忽ち深い河に出會ふであらう。されど能く見れば是は河ではなく、實は幅幾十間深さ幾十尺とも云ふべき大きな溝である。溝には水があるのでなく、幾條の鐵道線路が敷設せられて居る。此溝の兩壁となつて居るもの即ち河の兩岸は土や砂ではなく、黄褐色を呈する粘板岩の人工の斷崖である。即ち此廣大なる溝は粘板岩の層を切り抜いて造つたものである。露西亞の人間に對して常に畏怖の情を懷いて居る人だちは、餘り驚くにも足らぬ工事ではあるが、露西亞人の氣風は誠に規模雄大であるなど、嘆辭を發するであらう。兎に角此鐵道線路の邊を一見すれば、大連の町の官衙も料理店も雜貨店も便所も凡て粘板岩や其他の岩石の上に建てられて居ることに推定が付き、サリベルを腰に提げた陸軍の大佐も内情を知らぬ人間が此

地の花など、稱して居る醜業婦も、五體垢だらけの頭の後部に馬の尻尾を丸めて縛つて置くのかと思はるゝ支那人の苦力も、馬も牛も凡て平等一様に、此粘板岩の類には僅かに薄き土を隔てゝ其上に起臥し、呻吟し、馳驅し、焦慮し、煩悶し、妄想して居るのである。そして日本國民の大飛躍大膨脹など、稱して居る。

前に述べた煉瓦の高屋の凄いやうに並んで居る所は露西亞町と云ふのであつて、此町の西端に大連尋常高等小學校がある。此小學校は今は日本人の兒童を集めて教育して居る所であるが、もとほ小學校ではなく、露西亞の教會であつたと云ふことである。偕て此小學校の西南は直に海であつて、此所より海に降るには、粘板岩の斷崖を降らなければならぬ。此斷崖の所に行つて見れば、其の走向が略ぼ東西であること、及傾斜が南の方に二三十度であることは、必ずしもクリノメーター (Clinometer) 岩石の走向と傾斜を測る器械を用ゐなくとも解る。此邊の粘板岩は黒いのに青みを帯びたやうな色で頗る脆い。

大連市の西南の隅に西公園と云ふ公園がある。此も勿論露西亞人の造つたもので、ハリエンジと云ふ樹木が樽蒼と繁つて居て、公園の真中には濁つた水の少しばかり流れて居る小さな川があるから、樹木と水とに乏しい此地方に於ては唯一の樂

園であらう。此公園の東に幅さ十四五間もあらうと思はれる立派な一條の道路があつて南方の山の間を目かけて走つて居る。此山の間を見當に進んで行けば此道は恰も深い溝の底の如きものである。高い山と山の間は低い所を切り抜いて造つたために、道路の全形が恰も深い溝の如き有様となつたのである。此溝は數町の間續いて居るが、其兩壁は兩側の高い山の裾の断面で、幅さ一尺乃至四五尺、長さ二三間より五六間の材木を斜に立て詰めて壁を造つたやうな有様である。此は實は材木ではなく、長さの知れぬ大きな岩石の板の小口の行列である。此等の小口は色の黒い硅質砂岩、黄褐色或は黒青色の粘板岩、青白色の硅岩などであつて、此種々なる岩石板の小口が互交に數町の間、凡そ三十度位の角度を以て南より北に傾いて斜に立て並べられたのが、此道路の兩側の壁である。此所でクリノメーターを出して其の走向と傾斜を測つて見たら、次の如き結果が出た。

Strike N 72° E

Dip S 30°

即ち走向は北より東に七十二度であるから、正東西の線よりは地に $50 \times 70 = 18$ 即ち十八度傾いて居るのであるが、略ぼ東西と云つてもよい。傾斜は南に三十度で

ある。猶て此道は老虎灘と云ふ所に行くのである。大連の南は地勢が少しつゝ高くなつて終に高さ二百迷突位と思はるゝ裸體の山となる。此山を東南の方に距ると一里ばかりで海岸に出るが、此海岸に戸數の數十ばかりな小さな漁村がある。是が老虎灘で、露西亞人は其附近の海岸に要塞を築いたため、此要塞と大連とを連絡するために斯くも立派な道路を築造した次第であると察せられる。此道路を辿つて老虎灘に行くとき、老虎灘に大分近くなつたと思はれる邊で、道が海のために妨げられて少しの間方向を東北に轉ずる所がある。此所では右手は深く山と山との間に灣入せる小波瀾の針を落しても見え透きさうな清かな海で、左手は高さ數十尺の硅岩板の小口の壯快なる絶壁である。そして走向と傾斜は實際に測つては見ないが、前に見た小口の行列の場合と略ぼ同様であるやうに推察した。老虎灘のことは別に記す人があらう。自分等は此所と岩石の観察上得たる所がないから記さぬ。

老虎灘より大連への歸りには道を變へて前に述べた大連の南山の東に出た前の岩石の行列のあつた溝道は、此山の西に又一つ山があつて更に其山の西の裾を切り抜けたものである。南山の東に又山があつて、自分等の歸つた道は其山の西の半

腹を帯の如くに通つて居る。此帯の所で南山を望むるとき、其半腹に於ける岩石の絶大なる露出に驚いたるして其露出が硅岩板の小口の行列で、此所よりは恰も廣大なる岩石の白板に斜に數多の線を劃したやうに見えるのには一種颯爽なる痛快の感じを催した。此露出は長さ幾丁高さ幾十尺あるか、此は天然の露出ではなく、露西亞人の人工によりて出來たものである。

露西亞人は大連の市街や港を築くのに、此山の岩石を切り崩した。夫故大連の道路や、棧橋や、建築物は其骨を此山より譲り受けたのである。此意味に於て大連市は此山の息子である。自分等は此所に岩石の標本を採りに行つたが、實際近いて見れば、黄褐色の粘板岩の薄層が青白い硅岩の層中に少し交つて居る。日本人は今も尙ほ露西亞人の此古竈から盛んに岩石を切り出し、驢馬と騾馬と合せて五六疋ばかりつけた彈機のない支那馬車を雇うて石屑を大連に運ばして居る。此は大連の町の架橋築道等の用に供せられるのである。

自分等は始め大連に上陸したとき、道路の骨や建築物の土臺となつて居る岩石が凡て石灰岩、此は大連の西方の海岸より切り出したさうであるや、硅岩などであるのを見て、此地方の地質は凡て水成石より成り立つて居ることであらうと推察し

た後常磐公園の裏手、小學校邊の断崖溝の形をなして居る老虎灘道路の兩壁、水滸き入江の傍の絶壁及大連の南山の絶大なる人工的露出を見るに及んで、前の推察の間違ひないことを確めた。其上此等諸所の岩石の露出を觀察し、次の如き推定を下した。そして此推定に殆んど間違のないとは學者の研究に照して見てわかつた。

大連の市街地及市街の南方の高地の一帶は硅石、硅質砂岩、粘板岩等の種々なる水成岩の大小無數の廣大なる板より成り立つて居る土地であつて、此等の岩石板の面は略ぼ東西に走り、略ぼ三十度の角をなして南より北の方向に傾いて居るものである。

故に幅數十間、長さ數千間の厚さの一定せぬ廣大なる岩石の板が、恰も棚にノットブックを立て並べた如く、數里の間斜に立て並べられて居ると假りに想像し、此等のノットブックの上の方に向いた小口を不平均に切り取つて、大小種々の凹凸を造つたとしたならば、大連地方一帶の地質構造の有様を明瞭に頭に畫くことができ、るであらう。西部は山で、西部は谷又は平地である。大連の市街は其西部の海に接した所に建てられたもので、南山は其南方に位する凸部である。借し此等の岩石のノットブックの下には恰も棚の底板の如く、水成岩より熱のために變成した片麻岩

と云ふ岩石が大磐石となつて堂々乎として横はつて居ると云ふことである。大連の市街建造に少からぬ効を奏して居る石灰岩は今述べた地層中には發見することができない。是は前にも述べた通り地質の稍異つた大連市の海岸及其他西方の海岸より取つて來たものと云ふのである。

水成岩若しくは岩石の層など云つたならば、少し地質學の門を覗いたものは、何人も其中に何等かの動植物の化石を發見しなかつたかと問ふとであらうが、自分等は不幸にして否殆んど探さうなどはせぬために、此等の岩石の地質學上の年代を定むるに最も必要なる化石を發見することができなかつた。されば勿論此地方の地質が何の時代に屬するかに就ては他人の研究の結果による外はない。

(二)

自分等は汽車に乗つて大連より旅順に行つたのであるが、汽車は大連を發すれば直に前に述べた地質とは異つた地質の土地へ走り出るのである。非常なる快速力を以て飛んて行くのかと思はれる岩石の露出を、汽車の窓より電光一閃の間に覗いたのであるから、沿道に何様な岩石があつたやら少しもわからぬ。唯南關嶺を出發して西の方へ走るとき、線路の側の畑の岸に露出して居るものを覗いたときは

は石灰岩であるらしいと思つた。走向傾斜も大連地方のものと略ぼ同様のやうであつた。又旅順に大分接近してから、岩石板の小口が行列をなして居る多くの絶壁を是も電光一閃の間に極めて急速に覗いた。岩石は何であるか解らぬが走向や傾斜は前と餘り異なるまいと思つた。

汽車の行先に當つて數多くの山が、恰も國府津邊の汽車の中より箱根の山々を望が如く、眼界廣く展開して來る。此山々が旅順の砲臺のある所で、世界の歴史に空前の悲惨なる戦争の行はれた舞臺である。難攻不落、堅固無双と云はれ、我幾萬の同胞を殺して、鮮血の流れに天外の月光を宿らしめた凄慘至極の紀念地であるとは人の能く知つて居る所である。自分等の頭には山上より轟く砲聲、山腹を震ひ出す叫喚の呻きを聞くやうな感じがして、彼の山々は何様な岩石より成り立つて居るかなど、云ふ其んな冷靜な疑問を起す程の餘裕がなかつた。けれど此等の山に登り其頂上に築かれた砲臺や、頂上近く掘られた塹壕などを見るに至つて、岩石に對する興味も多少は起つた次第である。

何人も知つて居る通り、旅順には露西亞人の立てた新市街がある。此所には所々に凄いやうな煉瓦の建物が匠人のやうに走つて居る。此等は露西亞の人間が東洋の

人少くとも日本人を苦しめるための道具として建てたものであつて、中には普通人民の家もあらうが多くは兵營や官廳の如き露西亞政府の野心の結塊たるものである。此等の家屋は何様な岩石を用ゐて基礎としたか、其間にある道路や溝は何様な石で造らへられたかはわからなかつたが、大方は此邊の山を構成して居る岩石と同様のものではあらう。

自分等は西太陽溝、爾靈山、黄金山、聖臺、二龍山等の砲臺堡壘に登り、此等の砲臺堡壘の上で、此等以外の旅順の砲臺堡壘を陸軍の將校に指示して貰ひ、所謂難攻不落の砲臺がどれくであつたかと云ふことを知つた。外の山は知らぬが、自分等の登つた砲臺や堡壘のある山は其實質は皆白色の硅岩である。硅岩のことは前には説明はしなかつたが、是はもと石英の砂の塊であつたものが、其後壓力等の作用によつて其構造の有様を變じ、現在に於ては石英の砂の塊であることがよくわからず、素人の目には石英其物であるやうに見ゆる岩石である。されば其質は石英と同じく頗る硬ければ、之に對して種々の人工を加へることは中々困難であるに相違なく、粘板岩の如き碎け易き岩石とは大變な相違であらう。然るに露西亞人は此堅硬なる岩石に對して實に絶大なる工事を加へて居る。其は砲臺を築くために、此岩石を

切り崩したことは云ふまでもなく、砲臺の前方に、恰も倒にした播鉢の頂の周りに溝を附けた如く、山の頂の邊に大きな塹壕を掘つて居ることである。日本軍が幾多の生靈を屠られ、最後に正攻法を採用して奪取することの出来た二龍山の塹壕などは、多くの塹壕中の最も大なるものであるが、深さが三丈もあり、幅も五六間はあらう。此塹壕が、芝の愛宕山よりも一層高く大きくして、飲料は一層緩慢な山の頂の邊に、恰も片假字の「ヨ」の字の有様に掘られてある。此様な大きな塹壕を土に掘つたのではなく、硅岩其者の大塊に掘つたのであると云つたら、少しは人が驚くであらう。數多くの砲臺には、悉く其前面防禦の道具として、斯様な恐ろしき塹壕が掘られてある。容易く人を賞讃し、一寸の事にも中々の驚き性である日本人は、此等の工事に對し定めし驚嘆の辭を發することであらう。爾靈山には砲臺はないが、頂上の周りには幅も深さも三尺位の散兵壕を穿つて居り、最頂上には今は崩壊してしまつて跡方もないが、此壕より掘り採つた岩石で、大小の堡壘が築かれてあつたさうである。此岩石も無論硅岩で、山の頂邊一面に、其岩片が散ばり、其間に人間の肋骨や大腿骨の折れたもの、頭骨の碎けたもの、脊椎骨の離れたものなどが、所謂白骨となつて飛散して居る。日本軍が敵の防禦工事の備はれる此險峻なる爾靈山をとるために、

何様な辛苦をしたかは殆んど想像に絶する。さればこそ二〇三と云ふ数を表はす外には何の意味もない文字が、乃木將軍の悲痛なる詩的琴線に觸發して爾靈山と云ふ如何にも意味ありげな文字に代へられて、日本人の頭に大なる印象を與ふることとなつたのである。

自分等は單に岩石の人工的露出を見たばかりで、少しも調査と云ふことはしなかつたが、旅順邊一帶の地質が硅岩より成り立つて居るに相違ないと云ふことは自分等の新戰場見物のため登つた多くの山々が皆硅岩であることによつて推察がでさる。實際學者の調べた所を見ても其通りで旅順近傍の地は一面に硅岩を其骨として居るのである。此岩石を骨とした山々には樹木が一本もなく、唯毛のやうな細い草が極めて薄く生いて居るばかりである。されば砲臺のある山々を見渡すときは是のみでも少からぬ殺風景の感じを催すことであるが、其上大戦争の悲惨なる光景さへ聯想に上つて來て、此邊一帶の風景の乾燥なる上に悲慘てふ詩的の情趣を添ふるのだ。

(三)

大連を起點として西の方へ、旅順よりは西北方に當る土城子と云ふ村の邊へかけ、

高まりの南方に當つて弓形の一線を引いたとすれば、此線の南方即ち弓の高まつた方に面する部分の土地は學者の研究によれば、同じ地層に屬する土地で有て之を大孤山層と名ける。全體の構造を總括して云へば、長さ數里、幅幾百尺厚さの種々なる廣大なる岩石の板が恰も煎餅を立て列べた如く、十數里の間、南より北の方に傾いで立て列べられてあるとし、巨大なる天人が巨大なる斧を以て、此多くの重ね列べた煎餅の天に向つた端面を削り取り、叩き込み、或は斧の刃を打ち込みなどして、大小種々の凹凸や、不規則なる窪みなどを作つたと想像すれば、大連邊の山も谷も、旅順附近の多くの峻しい山も、廣い平地も、小さな川も、谷も、巖壁絶壁も、荒浪の激して白雪を飛ばす海岸の岩礁も、出來るのである。そして、硅岩、砂岩、粘板岩等の久しき年月の間に、雨風や霜雪などの作用のために、次第に碎けて土となつたものが、此等の山や谷や平地を覆ひ被せ、其上に草や木が生ひ、人間其他の動物が生息するやうになつたとすれば、則ち關東州の最南端の地質構造を想像し得ることであらう。

(四)

前に大連より土城子の邊に引いた弓形の線を南の境とし、西は一面海に向ひ、東は大連灣を受け、大連灣の北海岸より、略ぼ鐵道線路に沿うて、其東を普蘭店まで走る。

一線を劃するときは、茲に金州を中心としたる一帯の土地が出来る。此一帯の土地は恰も啞鈴を押し潰して平たい板となし、兩端の平たい部分を長く引き延ばして、縁に不規則なる凹凸を多く作り、且つ啞鈴は其中心部に於て少し折れ曲がつたやうな形をして居り、其曲がつた方が遼東灣の方に向き、反對の側が大連灣の方に向つて居る。金州は啞鈴の真中の手に握るべき所にある。偕て此變形啞鈴の形をした土地は泥灰岩と石炭岩とより成り立ち、上中部支那層に屬する地層である。自分等は金州の南山と、金州より柳樹屯と云ふ大連灣に臨んで居る村に行く途中で多少泥灰岩の露出を見、石灰岩の破片の小さな川の中に流れて來て居るのなどを見たばかりである。日露戦争の始めに於て日本軍が鐵條網と機關砲との慘毒を蒙つたのは、泥灰岩より成り立つて居る金州の南山である。餘り高くない楯鉢状の山が五つ六つ相接近して金州城の南に高まつて居るのが此南山で、南の方は段々山に續き、北は平地で、東も西も海である。此屈強の場所を築いて待ち掛けて居た所に日本軍は北方金州方面より向つたのであるから、幾千の人間の殺されたのも無理はない。南山の頂上に登り、其所に立て、ある忠魂碑に向ふときは、何人も我軍の士卒の慘烈なる最後を思ひ浮べ、其忠勇に感じて涙滴の眼窩を沾すを覺ゆるであらう。

偕て此金州を中心とした變形啞鈴状の土地は、前に述べた通り、殆んど全部泥灰岩と石灰岩より成り立ち、走向は略ぼ東西で傾斜は南であるが、其傾きの度は何度であるか知らぬ。近州の都會地附近の土地及南關嶺の南の少しばかりの土地は第四紀層である。其他火山岩である斑岩と玢岩の此地層を銜き抜いて露出して居る所が二ヶ所ある。

金州の東に大和尚山と云ふ山がある。此山は關東州第一の高山で、樹木も多少繁つて居り、屹然として高く金州停車場の東方に聳えて居る所は何となく力強いやうな感じがし、又大連より大連灣を隔て、此山を望むときは、房州の游泳場より富士山を望む程の莊嚴の感じは起らないが、此感じを餘程縮めし小規模のものにしたら大連より此山を望むときの感じとなるであらうと思ふ。晴天の日大連に入港するものは、先づ西方の水平線上に土を落したやうな黒き塊を見出すであらう。此が大和尚山である。又大連を船に乗つて去るとき他の多くの山が水平線以下に隠れてしまつても、獨り中に隠れずに名残を惜んで居るのも此大和尚山で、船の大連港に出入する毎に船客に喜ばれたり惜まれたりする興味多き山である。

此山に行つて見れば、黒雲母片岩、白雲母片岩等の結晶片岩を見ることが出来る。云ふことであるが、行つて見る暇がなかつた。大和尚山の主部を構成する岩石は角閃片岩であると云ふことである。金州停車場より望めば、岩石が幾重にも層をなして此山を造つて居ることがわかる。

此山を起點とし、西方金州より普蘭店に至る鐵道線に沿うて其東方に引きたる線を以て前の上中部支那層に接し、東の方海に面した長方形の土地は凡て片麻岩より成り立つて居る。此長方形の土地は長山列島の對岸なる貔子窩より普蘭店まで引ける線、即ち關東州と清國の土地との境界線を以て北の方更に廣大なる片麻岩區に連つて居る。小さな長方形の片麻岩區には花崗岩の貫通露出が三ヶ所、玢岩及斑岩の露出も三ヶ所ある。又此區域の西北の隅で普蘭店の東に當る所の極めて小さな區域は北方より廣がつて來て居る下部支那層の一端である。此層は砂岩と粘板岩とより成り立つて居る。併て此長方形の區域の片麻岩層は略ぼ東地より西南に走り、傾斜は東部に於ては東南西部に於ては西北である。夫故片麻岩層の大體は恰も馬の鞍の如き有様で所謂背斜層を爲して居るのである。前記の片麻岩區の東南に屈曲の頗る多い海岸の一區域がある。大連灣の東北の岸は

此の區域である。此區域は大連地方と同じく大孤山層に屬し、唯其中央部煤層と云ふ所に石灰岩が恰も腹の臍の如くにポツチリと露はれて居るばかりである。

(五)

今述べた所で關東州の地質の大體はわかることであらうと思ふが、便利のため茲に總括して説明し、前に落したことをも補つて置く。關東州の大體の地形は矢張り陸鈴を押し潰したやうな有様である。兩端の平たい部分を少し引き延ばし之を東北より西南に向つて横へ、其周圍を種々に屈曲した線となせば、略ぼ關東州の地形を想像し得ると思ふ。但し陸鈴の西南端は東北端よりは少し面積が小さい。陸鈴の真中の細い所が金州より南關嶺邊に至る間であつて、其東が大連灣、西が金州灣である。大連と旅順は西南端にあり、貔子窩、普蘭店は東北端の二つの隅をなして居る。

陸鈴の西南端に於て東南部の地質は大孤山層、西北部の地質は上中部支那層である。陸鈴の東北端に於ては西部は上中部支那層、東部は片麻岩區、西南の小部が大孤山層である。以上の地質の間に第四紀層、玢岩、珍岩、及花崗岩の露出、石灰岩層、此は地質上何の時代に屬するかわからぬ。下部支那層等が所々に點在して居る。此等は眞

の點在と云ふに過ぎぬから關東州は大孤山層で上中部支那層と片麻岩より成り立つて居ると云つて差支はなからう。大孤層と上中部支那層とに於ては走向及傾斜は凡ての部分を通じて畧ぼ同様で、走向は畧ぼ西北より東南に亘り、傾斜は西南である。片麻岩區に於ては走向は東北より西南に亘り、傾斜は西と東で背斜層をなして居る。上に述べた凡ての地層を構成して居る岩石の種類を茲に更めて列挙して見れば次の如くである。

- 大孤山層 Taku-sian series
- 硅岩 Quartzite
- 硅質砂岩 Siliceous sandstone
- 粘板岩 Claystone
- 上中部支那層 Middle and Upper Sianian series
- 泥板岩 Shale
- 石灰岩 Limestone
- 下部支那層 Lower sianian series
- 砂岩 Sandstone

- 粘板岩 Clay-slate
- 片麻岩系 Gneiss system
- 片麻岩 Gneiss

此外此等の水成岩を貫通して花崗岩 (Granite) 斑岩及珍岩 (Porphyries and porphyrites) が露出して居る所が幾ヶ所がある。

以上上中部支那層と下部支那層とは「カムプロシリア」紀層 (Cambro-silurian Period) と云つて古生代 (Palaeozoic Era) 中の最古層に屬し、片麻岩は太古代 (Archaean Era) の最古層に屬して居る。太古代は地質年代中の最古のもので古生代は其次の年代である故、關東州の地質は地質年代中最も古き時代に屬するものと言ふことが出来る。是で關東州の地質の記載は終つた。之を記するに當り大連近傍のことばかり委しく書いて他の地方に就ては其の總括に過ぎないから、記載の仕方は頭が大きく尻が小さくて所謂龍頭蛇尾の趣がある。是は大連近傍に就ては少しは實地の觀察をやつたが他の地方に就ては實地觀察を殆んどやらないためである。實地觀察をやらないうちに實地觀察の記載をなすことができず、學者の研究によつて單に其結論だけを書いたのである。

最後に讀者諸君に一言して置くが言までもなく關東州と云へば我日本の國民に取つて随分重大な關係を有する土地である。此土地が日本の意の儘になるとならぬことによつて殆んど日本の死命に關することがあるので、此土地は政治上に於て日本の死活問題を左右するのである。そして日本の死活問題は即ち東洋の運命問題である。世界の地圖の上では粟粒程もない土地であるが、此土地が若し世界列國の外交上争鬪搏奪の的となつたならば、其時は東洋諸國の運命の動搖し來る時である。争の結果若し此土地が或一國の所有となれば、其影響が直に日本に及んで來るとは日露戦争の經驗によりて略ぼ明な事である。生産業貿易業などの點から言つたならば餘り有望の土地でもなからうが、日本が拮据經營して天然の不便を除去するの曉は知らず軍事上から云へば東洋の運命を保證して居る無類肝要な鎖鑰である。劍や鐵砲の力でなければ充分に平和の保證の出來ぬ今日の世の中に於ては、専門家はかりでなく何人も軍事に就て多少の注意をすることをあらう。然して今日以後の世界に於ては、軍事も勿論其他何事に就ても科學上の知識を土臺として活動せねば到底競争場裏に立つことが出來ぬと云ふとも何人も知つて居る所であらう。されば東洋特に我國の運命に大關係を有つて居る關東州の地質の極大

略の有様を科學的に知つて居ると云ふとは、日本の地質の極大畧の有様を知つて居らなければならぬと同様に所謂國民の中堅となるべき人々に取りて必要な事であらう。自分等の此記事は誠に未熟なものではあるが幾分か讀者に上述の目的を達せしむることができると思ふ。尙ほ地質圖を見たい人は明治三十九年四月發行の地質學雜誌を見れば附圖として清國盛京省南部地質及鑛産全圖が出て居るから就て見るがよからう。

(六)

自分等は汽車に乗つて旅順から奉天に行つた。夫故途中の地質などのわかる筈はない。關東州内とは別として關東州より北に入つてから唯彼の山の岩石は花崗岩らしい。いや片麻岩だらうなど、よい加減の推察を下したばかりである。夫故自ら觀察したてを書くのできぬのは無論である。偕て汽車が普蘭店より北に出れば、下部支那層の土地に入る。日露戦争史に書き落すのできぬ得利寺の附近に至れば片麻岩の土地であつて、此より北の方蓋平附近までは大方此片麻岩の土地を走るのである。此片麻岩區は關東州の東北部より廣がり來つたもので、蓋平より北

方鐵嶺に至るまでは少し大孤山層に入るともあるが大方は遼河の平原なる第四紀層の土地を走るのである。片麻岩區の土地の模様は花崗岩區の土地の模様によく似て居る。片麻岩は成層岩ではあるが其成分は火成岩なる花崗岩と同じであるから。此岩石より成り立て居る土地の花崗岩區に似て居るとは尤も次第である。實際鐵道の附近にある川の砂などは白くもあり赤くもありて中々美しく、松樹のある所などは海岸ではないが白砂青松の趣がある。得利寺附近は川の砂の白きとや、極く矮小な黒松などの生ひ繁つて居る點に於て一寸我國の中國邊の海岸近き所に能く似て居る。偕て又遼河の第四紀層平原の廣きとは至る所の小なる盆狀の土地を平原など稱して居る我國人には夢想も出來ない事であらう。自分等は此平原を見て始めて大平原とは此様な者であるかと云ふとを知つた。草より出で、草にこそ入れと云ふ歌の文句は日本の大平原である。關東平野の如何にも廣々として果がないと云ふとを表はしたものであるが、此文句のために果しなしと思はれて居る。關東の平原でさへ、筑波山のあるために實際此文句通りにはなつて居らぬ。遼河の平原はさうでなく、實際草より出で、草にこそ入れ、其儘の大平原である。大陸の風が無限の彼方より高粱の海を捲いて來る光景は何たる雄大な趣であら

う。是が冬に入り温度が零點以下何十度にも下るときになつて、淡黒い雲が地平線上に滯り、才壁沙漠の猛惡な烈風赤裸々の第四紀層の平原の上に荒れ廻つて天上高く砂塵を飛ばし來る時の天地の物凄さはどんなものであらう。我忠勇なる幾十萬の戰士は世界に比類なしと云はれた強猛なる露軍と戦ふた上に此の大猛惡大凄慘な遼河平原の寒風と砂塵とをも敵として戦はなければならなかつた。實に此渺茫たる大平原は我國民の永く忘るゝとのできぬものとはなつた。其上此平原が非常なる富力を有する點に於て我國民は特に忘れてはならぬものである。盛京省の富は此平原に醗酵するので高粱とか大豆とか云ふ重要な産物は皆此平原が吐き出すものである。滿州を我國の殖民地としやうとするものは又殖民とならうとするものは決して此大平原を忘れてはならぬ。そして同時に北滿州と渤海とを連絡して貿易上最も重要な交通路なる遼河が此の大平原の中央を北より南に貫流して居ることを忘れてはならぬ。

(七)

奉天は此大平原の上に建てられた都會で、誰も知りて居る通り今の清國の天子の祖先の起つた所である。奉天では南も北も西も凡て眞平な平原で高粱の海の中に

ある村落の柳の小さな森の外は遠望の眼に入るものはなく、誠に渺茫無際の大野であるが、唯東方の一角微かに漣を打つたやうな山が見える。此漣を打つたやうな山は抑も何であらうか。撫順炭山と云へば日露平和條約の正文にもあり、條約以前にも人が聞き傳へて知つて居つて、我國民として此炭山のあることを知らぬ人は殆んど一人もあるまい。自分等の郷里に歸省したとき、いは「の」の字も知らない村落の一野翁が此撫順炭山のことを知つて居つた。して見れば日本國と云ふ意識ある日本國民で、此炭山を知らぬものは殆んど一人もないと云つてよからう。此有名な炭山を自分等は親しく見たのである。漣を打つたやうな山は即ち此炭山である。撫順炭嶺とは云ふけれど、此炭嶺のある所は實際は撫順ではない。炭嶺の北に渾河と云ふ河があつて、撫順は此河の更に北にあるのである。炭嶺は東西に長く亘り、其中央に千金寨と云ふ村落がある。自分等の思ふには、此地方に於ける一番大きな都會が撫順であるために、此炭嶺を撫順炭嶺と名けたものであらう。

炭山は第三紀の地層であつて、岩石には泥板岩 (Shale)、緑色を帯びた砂岩 (Greenish sandstone)、赤色を帯びた砂岩 (Reddish sandstone) 及石炭である。平地に波を打つたやうな山は大方は板岩及上に述べた二種の砂岩より成り立つて居るところであらう。炭

層のあるのは山の基部以下で、炭層の最上面は平地より餘り高くはなからう。厚い炭層の下には片麻岩があり、此片麻岩を貫いて所々に玄武岩 (Basalt) の岩脈がある。と云ふのである。此炭層も岩石と同様第三紀のものであらうと云うとは上の説明によつて推察が付くが、果してさうであるかどうかは學者の説も聞かぬし、別に手掛も得られぬからわからぬ。

此炭嶺の石炭は光澤ある黒色を呈し、質は少し脆い方だ。炭坑の入口の邊に行つて見ると粉炭かと思はれる石炭が堆積せられてあるが、是は質が脆いために採掘したり運搬したりする時に自然に砕けたものを堆積したのであるとのとである。質の脆いと云ふとは、此石炭の欠點であらうが、炭坑内に沼氣の發生せぬとは、其著しく優れる點で、採掘上非常な便利である。自分等の炭坑内に入つたときも、赤裸々で石油燈を點じて入つたのであるが、暗夜室内に石油燈を點じてあると同じく坑内の空氣に何の異状をも起さぬのである。日本内地の多くの炭坑の如く、フンゼンの安全燈を點じて入つても、時として沼氣の爆發を起して、貴重なる人命を害ふと云ふやうなことは、絶對にないであらう。

炭層の厚さは百二十一尺あつて、其間に挟みと云つて、恰も數多く積み重ねた厚い

板の間に薄い白紙を挟む如く、岩の薄層が挟まれて居る。此挟みは何枚もあるが、其厚さは凡てを合して十六尺あると云ふ。夫故純粹の石炭層は百二十一尺より十六尺を減じただけ、即ち百五尺ある筈だ。厚さ百五尺の炭層の幅が一千間長さが凡八里で、之を噸數に積れば五億あるさうである。して見れば一噸の價四圓としても二十億圓採掘の費用に五億圓を要するとしても十五億圓の利益があるから、若し日露戦争で日本の使つた金は正金で目に見えるやうに取り返したいと思ふならば此炭鑛より採掘する石炭を盡く賣拂へばよいわけである。

(八)

奉天に於ては東西南北何れを見ても殆んど山らしき山を見ることができないが、奉天より北の方凡そ二十里ばかりの鐵嶺に行けば山を見ることができる。鐵嶺と云ふのは周圍に城壁を造つた奉天と同模型の都會であるが、奉天よりは小さい。此都會に鐵嶺と云ふ名の付いて居るのは何か附近の山に因んで居り、従つて何か地質學上の材料ともなるべき山があるかも知れないが、果して如何なる因みがあるかは知らぬ。汽車に乗つて鐵嶺の町に着く者は誰でも鐵嶺の町の北方には高い丘陵が横はつて居つてそれが蜿蜒々として東の方に連り去つて居るを見ることがあらう。

此丘陵の西に少し平野を隔て、更に此方よりも一層高い山がある。此東西の兩丘陵の間は遼河が貫流して南方に走り支那の帆船が其中に林の如くに浮んで居る。河の西の山に就ては少しも知らないが、河の東即ち鐵嶺の北の丘で慈清寺で云ふ佛寺のある遊一帯は花崗岩より成り立つて居り其所々に輝綠岩(Diorite)の露はれて居るのを見れば輝綠岩の花崗岩を突き抜いて噴出したものであらう。燒くが如き熱天ではあり連日の旅に疲れて居るから此所以外の山には登ることが出来なかつた。従つて鐵嶺で見たとは上に述べただけである。そして停車場で見る鐵嶺北方の丘陵が如何なる構造を有して居るかに就ては唯其一部を知り得たに過ぎぬ。鐵嶺の町のある所は遼河畔の平地であるから矢張第四紀層であらう。

(九)

自分等は日露戦争中最も大なる陸戦のあつた土地の一つである遼陽をば歸り途に見たのである。遼陽の停車場に下車して東南の方を見渡せば、凡そ一里ばかりを揚て、餘り高からぬ多くの山が、恰も屏風を立て廻した如く、遼陽の町の南東北の三面を周りて居るが、其南方の外れの所に烏帽子形の一つの山がある。是が首山であつて、遼陽攻撃の時我中央軍なる第四軍の最も苦戦した所で有名である。自分等

は此山に登つたのであるが、中々高くて頂上に達する迄には随分息を切らした。東京の附近で云つたら高さは房州の舞山位であらう。全山粉岩又は斑岩で樹木らしいものは殆んど無いが唯岩石の舞蘭した所に巻柏が生ひ繁つて居るのは一種の美観である。山の北面と南面に寺があるが此の寺の附近だけは緑の松が生ひ繁つて居る。我國民が遼陽々と云つて戦の前から戦慄して居つた其戦争は實に此山の附近一帯の地で行はれたとのである。山の頂上より散兵壕の掘つてある低い山々を悉く瞰視することができる。

以上自分等の述べた所は殆んど一種の旅行記とも云ふべきものであつて、讀者も讀んで知らるゝ通り地質の觀察其者のみを記載したのではない。自分等のやつた地質觀察と云ふのは前にも述べた通り一般の風土民情の視察やら新戰場を見ての戦争當時の悲惨なる有様の追懷やら戦争の話の聽講やらの傍やつたものであるから逆も之を地質的觀察など名を附けるとは出来ぬ。幸に先輩學者の研究した結果を記載したものがあつたから大部分は之れにより其に聊かながらも自分等の觀察をも材料として兎に角記載文を書くまでに運んだのである。自分等の地質の觀察のみでは殆んど文をなさぬと云ふともあり、又地質其者のとはかり専門

學術的に書いたのでは一般の人には解り悪く且つ無趣味であらうと思つたために地質に關聯して餘事をも附け加へ又地質の説明をも幾分か通俗的にした積である。其等の事情の結果として地質の材料は極めて乏しひにも拘はらず全體の文が意外に長くなつた次第である。

又一つ斷つて置くとは記載の順序が旅行の順序に一致して居らぬとである。是も旅行記としての精神に反する譯であるが關東州の地質を連續して記載するためには已むを得ないのである。旅行の順序は大連旅順奉天鐵嶺遼陽營口金州柳樹屯大連と云ふのであるが、自分等の記事中には金州と柳樹屯を旅順の次に見たやうになつて居る。營口に就ては地質上特別のことがないため何も書かない。關東州以北は旅行の順序に従つて書いたのである。

農業視察記

本三博 杉浦勝次郎

田川 秀夫

滿州の農業については言ふべきことが甚だ澤山ある。然しながら僅々十數日間に

然も鐵道によりて回覽したるに過ぎぬ故其の一部たるとは勿論のことである。されば蝦屋の前を通つて嗅いだ香位の所を紹介して見やう、先づ

大連の農事試験場此の試験場は設置せられてから、まだ日數も少いとて内地の試験場程には整ふておらぬ然し其の位置がかの有名な虎公園の中にあることと樹木鬱蒼たる中に五六町歩もあろうと思はれる程の地面を占めて彼方此方に野菜物を栽培し、一區域と次の區域との間には果樹が栽へてある。先づ野菜園の中に植へてある者で重なるものを二つ三つかいて見やう。とまとうは大分出來て居た、すいくわ、まくわうりなどは真に見事なものであつた。此處で監督者が親切に案内し色々話してくれた。山東白菜は冬期にきやべつじのかはりに食う爲めに澤山作り、支那特有の赤大根、同白大根、蕪菜も随分作るさうである。其他此邊で出來るものは、んにく、とうなす、えごま、とうがらし、とうもろこし、じやがいも、みずなす、とうがんにん、うがほ、くわなど、其外何でも出來るさうである。野菜物の傍に果樹が植へてあつた其の重なるものはりんご、なし、なつめ、あんず、ふどうなど、でりんごは小形で、可なりうまく、大連市中、果物商人が至る所で賣り歩くのを見た。例の監督者の話によると、ぶどうは頗る多くなつめなども野生のか至る所にあるさうだ。それから石梨

と云つて梅干大の實が鈴なりになつて居た。普通の梨も可なりあつたが何分内地程の地味でないから、餘りうまくない。其外支那玫瑰と云ふ一種のはまなすは果實の色が赤くて、是れから玫瑰酒を作るさうである。此邊の土壤は砂質壤土で、大抵のものは出來るさうだ。又今年春蠶を飼つたが可なり出來たと聞いた。此處では農事試験場に勤務して居る官吏は他方には警官の役目も務めるので、始終公園内を見巡つて居る。大連では公園が大さう丁寧に保管されて居る。尤も公園とて内地のやうな泉水築山に趣好をこめたものではない。單に樹木と雜草ばかりで、其の間所々草花が培養してあるのみである。所で此の雜草は中々貴重なものでも、し折り取つたを警官に見つかると大變だ。と云ふのは、此附近一帶の山野は樹木なく草も殆どはへていない位、従つて水に缺乏を告げて中々草花などは得られない。市中の人家には草花などを作つて居るのは甚だ珍しいのだ。次は

旅順附近、大連と幾ど同様に岩山であつて、一本も樹木らしいものを見へぬ。只村落の四周に柀、菩提樹、黒松、赤松などを間々見受ける。濕地には揚、山毛櫸、赤揚位を見る。果樹としては棗、梨、林檎位である。又支那町に豚を飼養して居る有様が我が内地の鶏を飼うと同様で無数の豚がぐうぐうと云つてうろついて居る。道ばたなどで廢物

に頭をつきこんで餌をあさつておる様は遼東半島到る所見受ける。其外馬騾驢などが小さい小屋に雜居して居る様珍しく感じた。

熊岳城附近の柞樹、汽車の内から見ると到る所柞樹が繁茂して居た。此の邊も凡て秃山であるから小鳥類は極めて少ない。小鳥が少いから山野に於て自然生の柞樹に山蠶を放ちて飼養することが出来る。支那は皆此の放ち飼をするそうだ。此處で遼東半島の養蠶業の一般を書いて見ると

蠶業の盛んなのは、南部盛京省遼河の西部遼東半島及東朝鮮に接する方面である。尤も取引きの盛んなのは蓋平附近である。養蠶の春秋の二季に行ふ秋蠶は春蠶より成績はがよい。其の飼養法は孵化後十日位で木にうつし五六十日を経て繭を作る。其の間小鳥の來襲を防ぐため、あらゆる擁護をせねばならぬ。それから柞樹の作り方は南面やる山腹に五六尺を隔て、植へ十五年位たてば充分繁茂して多くの山蠶を飼ふことが出来る。此の木は約三年毎にさりとて高さを五六尺程に保ち蠶見取扱の便利と枝葉の繁茂とをはかるのである。

放畜遼東半島は到る所放畜が盛に行はれておる所々方々の山腹なり畑のくろにうるついで居る所の家畜は馬騾驢豚綿羊山羊などで騾と云ふのは頭が馬に似

尻と尾とは全く驢其のまゝである。即馬と驢との合の子である。殊に鳴き聲は極めて奇妙で初めは馬の如く終りは驢の如く一種亡國的悲哀の調をおびておる。二百二高地に忠魂を吊ふた時であつた夕陽西に傾き土人が家畜を追ふて家路に急ぐ頃おい例のが一聲叫んだ哀々として餘韻が長く響いて、何とも云へぬ心地古戰場に立つ吾人の心魂をして、轉た感慨深からしめた。話がやゝ岐路に走つたが一體山が草で蔽はれておるので、放畜に好適の地たる事は確かである。農家は大抵若干の豚羊鶏を飼養せぬものはなく、其發達は食用に供するのである。稍富めるものは驢牛馬等を養つて居るが、之れは總べて耕地挽車に使ふので、牛は從來から食用とはしない。飼養食料は豚には粟及高粱糠を與へ別に玉蜀黍及高粱を混せて與へる。羊は牧草の外に黑豆を加へ、牛馬には草の外ときには黑豆馬騾驢には高粱と玉蜀黍とを與ふ。牛には毎月一斗二升、馬には同四斗五升、豚羊には定量なし。豚は一ヶ年兩度分娩し、一回よく十頭以上を産み、生後一ヶ年にして交尾し、牛馬騾驢は隔年一回産み、生後二年にして地を耕し、車を挽くやうになる。支那人の牛馬を扱ふのは實に妙を得て居る。小さい小僧が數匹の番をしるが柔順なものだ。路傍に放つてあつても高粱等を決して食はぬ。又御するにも鞭と掛聲で自由自在に扱つてをる。之